

拔之可也。既而前鋒戰酣。麾下繼之。遂斬城將佐久間盛重。贊氏信先登。遂拔其城。駿河將朝比奈泰能亦拔鷺津。義元既取諸城。以三大高當敵衝。欲得一勇將守之。問之於衆。衆曰。松平藏人其人也。乃使嗣君守大高。而自進陣桶狹。恃勝不設備。信長乘風雨。潛兵自間道襲擊。義元敗死。其諸將聞變皆走。駿河兵在三大高者亦逃亡。

んと欲す。之を衆に問ふ。衆曰く、松平藏人は其人なりと。乃ち嗣君をして大高を守らしむ。而して自ら進みて桶狹に陣す。勝を恃みて備を設けず。信長、風雨に乗じ、兵を潛めて間道より襲撃す。義元、敗死す。其諸將、變を聞きて皆走る。駿河の兵の大高に在る者も亦逃亡す。

● 三河國に在り ● 高嶺中なり ● まはり道

我將士說嗣君曰。今川公既死。我獨爲誰守。不若全兵而歸也。嗣君曰。當審其

我が將士、嗣君に説きて曰く、今川公既に死す。我れ獨り誰が爲に守らん。兵を全くして歸るに若かざるなりと。嗣君曰く、當に其實を審にして然る後に誰を班すべし。急遽解き去りて、事、若し謬傳に出でしならば、則ち笑を天下に貽さんと。水野信元、刈谷に在り。私かに來り告げしめて曰く、信長、義元を獲て、

實然後班師。急遽解走。而事若出謬傳。則貽笑天下矣。水野信元在刈谷。私使來告曰。信長獲義元。將遂復諸城。宜乘夜速去。嗣君曰。水野雖我舅氏。而敵部將也。未可輕信。遣人偵之。報曰。信矣。衆爭勸還。嗣君曰。夜行恐失道。宜俟二月出。彼能來。我亦能戰。頃之月

將に遂に諸城を復せんとす。宜しく夜に乗じて速かに去るべしと。嗣君曰く、水野は我が舅氏なりと雖も、而も敵の部將なり。未だ輕しく信すべからずと。人を遣して之を偵はしむ。報して曰く、信なりと。衆争ひて還るを勸む。嗣君曰く、夜行は恐らくは道を失はん。宜しく月の出づるを竣つべし。彼れ能く來らば、我れ亦能く戦はん。之を頃して月出づ。乃ち兵を整へて東に還る。土寇争ひ起る。本多百助、數々返り戦ひ、今村に達す。將に岡崎城に入らんとす。以爲へらく、義元の在時、未だ我に還すの言あらず。今其死に乗じて之を取るは不義なりと。軍を大樹寺に駐むること三日なり。駿河の戌兵城を棄てて去る。嗣君曰く、彼れ棄てて我れ取るは、可なりと。二十三日、遂に入る。嗣君、六歳に國を出で、十四年にして復た歸るを得たり。

● あわたゞしく撤兵して ● 今川氏死去の報聞りのいひつたへならば天下笑はれ物ならん ● しうと ● 相大將 ● 道路に迷はん ● 土地の監賂 ● 義元の存命中いまだ還附すとの言なし

出。乃整兵東還。土寇爭起。本多百助數返戰。連于今村。將入岡崎城。以爲義元在時未。有還我之言。今乘其死取之。不義也。駐軍于大樹寺三日。駿河兵棄城去。嗣君曰。彼棄而我取。可矣。二十三日。遂入。嗣君六歲出國。十四年而得復歸焉。

士民譁呼。國內諸城主來謁者。相踵於門。而其屬織田氏者。不肯降。嗣君乃將兵攻舉母。梅坪。廣瀨。廣瀨兵拒于拂楚坂。我兵奮擊走之。遂攻沓掛。縱火城下。而還。城兵追躡。大久保忠俊殿而還。鳥居元忠有首功。嗣君欲賞之。以二功狀。辭曰。功狀者。游士所藉口也。臣矢不事二君。莫下用二功狀。爲上也。

士民譁呼し、國內の諸城主來り謁する者、門に相踵ぐ。而して其織田氏に屬するものは、肯て降らず。嗣君乃ち兵に將として、舉母・梅坪・廣瀨を攻む。廣瀨の兵、拂楚坂に拒ぐ。我が兵、奮撃して之を走らせ、遂に沓掛を攻め、火を城下に縱ちて還る。城兵追躡す。大久保忠俊殿して還る。鳥居元忠首功あり。嗣君之を賞するに功狀を以てせんと欲す。辭して曰く、功狀は游士の口を藉る所以なり。臣矢ひて二君に事へず。功狀を用ふるを爲す莫れと。

● 上るこび願ぐ ● よるひろづ ● 後をつける ● 第一の功 ● 褒狀を與へんとす ● 浪人の口實にする爲なり

六月、信長、水野信元に謂ひて曰く、吾れ既に義元を獲、以爲へらく、子の甥は當に戦はずして降るべしと。今乃ち強項なること此の如しと。信元嫌疑を恐れ、兵を發して岡崎を攻む。嗣君、石瀨に邀戦す。兩軍皆相識る。故に接戦尤も厲し。松平忠次股を銃に傷け、進みて其銃卒を斬る。明日刈谷の下に戦ひ、交綏す。復た寺部・舉母を攻めて、皆之を抜き、進みて山中に至り、醫王山の寨を攻む。久松俊勝先登す。敵槍を以て其肩を鏖す。俊勝、刀を擧げて槍幹を截り、寨に入りて火を縱つ。衆、之に繼ぐ。遂に寨を取る。嗣君乃ち人をして義元の子氏眞に言はしめて曰く、公、先公の爲に一戦せよ。僕、請ふ先たらんと。答へず。

六月。信長謂水野信元曰。吾既獲義元。以爲子之甥。當不戰而降。今乃強項如此。信元恐嫌疑。發兵攻岡崎。嗣君邀戰于石瀨。兩軍皆相識。故接戰尤厲。松平忠次傷股于銃。進斬其銃卒。明日戰刈谷。下交綏。復攻寺部。舉母。皆拔之。進至山中。攻醫王山。寨。久松俊

六月、信長、水野信元に謂ひて曰く、吾れ既に義元を獲、以爲へらく、子の甥は當に戦はずして降るべしと。今乃ち強項なること此の如しと。信元嫌疑を恐れ、兵を發して岡崎を攻む。嗣君、石瀨に邀戦す。兩軍皆相識る。故に接戦尤も厲し。松平忠次股を銃に傷け、進みて其銃卒を斬る。明日刈谷の下に戦ひ、交綏す。復た寺部・舉母を攻めて、皆之を抜き、進みて山中に至り、醫王山の寨を攻む。久松俊勝先登す。敵槍を以て其肩を鏖す。俊勝、刀を擧げて槍幹を截り、寨に入りて火を縱つ。衆、之に繼ぐ。遂に寨を取る。嗣君乃ち人をして義元の子氏眞に言はしめて曰く、公、先公の爲に一戦せよ。僕、請ふ先たらんと。答へず。氏眞、昏懦なり。嬖臣に三浦義鎮あり。義鎮の生父は小原鎮實なり。並に國政を專にし、徳川氏に異心有りと讒す。氏眞又岡崎の勢の衰く熾なるを視て、猜防の心あり。

● 強情にして屈し下らず ● 三河國に在り ● わかへ戦ふ ● かはるがはる引上ぐ ● 心昏く闇弱なり ● ぞねみて之をへだつ

勝先登敵以槍鏃其肩。後勝舉刀截槍幹。入寨縱火。衆繼之。遂取寨。嗣君乃使人言於二義元。元曰。公爲先公一戰。僕請先焉。不答。氏眞昏懦。嬰臣三浦義鎮。義鎮生父小原領實。並專國政。護德川氏。有異心。氏眞又視岡崎勢。有猜防之心。

四年二月。水野信元來侵。野信元來侵。復遣戰石瀨。破之。遂攻廣瀨。伊保。板倉重定。據中島。不下。遣松平好景攻之。重定退保岡城。遂走佐藤。乃以其邑賞好景。信長素有歸心。欲出兵京畿。而武田信玄在甲斐。北條氏康在相摸。皆窺其

四年二月、水野信元來り侵す。復た石瀨に遊へ戦ひて、之を破り、遂に廣瀨、伊保を攻む。板倉重定中島に據りて下らず。松平好景を遣して之を攻めしむ。重定退きて岡城を保つ。遂に佐脇に走る。乃ち其邑を以て好景を賞す。信長素より歸心有り。兵を京畿に出さんと欲す。而して武田信玄は甲斐に在り、北條氏康は相摸に在りて、皆其後を窺ふ。信長之を患ふ。會々水野信元往きて之を説く、曰く、僕の甥氏眞の故を以て、尾張に抗す。其實は氏眞を怨むなり。誘ひて我が黨と爲すべし。而して彼れ小弱と雖も、天質剛銳必ず和を請ふを肯せず。公、力を以て之を取らば、恐らくは歳月を費さん。我より和を結ぶに若かず。彼をして東面に當らしめて、公は専ら其西を略せば、霸業成らんと。信長大に喜びて曰く、是れ我が心を得たりと。乃ち瀧川一益をして、來りて石川數正に就きて和を

求めしむ。信元又使をして來りて之を勸めしむ。

● 三河國に在り ● 同上 ● 覇業をなさんとする心あり ● 勢力弱しといへども ● うまれつきたけくするどし

後。信長患之。會水野信元往説之。曰。僕甥以氏眞故抗於尾張。其實怨氏眞。可誘爲我黨。而被雖小弱。天質剛銳。必不肯請和。公以力取之。恐費歳月。不若自我結和。使彼當東面。而公專略其西。霸業成矣。信長大喜。曰。是得我心。乃使瀧川一益來就石川數正。求和。信元又使使來勸之。

嗣君召諸將士。議之。酒井忠次曰。我以微力。介二大國。而圖自立。焉。非便計也。氏眞忘仇。廢武。沈溺酒色。不足與有爲。明矣。與信長

嗣君、諸將士を召して之を議す。酒井忠次曰く、我れ微力を以て、二大國に介して、自立を圖る。便計に非ざるなり。氏眞仇を忘れ武を廢して、酒色に沈溺す。與に爲すあるに足らざるや明かなり。信長と和するは信なりと。嗣君曰く、念ふに固より如何ぞ舊好に背くべけんやと。石川家成・酒井正親曰く、忠次の言、是なり。需に義元作りて好意を爲し、歳に我が食を收め、月に我が兵を戦はせ、而して毎に我を敵鋒に饒す。丸根・大高の事、以て見るべきのみ。宜しく速かに

和便。嗣君曰。念固如何可。背舊好手。石川家成酒井正親曰。忠次言是也。誓義元伴爲好意。歲收我食。月戰我兵。而每餒我於敵鋒。丸根大高之事。可以見已。宜速許。尼張一矣。質之在駿河者。取之非難。氏眞重與我絕。必不能害也。嗣君曰。及吾幼時。我舊臣多背鋒鏑。吾常傷於心。因泣下。終許和。信長大喜。定國界。解兵戍。遂請嗣君來盟。許之。

尾張に許すべし。質の駿河に在るもの、之を取るは難きに非ず。氏眞我と絶つを重んず。必ず害する能はざるなりと。嗣君曰く、吾れ幼時に及びて我が舊臣多く鋒鏑に膏る。吾れ常に心に傷むと。因りて泣下る。終に和を許す。信長大に喜び、國界を定め、兵戍を解き、遂に嗣君の來盟を請ふ。之を許す。

● 無勢力を以て二大國の間にはさまり白から獨立をはかるは都合のよき計にあらず
● 飲酒女色にふけりおぼる
● ゆるきよしみ
● 敵の鋒先に當らしめて其の餌となす
● 戦死す
● 來りて盟約をなすこと

酒井忠尚在。上野聞之。恐其質之死。于駿河也。乃來說曰。信長意

酒井忠尚上野に在りて之を聞き、其質の駿河に死するを恐るゝや、乃ち來り説きて曰く、信長の意測り難し。和す可くして、往く可からず。今、君の室家皆駿河に在り。彼れ何ぞ我を信ぜんやと。嗣君曰く、業已に約を定む。常に背くべからずと。

雖測。可和。不可往。今君室家皆在駿河。彼何信我乎。嗣君曰。業已定約。不當背也。忠尚不懼。乃去。左右慮其反。請追而誅之。嗣君曰。彼言自有理。且未必要反。忠尚稱疾不出。信長修道供帳。至期。嗣君從二百餘騎。赴尼張。信長使林通勝等迎之。熱田。嗣君憩于正海寺。遂至清洲。入城門。觀者喧騰。本多忠高子忠勝。小字平八郎。時年十四。舉薙刀。先驅。厲聲曰。我君來此。汝輩胡無禮也。衆皆震伏。

忠尚懼ばず。乃ち去る。左右其反を慮り、追ひて之を誅せんと請ふ。嗣君曰く、彼の言自ら理あり。且つ未だ必ずしも反せじと。忠尚疾と稱して出です。信長、道を修めて供帳す。期に至りて、嗣君、百餘騎を從へて尾張に赴く。信長林通勝等をして之を熱田に迎へしむ。嗣君正海寺に憩ひ、遂に清洲に至り、城門に入る。觀る者喧騰す。本多忠高の子忠勝、小字は平八郎、時に年十四なり。薙刀を舉げて先驅し聲を厲して曰く、我が君此に來る。汝が輩胡ぞ無禮なると。衆皆震伏す。

● 信長の心中の程も知り難しされば和断するは可なるも往きて盟ふは可なりと
● 家版
● 通行の道路を修復して客をもてなす用意をなす
● 嗣君の行列を觀る者騒ぎ立つ
● 前件
● 恐れ狀す

信長出迎。導

信長出で迎へ、導きて内城に入る。植村榮政刀を操りて從ふ。衛士之を叱す。榮

東參河。諸豪善拒。

七月。嗣君自將攻牛窪。使別將攻鳥屋。鳥屋陷。本多忠勝與叔父忠真從軍。忠真斃一人。嗣君取其首。答曰。孺子不。欲。因。人。成。功。自斃一人。一。誠。之。忠。真。啓。狀曰。平八郎將行爲君用也。嗣君大喜。

七月、嗣君自ら將として牛窪を攻め、別將をして鳥屋を攻めしむ。鳥屋陷る。本多忠勝、叔父忠真と軍に従ふ。忠真、雖して一人を斃し、忠勝を顧みて其首を取らしむ。答へて曰く、孺子、人に因りて功を成すを欲せずと。自ら一人を斃して之を餓る。忠真狀を啓して曰く、平八郎は將に行き君の用を爲さんとすと。嗣君大に喜ぶ。

● 三河國に在り ● 同上 ● 少年の自稱の謙辭 ● 他人の力によりて功をなすを顯はす ● 鳥屋に於ける忠勝の戰場の狀を申上げて ● 將來主君の御役に立たん

五月。荒川城主吉良頼持。兄義諦と郤あり。酒井正親に因りて降を請ふ。俱に攻めて西尾を抜き、牧野成定を走らせ、遂に東條を攻む。東條の裨將富永景通、

五月、荒川城主吉良頼持、兄義諦と郤あり。酒井正親に因りて降を請ふ。俱に攻めて西尾を抜き、牧野成定を走らせ、遂に東條を攻む。東條の裨將富永景通、

郤。因。酒。井。正。親。請。降。俱。攻。拔。西。尾。走。牧。野。成。定。遂。攻。東。條。東。條。裨。將。富。永。景。通。陣。藤。波。嘍。欲。攻。小。牧。忠。次。廣。孝。皆。來。合。於。正。親。邀。擊。景。通。景。通。引。弓。疑。廣。孝。廣。孝。直。前。刺。殺。之。餘。兵。皆。走。追。北。至。城。降。義。諦。而。還。嗣。君。以。義。諦。邑。賜。正。親。以。景。通。邑。賜。廣。孝。以。津。平。賜。忠。次。使。鳥。居。忠。吉。松。平。信。一。守。東。條。妻。頼。持。以。異。母。妹。

藤波嘍に陣し、小牧を攻めんと欲す。忠次・廣孝皆來りて正親に合し、邀へて景通を撃つ。景通弓を引きて廣孝に擬す。廣孝、直に前み刺して之を殺す。餘兵皆走る。北ぐるを追ひて城に至り、義諦を降して還る。嗣君、義諦の邑を以て正親に賜ひ、景通の邑を以て廣孝に賜ひ、津平を以て忠次に賜ふ。鳥居忠吉・松平信一をして、東條を守らしむ。頼持に妻はすに異母妹を以てす。

● 嗣將 ● 射んと構ふ ● 異腹の妹

五年。三月。嗣君使松平清善攻四郡。不利。更使久松俊勝松井忠

五年三月、嗣君、松平清善をして西郡を攻めしむ。利あらず。更に久松俊勝・松井忠次等をして之を攻めしむ。忠次、甲賀の間諜十八人を招き、城に入りて火を擧げしむ。外兵之に應ず。城將鶴殿長持走る。追ひて其二子を虜にす。俊勝

次等攻之。忠次招甲賀間諜十八人入城學火。外兵應之。城將鶴殿長持走。追虜其二子。命後勝守西郡。駿河兵來爭。不能取。

に命じて西郡を守らしむ。駿河の兵來り争ふ。取ること能はず。

● まはし者 ● 城外の兵間諜の擧次と相待つて攻めかゝる

氏真欲殺我質。以我外家關口親永爲豪宗。不致發。石川數正欲往護質。度嗣君不許。留書而往。聞氏真甚惜鶴殿氏二子。則因親永請易質。許之。乃馳使還報。嗣君大喜。

氏真、我が質を殺さんと欲す。我が外家關口親永の豪宗たるを以て、敢て發せず。石川數正往きて質を護らんと欲す。嗣君の許さざるを度り、書を留めて往く。氏真甚だ鶴殿の二子を惜しむと聞き、則ち親永に因りて質を易へんと請ふ。之を許す。乃ち使を馳せて還り報す。嗣君、大に喜び、二子を駿河に送る。數正乃ち關口氏、世子信康を奉じて歸る。已にして氏真之を悔い、怒りて親永を殺し、我が將士の質を擁して、以て之を誘降せんとす。我が將士一人の應ずる者なし。即ち盡く其質を出殺す。嗣君之を聞きて哀痛す。

● 妻の官家 ● 大家 ● さしつちめきて殺す

送二子於駿河。數正乃奉關口氏世子信康而歸。已而氏真悔之。怒殺親永。擁我將士質。以誘降之。我將士無一人應者。即盡串殺其質。嗣君聞之哀痛。

四月。引間城。背氏真來降。七月。嵩山亦降。已而皆爲駿河兵所拔。九月。駿河將朝比奈泰長來。襲五木松。殺其城主四郷正勝。正勝子元正在二月谷。聞變馳援。見父已死。赴駿河軍。死。其弟清員爲泰長所捕。行歷萬丈谷。奮袂自投。遂脫歸。因菅沼定盈告狀。嗣君命承父兄後。辭曰。臣兄有遺孤。臣請佐焉。嗣君義而許之。嗣君自將。攻板倉重

四月、引間城、氏真に背きて來り降る。七月、嵩山も亦降る。已にして皆、駿河の兵の抜く所と爲る。九月、駿河の將朝比奈泰長、來りて五木松を襲ひ、其城主西郷正勝を殺す。正勝の子元正、月谷に在り、變を聞きて馳せ援ひ、父の已に死せしを見て、駿河の軍に赴きて死す。其弟清員泰長の捕ふる所と爲る。行、萬丈谷を歴、袂を奮ひて自ら投じ、遂に脱し歸りて、菅沼定盈に因りて狀を告ぐ。嗣君命じて父兄の後を承けしむ。辭して曰く、臣の兄に遺孤有り、臣請ふ佐けん。嗣君、義として之を許す。嗣君、自ら將として、板倉重定を佐脇に攻む。佐脇、牛窪・楡木と兵を合せて、坂井に拒ぐ。我が前軍敗走す。渡部守綱・夏目正吉殿戰す。嗣君、敗を聞きて馳せ救ひ、撃ちて重定を斬り、佐脇・八幡の二寨を抜く。

● 遊江に在り ● 同上 ● 同上 ● わすれたる ● しんがりして取よ

定于佐脇。佐脇與平窪、楡木合兵。拒于坂井。我前軍敗走。波部守綱、夏目正吉殿戰。嗣君聞敗、馳救。擊斬重定。拔佐脇八幡二寨。

六年二月。遣松井忠次。攻拔岩略寨。三月。自將與駿河將小原鎮實戰于小坂井。破之。五月。放鷹近郊。至深溝。故松平好景子伊忠在焉。遊而襲之。賜之以鷹口。長澤要地也。武田信玄所窺。非汝莫以當之。乃徙守長澤。

六年二月、松平忠次を遣して、攻めて岩略寨を抜く。三月、自ら將として、駿河の將小原鎮實と小坂井に戦ひて、之を破る。五月、鷹を近郊に放ち、深溝に至る。故の松平好景の子伊忠在り。遊へて之を襲す。之に賜ふに鷹を以てして曰く、長澤は要地なり。武田信玄の窺ふ所なり。汝に非ざれば、以て之に當る莫しと。乃ち徙りて長澤を守らしむ。

●三河國に在り ●近邊 ●肝要なる地

十月。使菅沼定顯城于佐崎。糧儲未備。邑中有上宮寺。爲一向宗。

十月、菅沼定顯をして佐崎に城かしむ。糧儲未だ備らず。邑中に上宮寺あり、一向宗たり。頗る資糧饒し。定顯之を徵す。寺僧聽かず。乃ち之を奪ふ。僧怒り、同宗、鐵崎・野寺・土呂の三寺に檄し、衆を合せて千餘人を得、菅沼氏を攻め、

頗饒資糧。定顯徵之。寺僧不聽。乃奪之。僧怒。檄同宗鐵崎野寺。士呂三寺合衆得千餘人。攻菅沼氏。劫而去。定顯訴之。乃命酒井正親捕其主謀。斬以徇。僧徒益怒。大招聚門徒。將士係其宗。若欲救親戚。修仇怨者。往往歸之。矢田作十郎。馬場小平太。蜂谷貞次。波部守綱。本多正信。其弟正重等數百人。吉良義諦。據東條。其弟賴持。據荒川。酒井忠尚。據上野。松平家次。據櫻井。夏目正吉。據野羽。一時並叛。僧分牌。書曰。進一步。生極樂。卻一步。墮地獄。刻日來攻。

劫剽して去る。定顯之を訴ふ。乃ち酒井正親に命じて其主謀を捕へ、斬りて以て徇ふ。僧徒益々怒り、大に門徒を招聚す。將士の其宗に孫り、若しくは親戚を救ひて仇怨を修めんと欲する者は、往往之に歸す。矢田作十郎・馬場小平太・蜂谷貞次・波部守綱・本多正信、其弟正重等數百人なり。吉良義諦は東條に據り、其弟賴持は荒川に據り、酒井忠尚は上野に據り、松平家次は櫻井に據り、夏目正吉は野羽に據りて、一時竝に叛く。僧、之に牌を分ち、書して曰く、一步を進まば極樂に生れ、一步を卻かば地獄に墮ちんと。日を刻して來り攻めんとす。

●兵糧のたくはへ ●資糧糧食 ●同一一向宗 ●あびやかしてはぎとる ●僧侶招き集む ●復讐せんを欲する者 ●位牌 ●一足進みて取よものは極樂に生れ一足退くものは地獄に墮つ

嗣君大驚。分兵守諸城。大久保忠俊與從子忠世。佐以下守。輪田。酒井正親。守西尾。松平伊忠守深溝。本多廣孝。松井忠次。守土井。松平清善。守竹谷。松平家忠。守形原。松平信一。守藤井。松平親俊。守福釜。酒井忠次。守于上野。傍。每賊出。舉烽相報。嗣君視烽。即馳救。賊輒逃走。

嗣君、大に驚き、兵を分ちて諸城を守らしむ。大久保忠俊、從子忠世、忠佐以下と輪田を守り、酒井正親は西尾を守り、松平伊忠は深溝を守り、本多廣孝・松井忠次は土井を守り、松平清善は竹谷を守り、松平家忠は形原を守り、松平信一は藤井を守り、松平親俊は福釜を守る。酒井忠次は上野の傍に砦して、賊出づる毎に烽を舉げて相報す。嗣君、烽を視て即ち馳せ救ふ。賊輒ち逃れ去る。

● とりてを築きて ● のろし

石川數正與諸公族攻上野。土井兵攻東條。藤井兵攻土呂。誠崎。皆有功。深溝

石川數正は諸公族と上野を攻め、土井の兵は東條を攻め、藤井の兵は土呂・誠崎を攻む。皆功有り。深溝の兵は野羽を攻む。野羽の城兵乙部某導きて城を陥れ。正吉を擒にす。乙部請ひて曰く、臣の導を爲す所以は、正吉を活さんと欲すればなりと。伊忠も亦之を請ふ。嗣君遂に正吉を釋して、之を祿す。酒井忠次、戸

田某を招き、亦以て導と爲して、野寺を攻め、其後門を破る。

● 命調をせんと思へばなり ● 領地を與ふ

兵攻野羽。野羽城兵乙部某導而陷城。擒正吉。乙部請曰。臣所以爲導者。欲活正吉也。伊忠亦請之。嗣君終釋正吉。藤之。酒井忠次招戸某。亦以爲導。攻野寺。破其後門。

十一月、誠崎の賊、輪田を攻む。忠俊、小豆坂に邀戦す。嗣君馳せ救ひ、大に之を破る。阿部忠政善く射る。渡部守綱、寛正重と皆傷く。水野忠重、蜂谷貞次を追ふ。貞次、槍を揮ひて之に返す。忠重卻く。嗣君親ら進みて之に迫る。貞次卻く。松平金助追ひて之を誦る。貞次曰く、吾れ主公を畏る。豈に汝を畏れんやと。鑑して金助を噓し、將に滅らんとす。嗣君之を呵す。貞次怖れて走る。寛正重、平岩親吉を追ひ、射て其耳に中つ。將に滅らんとす。又之を呵す。亦怖れて走る。忠俊進みて誠崎を攻め、伊田に陣す。大久保忠世、本多正重と、銃を以て相擬す。忠世先づ發す。正重傷き走る。賊、議して曰く、争戦決せず。宜

十一月。誠崎賊攻輪田。忠俊邀戰于小豆坂。嗣君馳救。大破之。阿部忠政善射。渡部守綱與寛正重皆傷。水野忠重追蜂谷貞次。貞次揮槍返之。忠重卻。嗣君親進迫之。貞

次卻。松平金助。追而誦之。貞次曰。吾畏主公。豈畏汝哉。鏖。鏖。鏖。鏖。助。將。威。嗣。君。呵。之。貞。次。怖。面。走。寬。正。重。追。平。岩。親。吉。射。中。其。耳。將。威。又。呵。之。亦。怖。而。走。忠。俊。進。攻。二。誠。崎。陣。于。二。

七年正月三

しく兵を妙國寺に分ち、其歸途を扼し、夾撃して之を渚中に陥るべしと。蜂谷貞次は忠俊の婿なり。其覆滅を痛み、獨り騎して寺前に低回す。忠俊之を悟り、兵を引きて輪田に還る。十二月、嗣君、佐崎を攻め、矢田・馬場と戦ひて、之を走らす。天野康景馬場を斬る。閏月、本多重次・高力清長は土呂を攻め、本多廣孝・松井忠次は東條を攻む。皆功有り。功を賞し邑を分ち、忠次に松平氏を賜ふ。尋ぎて砦を佐崎の傍に築く。

● むかへ取ふ ● しかりつける ● 泥の中 ● 行きつもとどりつす

伊田。大久保忠世。與。本。多。正。重。以。銃。相。擬。忠。世。先。發。正。重。傷。走。賊。議。曰。爭。戰。不。決。宜。下。分。三。兵。於。二。妙。國。寺。扼。其。歸。途。夾。擊。陷。之。渚。中。蜂。谷。貞。次。忠。俊。婿。也。痛。其。覆。滅。獨。騎。低。回。寺。前。忠。俊。悟。之。引。兵。還。輪。田。十。二。月。嗣。君。攻。二。佐。崎。與。二。矢。田。馬。場。戰。走。之。天。野。康。景。斬。二。馬。場。閏。月。本。多。重。次。高。力。清。長。攻。二。土。呂。本。多。廣。孝。松。井。忠。次。攻。二。東。條。皆。有。功。賞。功。分。邑。賜。二。忠。次。松。平。氏。二。尋。築。三。砦。于。二。佐。崎。傍。一。

七年正月三日、水野信元、來りて正を賀す。會々佐崎の賊、岡大平を焚く。嗣

日。水野信元來賀正。會佐崎賊。岡大平。嗣君望之。謝信元。上馬而。出。信元不。忍。去。以。其。卒。從。嗣。君。使。上。輪。田。兵。當。二。誠。崎。而。直。出。小。豆。坂。與。賊。遇。近。藤。新。一。射。中。二。嗣。君。轡。嗣。君。怒。親。陷。賊。陣。與。信。元。兵。合。擊。斬。其。二。將。土。呂。誠。崎。野。寺。賊。合。攻。二。輪。田。忠。俊。忠。世。防。戰。被。誦。

君、之を望み、信元に謝し、馬に上りて出づ。信元去るに忍びず。其卒を以て從ふ。嗣君、上輪田の兵をして誠崎に當らしめて、直に小豆坂に出で、賊と遇ふ。近藤新一射て嗣君の轡に中つ。嗣君怒り、親ら賊陣を陥る。信元の兵と、合撃して其二將を斬る。土呂・誠崎・野寺の賊、合して輪田を攻む。忠俊・忠世防戦して創を被る。嗣君單騎赴き援ふ。躍ぎて馳する者三十八騎なり。鷓殿康孝戦死す。賊黨渡部高綱、進みて嗣君に逼る。其甥内藤正成、側に侍す。呼びて曰く、事已に此に至る。私親を恤ふる能はずと。乃ち射て之を仆す。賊兵稀突して進む。嗣君甚だ危し。賊黨土屋長吉、其儕輩に謂ひて曰く、吾れ寧ろ地獄に墮ちんと。乃ち鋒を主君に敵す。今其危きを視るに忍びず。吾れ寧ろ地獄に墮ちんと。乃ち鋒を倒にして、嗣君の馬前に當り、賊を防ぎて戦死す。會々日暮る。兩軍交綏す。嗣君還り、其中を脱するに、二銃丸を得たり。命じて長吉の尸を收めて、輪田に葬らしむ。

嗣君單騎赴
援。踵馳者三
十八騎。鶴殿
康孝戰死。賊
射仆之。賊兵
不。忍。視。其。危。吾。寧。墮。地。獄。矣。乃。倒。鋒。當。嗣。君。馬。前。防。賊。戰。死。會。日。暮。兩。軍。交。綏。嗣。君。還。脫。其。甲。得。二。銃。丸。命。收。長。吉。尸。葬。于。三。輪。田。

● 新年を買す ● たゞ一騎 ● 自分の親戚にははれみをかけて助くるを得ず ● 諸の如くつき進む ● 鋒を身方に向けて ● 互に退く ● 死骸を棺に入れて

二月。西尾兵
合。水野氏援
軍。戰。于。櫻井
野寺。破。之。嗣
君。自。討。野寺
賊。設。伏。破。之。
數。日。佐。崎。賊
可。三。百。以。二。矢
田。爲。將。犯。岡
崎。嗣。君。密。戒。二
銃。隊。曰。賊。所。以
以。困。我。者。以

二月、西尾の兵、水野氏の援軍と合して、櫻井、野寺に戦ひて、之を破る。嗣君自ら野寺の賊を討ち、伏を設けて之を破る。數日にして佐崎の賊三百可り、矢田を以て將と爲し、岡崎を犯す。嗣君密かに銃隊を戒めて曰く、賊、我を困しむる所以は、矢田有るを以てなり、彼れ勇を負み、毎に士卒に先んず。宜しく之を狙撃すべしと。戦交るに及む、矢田丸に中りて斃る。餘賊潰走す。是より賊衆沮喪し、互に相悔責し、木多正信・蜂谷貞次に勸めて降を請はしむ。貞次、大久保忠俊に就きて乞ふ。忠俊因りて嗣君に説きて曰く、方今羣雄務めて兵を厲し地を拓

有。矢。田。也。彼
負。勇。每。先。二。士
卒。宜。狙。擊。之。
及。二。戰。交。矢。田
中。丸。斃。餘。賊
潰。走。自。是。賊
衆。沮。喪。互。相
悔。責。勸。木。多。正。信。蜂。谷。貞。次。請。降。貞。次。就。大。久。保。忠。俊。乞。焉。忠。俊。因。說。二。嗣。君。曰。方。今。羣。雄。務。厲。兵。拓。地。而。我。有。二。內。變。國。兵。半。爲。二。仇。讐。有。如。二。隣。國。乘。隙。來。侵。傾。覆。不。旋。踵。不。若。容。二。其。自。新。使。各。效。力。嗣。君。聽。之。

く、而して我れ内變有り、國兵の半は仇讐と爲る。隣國隙に乗じて來り侵すが如き有らば、傾覆踵を旋らさず。其自新を容れて、各々力を效さしむるに若かずと。嗣君、之を聽す。

● 賊砲隊 ● ねらひうつ ● 悔いて身を賣む ● 滅ぶること立所なり ● 悔い改むるものはゆるして

貞次乃與衆
議。請。三。事。曰。
將。士。復。祿。曰。
僧。徒。安。堵。曰。
渠。帥。減。死。嗣
君。曰。所。請。皆
允。渠。帥。不
可。赦。忠。俊。泣

貞次乃ち衆と議して、三事を請ふ。曰く、將士は祿を復せん。曰く、僧徒は安堵せん。曰く、渠帥は死を減せん。嗣君曰く、請ふ所皆允さん。獨り渠帥は赦すべからずと。忠俊泣きて諫めて曰く、去歲以來、臣が宗族、幾ど殲く。公、恤みて之を賞せんと欲せば、願はくは此輩の命を賜ひて以て前鋒と爲し、吉良・荒川を攻め、功を立てて罪を償はしめよ。則ち疆土、日に拓けん。水野信元も亦

諫曰。去歲以來。臣宗族幾盡。公欲恤而賞之。願賜此輩之命。以爲前鋒。攻吉良荒川。立功。罪。則遷土日拓矣。水野信元亦以爲請。嗣君勉從之。召貞次守綱以下于輪田。徵盟。賜書焉。使石川家成半。鐵崎降將。赴土呂。呼而諭之。賊投兵而降。佐崎野寺相繼皆降。乃逐正信等五人及諸惡僧。以其餘爲先鋒。攻東條荒川。義諦賴持請降。不許。皆西走。

以て請を爲す。嗣君勉めて之に従ひ、貞次・守綱以下を輪田に召し、盟を徴し書を賜ふ。石川家成をして、鐵崎の降將を率ゐて土呂に赴き、呼びて之を諭さしむ。賊、兵を投じて降る。佐崎・野寺相繼ぎで皆降る。乃ち正信等五人、及び諸惡僧を逐ひ、其餘を以て先鋒と爲し、東條・荒川を攻めしむ。義諦・賴持降を請ふ。許さず。皆西走す。

- 死刑をゆるして罪を軽くす
- かしち
- 領土日々に廣がるん
- 心を曲げて諫に従ひ
- 兵器を打ち捨て、降参す

是役也。榑原康政先登于上野。康政之

是の役に、榑原康政、上野に先登す。康政の先を仁木義長と曰ふ。伊勢の榑原邑に居る。其裔清長、參河に徙りて、藏人親忠に仕ふ。康政は其孫なり。幼よ

先曰仁木義長。居伊勢榑原邑。其裔清長徙參河。仕藏人親忠。康政其孫也。幼沈深。喜書。是歲。甫十六。成瀬正義與弟正一每戰有功。二人嘗獲罪。出奔甲斐。已而來歸。嗣君待之如故。二人感激。故戰最力。

り沈深にして書を喜む。是の歳甫めて十六なり。成瀬正義、弟正一と、戦ふ毎に功有り。二人嘗て罪を獲て、甲斐に出奔す。已にして來歸す。嗣君、之を待つことと故の如し。二人、感激す。故に戦最も力む。

- 子孫
- 漸附きて若へ深く
- 罪を犯して
- 歸り來りて從ふ
- 二人を待遇すること以前と變らず

嗣君既定。西參河。三月。出兵。東參河。四月。小笠原康元以幡豆。牧野定成以牛窪。窪戸田重定以榑木。皆降。乃築砦于宮。使本多信

嗣君、既に西參河を定め、三月、兵を東參河に出す。四月、小笠原康元は幡豆を以て、牧野定成に牛窪を以て、戸田重定は榑木を以て、皆降る。乃ち砦を一宮に築き、本多信俊をして之を守らしめて、以て吉田・田原に逼る。五月、氏真兵一萬に將として、佐脇・八幡の二邑に陣し、其五千を分ちて一宮を攻めしむ。信俊、急を告ぐ。嗣君、自ら二千人に將として赴き援ひ、二邑の間を過ぎて、本能原に至る。部伍嚴整にして、兵鋒甚だ鋭し。氏真敢て犯さず。其兵の一宮を圍む者

俊守之。以逼吉田。田原。五月。氏真將兵一萬。陣佐。脇八幡。二邑。分其五千。攻一宮。信俊告急。嗣君自將二千人。赴援。過二邑。間至二本能原。部伍嚴整。兵鋒甚銳。氏真不敢犯。其兵圍一宮者。解退。信俊尾擊破之。明日。嗣君復逼氏真營前。而還。氏真引去。自是。不能復出。

解きて退く。信俊、尾撃して之を破る。明日、嗣君復た氏真の營前に逼りて還る。氏真引きて去る。是より復た出づる能はず。

● 危急を報ず ● 部隊が嚴重に整理せられて軍勢甚だげし

六月。嗣君使酒井忠次。率牛窪・楡木・幡豆兵。攻吉田。本多忠勝先登。蜂谷貞次戰死。城將小原鎮實終致城去。以賜忠次。本多廣孝

六月、嗣君、酒井忠次をして、牛窪・楡木・幡豆の兵を率ゐて吉田を攻めしむ。本多忠勝先登し、蜂谷貞次戰死す。城將小原鎮實、終に城を致して去る。以て忠次に賜ふ。本多廣孝、田原を攻めて、其郭を取る。城將朝比奈元智も亦、城を致して去る。以て廣孝に賜ふ。六月、酒井忠尚復た叛く。廣孝、忠次に命じて之を討たしむ。城兵其數、叛くを醜み、相率ゐて出で降る。忠尚、駿河に奔り、尋ぎて死す。是の歲、御油・寺部を攻めて、皆之を取る。長篠・築手・段嶺の三邑皆

降る。

● 城の外郭 ● 互ひにつれだちて降参す

攻田原。取其郭。城將朝比奈元智亦致城去。以賜廣孝。六月。酒井忠尚復叛。命廣孝忠次討之。城兵醜其數叛。相率出降。忠尚奔漢河。尋死。是歲。攻御油寺部。皆取之。長篠築手段嶺三邑皆降。

八年春、嗣君盡く參河を定む。乃ち奉行三人を置きて、國內の政刑を掌らしむ。作左衛門本多重次、與左衛門高力清長、三郎兵衛天野康景を以て之に充つ。重次は剛直、清長は慈祥、康景は沈重にして善く謀る。民、之が爲に語りて曰く、佛高力、鬼作左、彼此偏する無きは天三郎と。

● 政事と刑罰と ● いづくしり深し ● 務附きて重々しく考へ深し ● 偏するなきは

八年。春。嗣君盡定參河。乃置奉行三人。掌國內政刑。以作左衛門本多重次。與左衛門高力清長。三郎兵衛天野康景充之。重次剛直。清長慈祥。康景沈重。善謀。民爲之語曰。佛高力鬼作左。彼此無偏。天三郎。

先是。嗣君既。是より先、嗣君既に今川氏と絶つ。元康の名は義元の命する所なるを以て、名

與今川氏絶。以元康之名。義元所命也。改名家康。取遠祖義家偏名也。鳥居忠吉爲嗣。君奏二

を家康と改む。遠祖義家の偏名を取るなり。鳥居忠吉、嗣君の爲に京師に奏して、先世の官爵を襲がんと請ふ。九年十二月、詔して、從五位下に敘し、參河守に任ず。

● 遷き先祖 ● 右の一字をとる

京師。請製先世官爵。九年。十二月。詔。敘從五位下。任參河守。

十年五月。參河守爲世子。信康娶織田信長女。信長使佐久間信盛來送女。參河守之定國也。武田信玄使使修好。是歲。使其將山縣昌景來言曰。請戮力滅二氏。眞。我取大井河以東。公取大井河以西。參河守許之。

十年五月、參河守、世子信康の爲に、織田信長の女を娶る。信長、佐久間信盛をして來りて女を送らしむ。參河守の國を定むるや、武田信玄、使をして好を修めしむ。是の歲、其將山縣昌景をして來り言はしめて曰く、請ふ、力を戮せて氏眞を滅し、我は大井河以東を取らん。公は大井河以西を取れと。參河守、之を許す。

● 國々平定するや ● 協力して

縣昌景來言曰。請戮力滅二氏眞。我取大井河以東。公取大井河以西。參河守許之。

十一年正月。詔。遷參河守爲左京大夫。三月。大夫出兵遠江。攻久能。使高力清長說城將宗能降之。松下二股高敷三族皆降。進攻堀川。拔之。遂取宇津山城。于見附。八月。織田信長四略近江。來乞援兵。大夫使松平信一以二千餘人往。信長將木下秀吉等攻箕

十一年正月、詔して、參河守を遷して左京大夫と爲す。三月、大夫、兵を遠江に出して、久能を攻む。高力清長をして、城將宗能に説きて之を降らしむ。松下二股・高敷の三族、皆降る。進みて堀川を攻めて、之を抜く。遂に宇津山を取りて、見附に城く。八月、織田信長、西近江を略し、來りて援兵を乞ふ。大夫、松平信一をして、二千餘人を以て往かしむ。信長の將木下秀吉等、箕作城を攻む。城固くして、拔けず。信一疾く攻め、矢石を冒して進み、大に呼びて曰く、參河の人松平信一、先登せりと。諸隊繼ぎて登る。城遂に陥る。信長、而のあたり信一を褒めて曰く、卿、膽に毛を生ずと謂ふべしと。桐號の胴服を賜ふ。十二月、大夫遠江に入りて、井伊谷を取らんと欲す。谷中の豪族井伊直親、讒言を以て氏眞の殺す所と爲る。其故部菅沼・近藤・鈴木の三族、皆大夫に屬す。大夫遂に刑部を取る。

● 矢だまの中を進み ● 前而て ● 桐號の胴服を賜ふ ● 桐の紋つきたる

作城。城固不拔。信一疾攻。冒矢石而進。大呼曰。參河人松平信一先登矣。諸隊繼登。城遂陷。信長面裏信一曰。卿可謂膽生毛矣。賜桐號。嗣服。十二月。大夫入遠江。欲取井伊谷。谷中豪族井伊直親。以讒言爲氏真所殺。其故部管沼近藤鈴木三族。皆屬大夫。大夫遂取刑部。

先是引間城主飯尾某密通款於我。事覺被殺。其部下以城來降。又爭事相殺。於是大夫入引間。益其壘壁。立爲根據。遂招降馬伏高天神二城。

是より先、引間城主飯尾某、密に款を我に通ず。事覺れて殺さる。其部下、城を以て來り降る。又事を争ひて相殺す。是に於て、大夫引間に入り、其壘壁を益し、立てて根據と爲す。遂に馬伏・高天神の二城を招降す。

● 飯尾の部下の善城を差出して來り降る ● ねじる ● 二城共に近江國に在り

是時武田信玄已入駿河。逐氏眞。氏眞奔遠江。朝比奈泰能守掛川。

是の時、武田信玄、已に駿河に入り、氏眞を逐ふ。氏眞遠江に奔る。朝比奈泰能、掛川城を守りて以て之を迎ふ。三浦義鎮・小原資久、氏眞を棄てて、獨り花澤を保つ。甲斐の將秋山晴近、大井河を渡りて、久能を招く。久能下らず。奥平、菅沼、

川城以迎之。三浦義鎮小原資久棄氏眞。而獨保花澤。甲斐將秋山晴近濟大井河。招久能。久能不。下。奥平菅沼迎戰于見附。我兵不利。大夫使人諭晴近曰。汝何敢背約。不亟引去。我親出擊之。晴近懼。引去。大夫遂攻掛川。城險食足。不可輒拔。乃連營備之。退陣見附。

迎へて見附に戰ふ。我が兵、利あらず。大夫、人をして晴近を諭めしめて曰く、汝、何ぞ敢て約に背く。亟かに引き去らざれば、我れ親ら出でて之を撃たんと。晴近懼れて引き去る。大夫、遂に掛川を攻む。城、險にして食足る。輒く抜くべからず。乃ち營を連ねて之に備へ、退きて見附に陣す。

● 城は險阻に在りて兵糧十分あり

是歲。奏請復德川氏。十二年正月。詔報可。自是德川爲宗。松平爲族。是月。復攻掛川。使使謂信玄曰。掛川

是の歲、奏して德川氏に復せんと請ふ。十二年正月、詔あり、報可す。是より德川を宗と爲し、松平を族と爲す。是の月、復た掛川を攻め、使をして信玄に言はしめて曰く、掛川は則ち僕の力にて能く之を擧げん。前日の約如何と。信玄答へて曰く、敢て渝らすと。大夫乃ち徙りて天王山に陣して、以て掛川に逼る。

● 天子より御ゆるしを得 ● 本家 ● 一族 ● 能く掛川を攻取るを得ん ● 決して約束に違背せず

則僕力能舉之。前日之約如何。信支答曰。不敢諭。大夫乃徙陣于天王山。以逼掛川。

氏眞昭久能宗能父宗明以利欲夾擊我軍。宗明諾而告之。宗能宗能不從。氏眞之使復至。戒期。宗明父子密謁大夫。告之。大夫使伴期焉。而夜伏兵城外。候敵出。起關。獲其五將。尾面入城。城兵堅拒。不得入。二月。退陣。見附降。酒名都築

氏眞、久能宗能の父宗明に昭すに利を以てし、我が軍を夾撃せんと欲す。宗明諾す。而して之を宗能に告ぐ。宗能從はず。氏眞の使復た至りて期を戒む。宗明父子、密かに大夫に謁して之を告ぐ。大夫伴り期せしめて、夜、兵を城外に伏せ敵の出づるを候ひ、起ちて關ひて、其五將を獲、尾して城に入る。城兵堅く拒ぐ。入るを得ず。二月、退きて見附に陣し、濱名・都築の二城を降す。三月、復た掛川を攻む。泰能等出でて西宿に戦ふ。我が諸將、撃ちて之を破り、走るを追ひて城に至り、竹橋を以て環り攻む。城兵舟師を以て我が軍後に出づ。鳥居元忠・榊原康政等、邀へ撃ちて之を走らす。大夫、退きて引間に入り、三奉行をして、令三條を下さしめて、南掠を禁じ、士民を按據す。會々氣賀の盜起る。兵を遣して其首謀を誅し、盡く餘黨を赦す。遠江の民、心を歸す。

● 利益を以て誘ひ ● 承諾す ● 約束したる時間を誤らぬ機念をもち ● 竹の橋を以て取り巻きて攻む ● 探め取る ● 各々居所を調べて其所に居らしむ ● 従ひ服す

二城。三月。復攻掛川。泰能等出戦于西宿。我諸將擊破之。追走至城。以竹橋環攻。城兵以舟師出我軍後。鳥居元忠・榊原康政等。邀擊走之。大夫退入引間。使三奉行下三條。禁南掠。按據士民。會氣賀盜起。遣兵誅其首謀。盡赦餘黨。遠江民歸心焉。

氏眞、掛川の終に守るべからざるを度り、走りて北條氏康に依らんと欲す。氏康は、其舅なり。乃ち酒井正親、石川家成に因りて和を乞ふ。大夫答へて曰く、某幼にして尊翁の扶持する所と爲る。敢て舊誼を失はず。讒者に問せられて、以て兵を構ふるに至る。今、信玄、駿河・遠江を併せんと欲す。公若し遠江を以て某に附けられるれば、某、當に氏康と謀り、公を駿河に納るべしと。因りて誓書を送る。五月、松平家忠をして氏眞を護送せしめ、戸倉に至りて、之を北條氏に授く。

● よるきよし ● 讒者の口交情を割かれて戰争することに至る

遠江公若以遠江見附某。某當與氏康謀納公於駿河。因送誓書。五月。使松平家忠護送氏眞。至戸倉。授之於北條氏。

大夫於是以取遠江。以掛川賜石川家成。白從五百人。巡視郡縣。甲斐將山縣昌景將兵三千。自駿府至金谷。遇大夫。下馬而拜。觀我寡軍。心動。託忿爭。反襲之。大夫走就險。擊斬其前鋒八騎。昌景引去。大夫大怒。遣兵攻駿府。昌景棄壘走。乃使使氏康。謀復氏真。氏真舊臣岡部正綱等。修府城守之。六月。以日天方飯田不奉我令。攻取之。十一月。信玄與氏康戰勝之。降正綱。取駿河。分兵據小山。大夫使松平眞乘。援掛川。以攻小山。

大夫、是に於て、遠江を取り、掛川を以て石川家成に賜ひ、自ら五百人を従へて、郡縣を巡視す。甲斐の將山縣昌景、兵三千に將として、駿府より金谷に至り、大夫に遇ふ。馬を下りて拜し、我が寡軍を觀て、心動き、忿争に託して反りて之を襲ふ。大夫、走りて險隘に就き、撃ちて其先鋒八騎を斬る。昌景引き去る。大夫、大に怒りて、兵を遣して駿府を攻む。昌景、壘を棄てて走る。乃ち使を氏康に使し、氏真を復せんと謀る。氏真の舊臣岡部正綱等、府城を修めて之を守る。六月、天方飯田、我が令を奉ぜざるを以て、攻めて之を取る。十一月、信玄、氏康と戦ひて之に勝ち、正綱を降し、駿河を取り、兵を分ちて小山に據る。大夫、松平眞乘をして掛川を援ひて以て小山を攻めしむ。

● 見ぬぐる ● 兵少く陣立うすきを見て ● 氣がかはり ● 忿り争ふことにかこつけて

元龜元年正月。遠江既定。徙居引間。改名濱松。使世子居岡崎。以撫參河。大夫威名大振。稱爲海道第一。是月。信玄攻拔花澤。小原資久三浦義領奔高天神。城主小笠原長忠與之有故。而知大夫深惡二人。斬獻其首。大夫不賞。

元龜元年正月、遠江、既に定るを以て、徙りて引間に居り、名を濱松と改む。世子をして岡崎に居りて以て參河を撫せしむ。大夫の威名、大に振ふ。稱して海道第一と爲す。是の月、信玄攻めて花澤を拔く。小原資久・三浦義領、高天神に奔る。城主小笠原長忠、之と故あり。而して大夫の深く二人を惡むを知り、斬りて其首を獻す。大夫賞せず。

● 家康の威光名譽 ● 東海道第一

二月。信長使人來賀二國平定。且請授兵擊朝倉義景。二月。信長先入京師。大

二月、信長、人をして來りて二國の平定を賀せしむ。且つ援兵を請ひて朝倉義景を撃つ。三月、信長、先づ京師に入る。大夫、兵一萬に將として之に繼ぐ。四月、將軍足利義昭、信長、及び大夫を饗す。遂に越前に赴く。信長は近江より、大夫は若狭より、敦賀に會して、攻めて手筒を抜き、遂に金崎を下す。淺井長政、

夫將兵一萬一
繼之。四月。將
軍足利義昭
襲信長及大
夫。遂赴越前。
信長自近江。
大夫自若狹。
會于敦賀。攻
拔手筒。遂下
金崎。會淺井
長政。叛應義
景。欲夾擊信
長。信長危懼。
問大夫曰。爲
之何如。大夫

叛きて義景に應じ、信長を夾撃せんと欲するに會ふ。信長危懼し、大夫に問ひて曰く、之を爲す何如と。大夫曰く、公、第馳せて京師に入れ。長政、事を見るに遅し。必ず未だ歸路を扼せじ。義景の如きに至りては、則ち一猛將を留め、僕と力を合せば、必ず尾する能はじと。信長乃ち羽柴秀吉を留めて、夜京師に走る。數日、大夫、秀吉と殿して退く。信長の將丹羽長秀・明智光秀若狹に在り。歸る能はず。大夫、兵を分ちて之を救ひ、皆朽木に達す。行々土寇を撃ちて京師に入る。五月岡崎に歸る。

● 危ぶみおそる ● 淺井氏叛きたるにについては如何に自身の方針をとらばよからん ● 事に當つて機敏なり
● 一人のたけき大將 ● 一本に某とあり ● 其土地の賊

曰。公第馳入京師。長政見事遲矣。必未扼歸路。至如義景。則留一猛將。與僕合力。必不能尾也。信長乃留羽柴秀吉。而夜走京師。數日。大夫與秀吉殿而退。信長將丹羽長秀。明智光秀。在若狹。不能歸。大夫分兵救之。皆達于朽木。行擊土寇。而入京師。五月。歸岡崎。

六月。信長擊
淺井長政。復
來乞援。大夫
將兵赴之。朝
倉義景使三族
景健援長政。
信長兵三萬
五千。大夫兵
五千。陣于龍
鼻。長政兵八
千。景健兵一
萬五千。陣于
大寄。信長夜
議戰。大夫曰。
僕年少。不喜
混戰。願當一
面。信長曰。然
則當長政。願
公兵寡。我當
分兵援之。大

六月、信長、淺井長政を撃つ。復た來りて援を乞ふ。大夫、兵に將として之に赴く。朝倉義景、族景健をして長政を援けしむ。信長の兵三萬五千、大夫の兵五千、龍鼻に陣す。長政の兵八千、景健の兵一萬五千、大寄に陣す。信長、夜、戰を議す。大夫曰く、僕は年少、混戰を喜ばず。願はくは一面に當らんと。信長曰く、然らば則ち長政に當れ。願ふに公の兵寡し。我れ當に兵を分ちて之を援ふべしと。大夫曰く、僕は小國を領し、寡兵を用ふるに慣る。且つ縦ひ援兵を賜ふも、素より撫循せるに非ざれば、何ぞ用を爲さんやと。信長曰く、公をして獨り敵に當らしめば、吾れ將に天下の笑と爲らんとす。請ふ、一隊將を附せん。誰か可なる者ぞと。大夫乃ち稻葉通朝を請ふ。信長、通朝を召して曰く、汝、徳川の識拔する所と爲る。榮、大なるは莫しと。因りて一槍を取りて大夫に贈りて曰く、相傳ふ、是れ鎮西八郎の箭鏃なりと。公は源氏の曹胤なり。詰朝、其れ此を以て指麾せよと。大夫喜びて之を受く。

夫曰。僕領二小國。慎用二募兵。且縱賜二援兵。非二素撫。簡何爲用乎。信長曰。使三公獨當敵。吾將爲天下笑。請附二一隊將。誰可者。大夫乃請二稻葉通朝。信長召二通朝曰。汝爲三德川所二識。拔二榮莫大焉。因取二一槍二贈二大夫曰。相傳是爲二鎮西八郎。箭藏。公源氏胤胤。詰朝其以此指麾。大夫喜而受之。

於是分兵爲四。酒井忠次等爲前鋒。石川數正等爲次隊。大夫自爲中軍。榊原康政。本多廣孝爲左右翼。稻葉通朝爲後拒。且日長政自東。景健自西。來至姊川。信長又使是に於て、兵を分ちて四と爲す。酒井忠次等、前鋒と爲り、石川數正等次隊と爲り、大夫自ら中軍と爲り、榊原康政・本多廣孝左右の翼と爲り、稻葉通朝後拒と爲る。且日、長政は東より、景健は西より、來りて姊川に至る。信長、又人をして來り謂はしめて曰く、吾れ深く長政を憎み、甘心せんと欲す。願はくは公、景健に當れと。大夫曰く、諾と。忠次諫めて曰く、我れ嚮ふ所已に定る。乃ち之を易へば、部伍必ず亂れんと。大夫曰く、西は衆にして強く、東は寡にして弱し。東を捨てて西を取るは、吾が願ふ所のみと。乃ち兵を引きて西し、景健と姊川を夾みて陣す。景健、兵百餘を縱ちて先づ濟る。本多忠勝、中軍に在り。請ひて曰

● 年若ければ諸人と共に戰爭すること好まざ
● 平素よりてなづけけてある身ならねば
● 見立に預る者譽此
上なし
● マレリ
● 血路なり
● さしづせよ

人來謂曰。曰。吾深憎長政。欲甘心焉。願公當景健。大夫曰。諾。忠次諫曰。我所嚮已定。乃易之。部伍必亂。大夫曰。西衆而強。東寡而弱。舍東取西。吾所願已。乃引兵而西。與景健夾姊川而陣。景健縱兵百餘先濟。本多忠勝在中軍。請曰。彼欲擊我。我當逆戰。大夫曰。善。命忠勝聽擊。大久保忠勝安藤直次踵馳。擊走之。

く、彼れ我が横を撃たんと欲す。我れ當に逆へ戦ふべしと。大夫曰く、善しと。忠勝に命じて馳せ撃たしむ。大久保忠勝・安藤直次踵ぎて馳せ、撃ちて之を走らす。

景健全軍を以て進む。我が前鋒卻く。次隊、之を承け、河中に戦ふ。犬塚又内、敵の槍を攪りて相挽き、遂に奪ひて之を殺す。内藤正貞、槍を敵中に遺し、馬を回して之を取る。松平忠次敵に射られ、矢左手を貫く。矢を抜きて反し射て、之を破す。次隊卻く。敵進み、直に麾下に逼る。麾下の將士拒ぎ戦ひて決せず。大夫怒り、槍を奮ひて指麾し、左右の翼を縱ちて夾撃し、大に之を破る。願みて

回馬取之。松平忠次爲敵射。矢貫左手。拔矢反射。殘之。次隊卻敵進。直逼麾下。麾下將士拒戰。不決。大夫怒。奮槍指麾下。縱左右翼夾擊。大破之。顧見信長軍敗。沿川而東。與後拒俱擊長政。又大破之。追北至大寄。而還。信長大賞大夫功。日以武門棟梁。本多正信渡部守綱等。亡在越前。悔而來歸。是役。從有首功。

信長の軍敗るを見、川に沿ひて東し、後拒と俱に長政を撃ち、又大に之を破る。北ぐるを追ひて大寄に至りて還る。信長大に大夫の功を賞し、目するに武門の棟梁を以てす。本多正信、渡部守綱等、亡けて越前に在り。悔いて來り歸し、是の役、從ひて首功あり。

● 應軍勢にて進し ● 二軍之を引受けて河中に戦ふ ● 左右兩陣の兵を進めてはまみうち ● 武家のかし

八月。大風傷我。國最甚。命三奉行賑恤之。九月。信長攻一向賊于攝津。淺井

八月、大風、稼を傷く。我が國最も甚だし。三奉行に命じて之を賑恤せしむ。九月、信長、一向の賊を攝津に攻む。淺井・朝倉・六角氏並び起りて、其歸路を絶つ。大夫、酒井忠次・石川家成をして、赴き救はしめ、數々六角氏を撃つ。事平きて乃ち歸る。是の時、信長已に近畿十餘州を取る。而して大夫は屢かに

參河・遠江を定むるを得たり。強敵と壤を接するを以てなり。

● 捕えつけたる穀物をそこなふ ● 比ぎはしなくふ ● 一向宗の頭 ● 強敵と地つゞきなるが故なり

淺倉六角氏並起。絶其歸路。大夫使酒井忠次石川家成赴救。數撃六角氏。事平乃歸。是時信長已取近畿十餘州。而大夫屢得定參河遠江。以與強敵接壤也。

淺倉六角氏並起。絶其歸路。大夫使酒井忠次石川家成赴救。數撃六角氏。事平乃歸。是時信長已取近畿十餘州。而大夫屢得定參河遠江。以與強敵接壤也。

卷十九

德川氏正記

德川氏二

初信長深畏武田信玄事之甚謹。而信玄常欲西其兵。議曰。信長使家康當我。而自取易取之地。致強。大。今先獲家康。則信長隨手而亡。當是時。與信玄勅敵。

初め信長、深く武田信玄を畏れ、之に事ふること甚だ謹む。而して信玄は常に其兵を西せんと欲し、議して曰く、信長は家康をして我に當らしめて、自ら取り易きの地を取りて、強大を致す。今先づ家康を獲ば、則ち信長は手に隨ひて亡びんと。是の時に當りて、信玄を勅敵する者、唯北條氏康及び越後の國主上杉謙信あるのみ。是の歳冬、氏康卒し、子氏政立つ。和を信玄に請ふ。信玄其の今川氏眞を庇ふを以て之を難み、氏政をして、之を殺して、以て意を表せしむ。氏眞懼れ、海を航して來り奔る。大夫給するに邑を以てして、善く之を遇す。氏眞、素より

者。唯有北條氏康。及越後國主上杉謙信。是歳冬。氏康卒。子氏政立。請和於信玄。信玄以其底今川氏眞難之。使氏政殺之。以表意。氏眞懼。航海來奔。大夫給以邑。善遇之。氏眞素與謙信通好。勸大夫修幣焉。謙信喜答之。約夾攻信玄。大夫異父弟久松義勝。實駿河數年。爲信玄所奪。幽于甲斐。至是逃。踏雪而歸。足指皆墮。大夫厚視之。信玄於是決意絕我。而德川氏與武田氏始構難矣。

謙信と好を通ず。大夫に幣を修むるを勸む。謙信喜びて之に答へ、夾みて信玄を攻めんと約す。大夫の異父弟久松義勝、駿河に質たること數年なり。信玄の奪ふ所と爲り、甲斐に幽せらる。是に至りて逃れ出で、雪を踏みて歸る。足指皆墮つ。大夫厚く之を視る。信玄、是に於て、意を決して我と絶つ。而して德川氏、武田氏と始めて難を構ふ。

● 信玄に事へて謙信を誦む ● 信長は我が攻撃するに従つて滅亡せん ● 強くして匹敵する者 ● 今川氏眞を殺して他をなきことをあらはさしむ ● 賄物を贈り和親をすることを勸む ● 絶交す ● 戦ふ

二年。正月。大夫。遣從五位上。還侍從。二

二年正月、大夫、從五位上に進み、侍從に遷る。二月、信玄遠江に入り、三月、高天神を攻む。小笠原長忠堅く守る。乃ち兵を引き去り、其將秋山晴近をして

月。信玄入遠江。三月。攻高天神。小笠原長忠堅守。乃引兵去。令其將秋山晴近侵東參河。招降三族。獨菅沼定盈不降。四月。參河諸城多陷。我民叛。應信玄。欲襲岡崎。侍從遣青山忠門擊平之。忠門戰死。侍從出陣于吉田。遣兵擊信玄將山縣昌景。走之。信長聞我與信玄交兵甚危之。而不取來援。使人來言曰。聞信玄數侵貴國。某當赴援。

東參河を侵さしめ、三族を招降す。獨り菅沼定盈降らず。四月、參河の諸城多く陷る。我が民叛きて、信玄に應じ、岡崎を襲はんと欲す。侍從、青山忠門を遣し、撃ちて之を平けしむ。忠門戰死す。侍從出でて吉田に陣し、兵を遣して信玄の將山縣昌景を撃ち、之を走らす。信長、我の信玄と兵を交ふるを聞き、甚だ之を危む。而して敢て來り援はず。人をして來り言はしめて曰く、聞く、信玄、數々貴國を侵すと。某當に赴き援ひて以て去歲の勞に報ゆべし。而るに西事般なるを以て、未だ之を果さざるなり。願ふに濱松は敵の衝に當る。宜しく避けて岡崎に徙るべしと。侍從謝して曰く、某請ふ、徐に之を計らんと。使者出づ。侍從笑ひて近臣に謂ひて曰く、吾にして此を去らば、當に刀劍を踏折して復た用ひざるべし。信玄何ぞ畏るゝに足らんやと。

● 心許なく思ふ ● 姉川の役の家康の功勞 ● 多事なるが故に ● 武器をうちこはして復た戰爭をせし

以報去歲之勞。而以四事般未之果也。願濱松當敵衝。宜避徙岡崎。侍從謝曰。某謂徐計之。使者出。侍從笑謂近臣曰。吾而去此。當下斷折刀劍。不復用上焉。信玄何足畏哉。

十二月。信玄兵侵吉田。榎木侍從自將拒之。不取戰。而罷。三年正月。侍從入駿河。三月。上杉謙信將兵入信濃。以爲我聲援。十月。信玄將兵三萬餘。來侵。拔彌飯田二城。陣于袋井。見附。內藤信成。大久保忠世。將四千。至西

十二月、信玄の兵、吉田・榎木を侵す。侍從自ら將として之を拒ぐ。敢て戰はずして罷む。三年正月、侍從駿河に入る。三月、上杉謙信、兵に將として信濃に入りて、以て我が聲援を爲す。十月、信玄、兵三萬餘に將として來り侵す。彌・飯田の二城を抜き、袋井・見附に陣す。内藤信成・大久保忠世四千人に將として、西島に至り、信玄と遇ふ。信玄曰く、敵兵輕しく出づ。一人をして還らしむる勿れと。兵を應きて來り逼る。信成曰く、濱松八千の兵、其半は此に在り。而して衆寡敵せず。一敗、地に塗れば、何を以てか再戰せん。乃ち退く。侍從、前鋒の危きを聞き、自ら出でて馬籠に陣し、本多忠勝をして精騎を率る往きて之を援はしむ。

● 駿河國に在り ● 一度戰ひていたく敗れば ● 原文に一本也字なし ● オケリたる騎兵

島與信玄遇。信玄曰。敵兵輕出。勿使一人還。磨兵來逼。信成曰。濱松八千之兵。其半在於此。而衆寡不敵。一敗塗地也。何以再戰。乃退。侍從聞前鋒危。自出陣。馬籠。使下本多忠勝率精騎往援之。

忠勝至一言。坂信成等欲退。甲斐兵尾之。結而不解。忠勝善用槍。所愛一槍名曰。截蜻蛉。於是忠勝戴鹿角冑。飛截蜻蛉。單騎馳入。兩軍之間。兩軍乃開。終收兵而退。命卒積薪坂頭。而伏銃其側。敵至。銃發火起。敵不能復尾。時我兵多蒙唐首。信長所貽也。甲斐人爲之語曰。

忠勝、一言坂に至る。信成等退かんと欲す。甲斐の兵、之に尾し、結びて解けず。忠勝善く槍を用ふ。愛する所の一槍を名づけて截蜻蛉と謂ふ。是に於て、忠勝、鹿角の冑を戴き、截蜻蛉を提げ、單騎馳せて兩軍の間に入る。兩軍乃ち開く。終に兵を收めて退き、卒に命じて薪を坂頭に積みて、銃を其側に伏す。敵至る。銃發し火起る。敵、復た尾する能はず。時に我が兵多く唐首を蒙る。信長の貽る所なり。甲斐の人之が爲に語りて曰く、家康に分に過ぐる者二有り。唐首なり、平八なりと。

鹿の角の立物ある冑 牛尾を以て冑のまはりにはさまはしたるもの 身分不相應

家康有過分者二。唐首也平八也。

已而信玄遣其子勝頼等。攻二股。馬場信房備我援。路侍從赴援。渡二大龍河。不取戰。歸敵結。筏河上。以絕二城。汲道。守將致。城。收入。濱松。我諸城多叛。降信玄。信玄合兵。逼濱松。乃令三松平清善往拒。字津山。濱松諸將勸請。援於織田氏。侍從不。欲之。諸將曰。信長富五倍於我。而連請我援。我以二國抗二強敵。未嘗請援。今而一請。何不可也。侍從從之。

已にして信玄、其子勝頼等を遣して二股を攻め、馬場信房をして我が援路に備へしむ。侍從赴き援けて、天龍河を渡り、敢て戦はずして歸る。敵、筏を河上に結びて、以て城の汲道を絶つ。守將城を致す。收めて濱松に入る。我が諸城多く叛きて、信玄に降る。信玄兵を合せて濱松に逼る。乃ち松平清善をして、往きて宇津山に拒がしむ。濱松の諸將、勸めて援を織田氏に請はしむ。侍從之を欲せず。諸將曰く、信長の富我に五倍す。而して連りに我に援を請ふ。我れ二國を以て強敵に抗し、未だ嘗て援を請はず。今にして一たび請ふ、何ぞ不可ならんやと。侍從之に従ふ。

援兵の進路 水を汲取る道 只今一國請ふ

十一月。信長乃遣佐久間信盛、平手汎秀等來援。相持踰月。十二月。信玄部兵四萬。陣于三形原。縱火濱松城外。侍從怒。欲出擊之。信盛牽其衣。諫曰。寡君戒臣等曰。信玄老將也。其兵精強。天下無敵。德川欲出戰。汝當固止之。侍從曰。信玄入小田原。旌摩其門。而氏康不出。世傳以嗤之。今敵踏藉我城下。而不發一矢。非丈夫也。果然。則吾當削髮披緇耳。諸將固諫而止。

十一月、信長乃ち佐久間信盛・平手汎秀等を遣して來り援はしむ。相持して月を踰ゆ。十二月、信玄、兵四萬を部し、三形原に陣し、火を濱松の城外に縱つ。侍從怒り、出でて之を撃たんと欲す。信盛其衣を牽きて諫めて曰く、寡君臣等を戒めて曰く、信玄は老將なり。其兵精強なること、天下に敵なし。徳川出で戦はんと欲せば、汝當に固く之を止むべしと。侍從曰く、竊に信玄小田原に入り、旌其門を摩す。而して氏康出でず。世傳へて以て之を嗤ふ。今、敵、我が城下を踏藉す。而して敢て一矢を發せざるは、丈夫に非ざるなり。果して然らば、則ち吾れ當に髮を削り緇を披るべきのみと。諸將固く諫めて止む。

● 相互に對陣して ● 袖を引き ● 精銳にして強きこと天下無雙なり ● 踏みつくる ● 僧となり僧衣をつけて世に立たざるのみ

二十二日。信玄退入井伊谷。侍從遂北出。陣三形原。日已哺。分兵八千爲九隊。遣鳥居忠廣往視敵狀。返報曰。信玄返軍而來。陣堅勢銳。戰必不利。請速收兵。侍從不聽。更使渡部守綱往亦報曰。勿與戰。侍從叱曰。人入我室。我枕酒有下隊而不較者上哉。命大久保忠佐柴田康忠往挑戰。守綱止之。不肯而聽。與石川數正本多忠勝榊原康

二十二日、信玄退きて井伊谷に入る。侍從遂に北に出で、三形原に陣す。日已に哺るなり。兵八千を分ちて九隊と爲し、鳥居忠廣を遣して往きて敵狀を視はしむ。返り報じて曰く、信玄、軍を返して來る。陣堅く勢銳し。戦はば必ず利あらじ。請ふ、速に兵を收めんと。侍從聽かず。更に渡部守綱をして往かしむ。亦報じて曰く、與に戦ふ勿れと。侍從、叱して曰く、人、我が室に入りて我が枕を蹴る。猶ほ臥して較せざるものあらんやと。大久保忠佐・柴田康忠に命じて、往きて戦を挑ましむ。守綱之を止む。肯せずして馳す。石川數正・本多忠勝。榊原康政と、共に敵將小山田昌行を撃ちて、之を走らす。侍從、麾下を以て、酒井忠次・大須賀康高と、山縣昌景を撃ちて亦之を走らせ、北ぐるを追ひて進む。

● ひぐれ ● 敵のやうす ● 一本に固とあり ● 襲所に入り枕を蹴て名乗りかく、なほ戦はずして止むものあらんや

政。共擊敵將小山田昌行。走之。侍從以應下。與酒井忠次大須賀康高。擊山縣昌景。亦走之。追北而進。

勝頼與馬場信房自傍進。逼我麾下。昌景昌行皆返之。信玄自縱奇兵。橫擊我軍。軍亂。信玄乃鼓全軍而徐進。山岳爲震。我軍終大敗。信盛走。汎秀死。數正與松平家忠止戰。不支。侍從切齒。口出沫。厲衆返擊。成瀨白度不脫。欲返決死。士多表馬步從。

勝頼、馬場信房と傍より進み、我が麾下に逼る。昌景・昌行、皆之に返す。信玄自ら奇兵を縱ち、横に我が軍を撃つ。軍亂る。信玄乃ち全軍を鼓して徐に進む。山岳爲に震ふ。我が軍終に大に敗る。信盛は走り、汎秀は死す。數正、松平家忠と止り戦ふ。支へず。侍從、齒を切し、口沫を出し、衆を厲して返り撃つ。成瀨正義・木多忠真・安藤基能・鳥居忠廣等、死する者凡て二百餘人なり。敵兵益々逼る。侍從自ら脱せざるを度り、返りて死を決せんと欲す。士多く馬を喪ひて歩して従ふ。

● 鼓譟して進む聲。山岳もふるひ動くばかりなり ● 齒をくみしはばり。極念がかり口角泡を飛ばし ● 大阪は馬を殺されて徒歩して隨從す

夏目正吉在濱松。聞急馳至。諫曰。勝敗常事耳。此非大將授命之日。君第速走。臣請代焉。乃扣其馬南向。以槍敵策馬。馬走。正吉呼。畔柳武重曰。子以我君免。武重欲止共死。正吉揮而去之。自奮槍拒敵。苦戰而死。侍從得間而走。使四忠世樹旗于岸崖。以收敗軍。敵以爲大將。爭赴之。侍從因得遠城。城門闔。武重大呼曰。君歸矣。盡開闔而入。

夏目正吉濱松に在り。急を聞きて馳せ至り、諫めて曰く、勝敗は常事のみ。此れ大將、命を授くるの日に非ず。君、第速かに走れ。臣請ふ代らんと。乃ち其馬を扣へ南に向け、槍敵を以て馬を策つ。馬走る。正吉、畔柳武重を呼びて曰く、子、我が君を以て免れよと。武重止りて共に死せんと欲す。正吉揮ひて之を去らしめ、自ら槍を奮ひて敵を拒ぎ、苦戦して死す。侍從、間を得て走り、忠世をして旗を岸崖に樹て以て敗軍を收めしむ。敵以て大將と爲し、争ひて之に赴く。侍從囚りて城に達するを得たり。城門闔づ。武重大に呼びて曰く、君歸る。盡ぞ開かざると。開きて入る。一城敗を開きて大に擾る。高木廣正、一髮首を得て還る。侍從命じて之を刀鋒に貫き、徇へて曰く、兩軍鬪亂れ、吾れ信玄を獲たりと。衆乃ち定る。

● 大將の死すべき時にあらず ● 槍の石突 ● 濱松城北の崖 ● 一個の坊主首 ● あちつく

家康兵何強項也。會石川家成自掛川入援。我軍稍振。侍從上城樓。望甲斐軍。願富永某曰。汝以爲敵去留何如。對曰。軍無輜重。敵不見烟。是必去矣。明日。信玄果去。陣刑部馬場信房謂之曰。臣檢敵屍。北首者俯。南首者仰。可三以見家康訓練之矣。向使主公與家康和結。以爲先鋒。則天下何足圖乎。

● 守り防ぐことを相談す ● 銃卒 ● 夜明前の時刻 ● 調情にして屈せざることを ● 城の標 ● 敵の死傷をしらぶるに ● 敵に背を見せざるをいふ ● 天下中に心配するものなし

天正元年正月。將軍足利義昭下教信玄。使與信長及侍從和信。玄不肯。引兵攻野田。菅沼定盈與援將松平忠正堅

天正元年正月、將軍足利義昭教を信玄に下し、信長及び侍從と和せしむ。信玄肯せず。兵を引きて野田を攻めしむ。菅沼定盈援將松平忠正と堅く守る。敵、竹橋を蒙り、龜甲車を用ふ。外城陥る。乃ち退きて、内城を保つ。敵、鹿砦を環し、地道を鑿して以て井泉を絶つ。侍從、自ら將として之を救ふ。甲斐の軍犯すべからず。退きて吉田に次し、使を馳せて援を信長に乞ふ。信長敢て出でず。

守。敵蒙竹橋。用龜甲車。外城陥。乃退。保内城。敵環鹿砦。鑿地道。以絶井泉。侍從自將救之。甲斐軍不可犯。退次吉田。聽家乞援於信長。信長不取。出城中有善笛者。村松善銃者。鳥居村松夜上樓吹笛。敵數騎來。城外聽之。標竿而去。鳥居晨起。見之。曰。聞信玄喜音。

城中笛を善くする者に村松、銃を善くする者に鳥居有り。村松、夜樓に上りて笛を吹く。敵の數騎城外に來りて之を聽き、竿を標して去る。鳥居晨に起き、之を見て曰く、聞く、信玄音を喜ぶと。是に非ざるを得んやと。密かに準を定めて銃を安き、夜に逮び、村松をして復た笛を吹かしむ。敵復た來り聽く。銃發して、一騎を墮す。旦日、敵中に傳言す、信玄疾有り。來りて城を致すを諭す。定盈・忠正、城を出で自殺して以て士卒を免さんと請ふ。信玄之を許す。城を出づる比伏起り、虜へられて長篠に囚はる。誘ひて之を降さんとす。一人屈せず、初め奥平道文・菅沼正員・菅沼刑部、質を濱松に置き、而るに叛きて、甲斐に降る。是に於て、二人を歸して以て其質に易へんと請ふ。信玄乃ち人をして來り言はしむ。侍從之を許す。二人の節を守るを嘉し、其采邑を加ふ。

● 竹のたて ● 攻城に用ふる具 ● 材木樹枝等を集め敵の進路を遮るとりて、鹿角の如くなればいふ ● 笛の巧みな者 ● 竹竿をしるしに立て、立去る ● 音楽を好む、推するに信玄ならん ● ねらひをきめぬ ● 定盈・忠正二人の節操を守りて降せざるをほめ

得非是乎。密定準安銃。使二村松復吹笛。敵復來聽。銃發。墜一騎。且日。敵中傳言信玄有疾。來諭致城。定盈忠正請出城自殺。以免二十卒。信玄許之。比出城。伏起。彼虜。囚于長篠。誘降之。二人不屈。初與平道文。菅沼正員。菅沼刑部。置質於三瀨。松而叛。降甲斐。於是請歸二人。以易其質。信玄乃使二人來言。侍從許之。嘉二人守節。加其采邑。

二月。信玄病。創分兵而去。使我叛將守七城。以逼中瀨。松侍從曰。可。使敵在。我近郊。三月。使世子信康。石川家成。平岩親吉。久野宗能。復其五城。餘皆解走。四月。信玄創復發。歸國。途卒。勝頼常國。祕

二月、信玄創を病み、兵を分ちて去り、我が叛將をして、七城を守りて以て濱松に逼らしむ。侍從曰く、敵をして我が近郊に在らしむべけんやと。三月、世子信康・石川家成・平岩親吉・久野宗能をして、其五城を復せしむ。餘は皆解きて走る。四月、信玄、創復た發し、國に歸る。途に卒す。勝頼國に當る。祕して喪を發せず。五月、侍從、駿河を徇ふ。六月、二股を巡り、城山に壁す。七月、菅沼正員を長篠に攻め、火箭を以て其城を焚く。正員退きて、子城を保つ。乃ち壘を熊山に築き、兵を留めて還る。八月、勝頼來り援ひ、熊山を攻む。侍從、自ら將として邀へ戦ふ。甲斐の諸將退き、險阻を保つ。侍從、兵を伏せて作り遁る。敵敢て出でず。遂に去る。城陷る。正員出でて甲斐に奔り、敵將還りて之を助け、

願來寺を成る。又奥平道文を助けて築手を成る。

● 取返せしむ ● 皆國をときて去る ● 死を發表せず ● わかれ城

不發。喪。五月。侍從徇駿河。六月。巡二股。壁于城山。七月。攻菅沼正員于長篠。以火箭焚其城。正員退。保子城。乃築壘。熊山。留兵。而還。八月。勝頼來。接攻熊山。侍從自將邀戰。甲斐諸將退。保險阻。侍從伏兵。而伴遁。敵不敢出。遂去。城陷。正員出奔甲斐。敵將還助之。戊辰。願來寺。又助奥平道文。成築手。

道文之叛也。其子貞能諫之。及信玄去。道文危疑。貞能子信昌略涉書志。爲篋之。繇曰。蛇年之人死。道文謂信玄生。歲辛巳。必既死也。遂決意歸。

道文の叛くや、其子貞能、之を諫む。信玄去るに及びて、道文危疑す。貞能の子信昌、略書志に渉る。爲に之を篋す。繇に曰く、蛇年の人死すと。道文謂ふ、信玄の生歳は辛巳なり。心す既に死したるなりと。遂に意を決して款を歸る。勝頼黒瀬に在り。質を定能に徴す。貞能拒む能はず。其少子を遣す。或ひと、貞能異心ありと告ぐ。武田信豊之を召す。貞能即ち往く。從者を戒めて曰く、未だ我が首を見ざれば動くこと勿れと。入りて信豊を見る。信豊之を詰る。貞能笑ひて曰く、公、反間を信する莫れと。信豊意解け、之と碁を圍み、局を畢へて

款。勝頼在黒瀬。徵實於貞能。貞能不能拒。遣其少子。或告貞能有異心。武田信豐召之。貞能即往。戒從者曰。未見我首。勿動。入見信豐。信豐詰之。貞能笑曰。公莫信反間。信豐意解。與之圍碓。舉局而出。勝頼軍監城道壽招之。飲。又往。道壽使入。出呼曰。奥平氏被誅。從者不動。貞能出而歸城。乃舉族來奔。甲斐戊將追之。侍從遣本多廣孝。松平伊忠。迎之瀧山。擊破追兵。進城。築手下。又破之。勝頼怒。殺其質。

出づ。勝頼の軍監城道壽、之を招きて飲す。又往く。道壽、人をして出で呼ばしめて曰く、奥平氏誅せらると、從者動かさず。貞能出でて城に歸り、乃ち舉族來り奔る。甲斐の戊將之を追ふ。侍從、本多廣孝・松平伊忠を遣し、之を瀧山に迎へ、追兵を撃ち破り、進みて築手の下に戦ひ、又之を破る。勝頼怒り其質を殺す。

● 危ぶみ疑ふ ● あらまし經書歴史に違はず ● トのことは ● 敵を欺く者 ● 碓を打ち終り出づ ● 一族無く

十月。勝頼遣諸將。搦濱松。留守本多重次等。迎撃卻之。侍從乃還。

十月、勝頼、諸將を遣して濱松を搦かしむ。留守本多重次等、迎へ撃ちて之を卻く。侍從乃ち還る。勝頼、出でて見附に陣す。戦はずして去る。二年正月、侍從正五位上に進む。三月、上杉氏來りて、好を修む。侍從、長篠城を修め、

勝頼出陣。見附。不戰而去。二年正月。侍從進正五位上。三月。上杉氏來修好。侍從

諸々の亡地を復す。四月、乾城を攻め、雨に遇ひて引き還る。城兵尾撃して、殿軍に死する者多し。

● 前に失ひたる地 ● 追撃をして ● しんがりの軍

五月。勝頼大舉。來攻野田。城壁未修。菅沼定盈棄城。退。六月。勝頼進攻高天神。侍從乞援於信長。信長聞之。肯來援。勝頼疾攻。以利誘降。城將小笠原長忠。長忠

五月、勝頼、大舉して、來りて野田を攻む。城壁未だ修らず。菅沼定盈城を棄てて退く。六月、勝頼進みて高天神を攻む。侍從、援を信長に乞ふ。信長、信玄の定死を聞きて、乃ち肯て來り援ふ。勝頼疾く攻め、利を以て城將小笠原長忠を誘降す。長忠遂に降る。信長、之を聞きて、止りて吉田に次す。侍從赴きて謝す。信長も亦其の信玄を拵ぐの勞を謝し、黄金二袋を贈りて去る。侍從、長忠の邑を以て大須賀康高に賜ひ、馬伏の壘を守らしむ。九月、勝頼兵二萬に將として來り侵す。侍從、兵七千に將として天龍河に陣す。我が兵分れて二と爲り、一は上流に在り、一は下流に在り。敵の渡るを俟ちて之を夾撃せんと欲す。甲斐の

遂降。信長聞之。止次吉田。侍從赴謝。信長亦謝其拜。信玄之勞。贈黃金二袋而去。侍從以長忠。邑賜大須賀康高。使守馬伏壘。九月。勝頼將兵二萬來侵。侍從將兵七千陣于天龍河。我兵分爲二。一在上流。一在下流。欲俟敵渡。夾擊之。甲斐諸將視我陣不可犯。勸勝頼退去。

諸將、我が陣の犯すべからざるを視、勝頼に勸めて退き去る。
● 死去の眞なるを聞きて ● 河上 ● はさみうたんと欲す

三年正月。天野康景有吉夢。以爲下克上。斐之兆。獻之。二十日。因命連歌會。著爲恒例。二月。侍從出獵城下。見一或童。容貌秀俊。問之。對曰。非伊直

三年正月、天野康景、吉夢有り。以て甲斐に克つるの兆と爲し、之を獻す。二十日因りて、連歌會を命ず。著して恒例と爲す。二月、侍從、城下に出獵して一或童を見る。容貌秀俊なり。之を問ふ。對へて曰く、非伊直親の孤子、名は直政、幼字は萬千代、繼父松下清景に育はると。侍從曰く、我に仕へんや否やと。直政曰く、命を奉せんと。乃ち載せて歸り、遂に其舊邑井伊谷を賜ひ、故の部曲を統べしむ。是の月、長篠を以て奥平信昌に賜ふ。井伊氏・奥平氏は、皆南朝の時、官軍に屬せし者なり。侍從、信昌の用ふべきを知り、松平伊昌をして之を

助けしめ、益々守禦を修めて、以て勝頼に備ふ。

● 吉瑞の夢 ● 常例 ● 十五歳以上の少年をいふ ● 小かたすぎる ● 部族 ● 役に立つ

親孤子。名直政。幼字萬千代。育於繼父松下清景。侍從曰。仕我否。直政曰。奉命。乃載歸。遂賜其舊邑井伊谷。統故部曲。是月。以長篠賜奥平信昌。井伊氏。奥平氏。皆南朝時屬官軍者也。侍從知信昌可用。使松平伊昌助之。益修守禦。以備勝頼。

四月、勝頼、字理を侵す。我が吏人大賀彌四郎といふ者、文無害を以て岡崎の胥徒より起り、二十餘邑の稅務を司るに至り、竊かに異圖を懷き、其黨小谷・倉地・山田の三人と謀り、款を甲斐に通ず。曰く、臣、岡崎の管鑰を掌る。城の有する所は、世子と諸將の質とのみ。請ふ、大師を啓かん。質を夾みて以て濱松に臨まば、降らざるなからんと。勝頼大に喜び、期を刻して來り襲はんとす。山田、中ごろ悔いて世子に自首す。世子、人をして其臥内に伏して之を聽かしめ、盡く其實を得、急に之を濱松に報す。倉地・小谷、事覺るゝを知りて逃る。捕

四月。勝頼。字理。我吏人。大賀彌四郎。者。以文無害。起岡崎。胥徒。至司。二十餘。邑稅務。竊懷。異圖。與其黨。小谷。倉地。山田。三人。謀。通。款。甲斐。曰。臣。掌岡崎管鑰。

城之所_レ有_レ世子與_二諸將_一實_二耳_一。請_レ啓_二大將_一。挾_レ實_二以臨_二濱松_一。無_レ不_レ降_レ矣。勝頼大喜。刻_レ期來_レ襲_二山田_一。中悔。自_二首世子_一。世子使_レ人伏_二其隊內_一。聽_レ之。盡得_二其實_一。急報_二之濱松_一。倉地小谷知_二事覺_一。逃_レ。捕斬_二倉地_一。終執_二大賀_一。窮治_レ罪。乃反_二接馬_一。上_レ徇_二之_一。城先_レ礮_二其妻子_一。然後_レ生理_二之地_一。而鋸_二其首_一。勝頼潛_レ兵_二至_二楡木_一。閉_二大賀_一。敗_レ。轉掠_二楡木_一。牛窪侍從拒_二吉田_一。世子拒_二法藏寺_一。擊_レ卻_レ之。

へて倉地を斬り、終に大賀を執へ、窮治し罪に服す。乃ち馬上に反接し、之を二城に徇へ、先づ其妻子を礮し、然る後に之を地に生理し、而し其首を鋸す。勝頼兵を潜めて楡木に至り、大賀の敗を聞き、轉じて楡木・牛窪を掠む。侍従は吉田に拒ぎ、世子は法藏寺に拒ぎ、撃ちて之を卻く。

- 文筆に長じ如何なることにも密なき機切りまはす
- 小役人
- 叛逆の計策
- しまりをつかさどる
- 將軍の軍勢手引をせん
- 罪を自から申出づ
- 罪状をしらぶ
- 後向に乘せ
- 鋸にてひき切る

五月。勝頼大舉攻_二長篠_一。築壘_二于_二鷺巢山_一。分_レ兵_二絕_二其饑道_一。信昌與_二伊

五月、勝頼、大舉して長篠を攻め、壘を鷺巢山に築き、兵を分ちて其饑道を絶つ。信昌、伊昌と、衆を厲して堅く守る。侍従、小栗大六をして援を信長に乞はしむ。信長出づるを果さず。奥平貞能、自ら往きて固く請ふ。信長之を許す。

昌厲_レ衆堅守。侍從使_レ小栗大六乞_レ援_二於_二信長_一。信長不_レ果_レ出_レ。奥平貞能自_レ往_レ固_レ請_レ。至_レ。信昌出_レ戰_レ。卻_レ敵_二焚_二其竹橋_一。勝頼攻_レ奪_二其饑城_一。益修_二攻具_一。壘_二地地道_一。環_二壘_一。夜_レ。信昌謂_二其衆_一曰_レ。孰能_レ出_レ促_二援兵_一者_レ。鳥居勝高素_レ備_二強_一。稱_二強_一。右衛門進_レ曰_レ。臣請_レ往_レ矣。信

未だ至らず。信昌出で戦ひて敵を卻け、其竹橋を焚く。勝頼攻めて、其饑城を奪ひ、益々攻具を修め、地道を鑿ち、壘柵を環し、攻撃すること晝夜に絶つ。信昌、其衆に謂ひて曰く、孰か能く出でて援兵を促す者ぞと。鳥居勝高素より備強、強右衛門と稱す。進みて曰く、臣請ふ往かんと。信昌之を許す。夜、縋して出で、侍従の營に至り、信昌の命を致して曰く、城兵未だ疲れず。鉛硝も亦具る。缺くる所は糧のみ。急に之を救はずんば、則ち信昌自殺して士卒を免れしめんと。侍従召見し、之を慰勞して曰く、信長既に途に在り。吾も亦將に明日を以て出でんとすと。因りて勝高を留めて自ら從へんとす、辭して曰く、城中領を延して報を遅つ。臣留るに忍びざるなりと。即夜、馳せ歸り、將に柵を踰えて城に入らんとす。敵の邏兵の執ふる所と爲る。勝頼命じて縛を解き、之を諭して曰く、汝往きて、城兵に語けよ。信長・家康來る能はず。宜しく速かに出で降るべしと。則ち吾れ厚く汝を賞せんと。勝高曰く、諾と。乃ち甲士十餘人をして刃

昌許之。夜縫而出。至侍從營。致信昌命。曰。城兵未疲。鉛礮亦具。所缺者糧耳。不急救之。則信昌自殺。以免士卒。侍從召見。慰勞之。曰。信長既在途。吾亦將下以明日。日出。因留勝高。白從。辭曰。城中延領遲報。臣不忍留也。即夜馳歸。將險櫓入城。爲敵邏兵所執。勝賴命解縛。諭之曰。汝往謂城兵。信長家康不能來。宜速出降也。則吾厚賞汝矣。勝高曰。諾。乃使甲士十餘人。露刃擁之。至子城下。勝高仰城大呼。諸君努力。大兵來援。不出三日。言未畢。刃叢而死。勝賴益嚴防備。張索濠上。以防城兵逃出一。

を露して之を擁して城下に至らしむ。勝高城を仰ぎ、大に呼びて曰く、諸君努力せよ、大兵來り援はんこと、三日を出でじと。言未だ畢らず、刃叢りて死す。勝賴、益々防備を嚴にし、索を濠上に張りて以て、城兵の逃れ出づるを防ぐ。

- 糧食を送る道路
- 出警の城
- 剛毅にして強し
- 繩かけおろして下がる
- 九火藥
- いたはりなきさむ
- 道中に在り
- 見附の兵士
- 抜身刀を持して扇扇をとりまきて
- 刀が四方より下りて切殺さる

十八日。侍從以騎卒二萬先進。陣高松。信長與長子信忠合五萬。

十八日、侍從、騎卒二萬を以て先づ進み、高松に陣す。信長、長子信忠と五萬の家を合せて設樂に陣す。信昌之を望見し、書を作りて曰く、城猶ほ堅守するに足る。請ふ、輕々しく進みて兵を損する勿れ。敵若し急に攻めば、當に鐘を鳴して

衆陣設樂。信昌望見之。作書曰。城猶ほ堅守。請勿輕進。損兵。敵若急攻。當鳴鐘報之。使鈴木金七。齎往。夜險濠。以短刀一截。索濠而來。侍從獲書。以告信長。信長甚憚。甲斐人植重。櫓穿。使侍從亦倣之。大久保忠世。其弟忠佐。奉命。以銃手三百。爲先鋒。三河卒小栗某。奔在甲斐。於是爲勝賴。使上國而還。竊懷歸志。過二本多忠勝。忠勝攜謁。侍從授之密謀。使下歸。告勝賴。以中援軍。易與狀。勝賴大喜。欲戰。將佐

之を報すべしと。鈴木金七をして齎し往かしむ。夜、濠を踰え、短刀を以て索を截り、泗ぎて來り達す。侍從書を獲て、以て信長に告ぐ。信長、甚だ甲斐の人を憚り、重櫓を植て、壘を穿ち、守る烏銃を以てし、侍從をして、亦之に倣はしむ。大久保忠世其弟忠佐、命を奉じ、銃手三百を以て先鋒と爲る。三河の卒小栗某、奔りて甲斐に在り。是に於て、勝賴の爲に上國に使して還り、竊かに歸志を懷き、本多忠勝に過る。忠勝攜へて謁す。侍從、之に密謀を授け、歸りて勝賴に告ぐるに、援軍與し易き狀を以てせしむ。勝賴大に喜び、戦はんと欲す。將佐皆諫む。聽かず。乃ち兵を分ちて城に當り、武田信實をして鳶巢山を守らしめて自ら進みて瀧澤を渡り、兵を勅して十三隊と爲す。

- 堅く守る
- 二重の櫓を作り設け
- 相手とし弱きありさま

皆諫弗聽。乃分兵當城。使武田信實守高巢山。而自進渡瀧澤。勒兵爲二十三隊。

本多廣孝酒井忠次相謂曰。我誘敵入死地矣。成瀬正一嘗在甲斐。記敵旗幟。侍從召之。指甲斐軍。問曰。左者爲誰。曰。山縣昌景也。問其右者。曰。馬場信房也。問其中者。曰。公族也。忠次因說曰。敵鋒銳甚。請分兵遠出其背。焚高巢壘。使敵顧後。則克矣。侍從曰。善。未告信長。信長數發候騎。候敵。皆曰。兵衆而整。不可犯也。一軍失色。

本多廣孝・酒井忠次相謂ひて曰く、我れ敵を誘ひて死地に入れんと。成瀬正一、嘗て甲斐に在り。敵の旗幟を記す。侍從之を召し、甲斐の軍を指して、問ひて曰く、左の者を誰と爲すと。曰く、山縣昌景なりと。其右なる者を問ふ。曰く、馬場信房なりと。其中なる者を問ふ。曰く、公族なりと。忠次因りて説きて曰く、敵鋒、我に懸ひ、鋭甚だし。請ふ、兵を分ちて遠りて其背に出で、高巢山の壘を焚き、敵をして後を顧みしめば則ち克たんと。侍從曰く、善しと。未だ信長に告げず。信長、數々候騎を發して敵を候ふ。皆曰く、兵衆くして整ふ。犯すべからざるなりと。一軍色を失ふ。

● のがる、道なき處 ● 記憶す ● 敵我に向つて攻めかゝらんとし勢力はげし ● 斥候の騎兵

二十日。信長諸將を問計。諸將氣沮。莫敢言者。忠次進曰。臣使三人。間視敵兵。寡贏。敗兆皆備。請明日決戰。信長曰。汝之勇。果如所聞。因命酒船。忠次。使傳之。信忠曰。聞汝善。撈蝦舞。爲我一爲之。忠次起舞。衆敲箏。和之。舞畢。復議戰。忠次復進曰。是役保寡君國事。臣

二十日、信長、諸將を召して、計を問ふ。諸將氣沮み、敢て言ふ者なし、忠次進みて曰く、臣、人をして敵兵を間視せしむるに、寡贏なり。敗兆皆備る。請じて忠次に觸し、之を信忠に傳へしめて曰く、聞く、汝、撈蝦舞を善くすと。我が爲に一たび之を爲せと。忠次起つて舞ふ。衆、箏を敲きて之に和す。舞畢り、復た戰を議す。忠次復た進みて曰く、是の役は寡君の國事に係る。臣敢て辭讓せずと。因りて高巢を襲ふの策を進む。信長心に之を善しとす。而して其漏泄を恐れ、伴り叱して忠次を斥く。忠次憚ばず。罷む。已にして信長陰かに之を召還し、兵五千を附して行かしむ。侍從、松平伊忠、其子家忠・本多廣孝・菅沼定盈・阿部定次、奥平貞能に命じ、三千人を率ゐて忠次を助けしむ。約して曰く、至れば則ち燧を擧げよと

● うかゞ見る ● 兵少く且つ弱きこと ● 敵のきざし十分なり ● 一本に賜とあり ● 是びすくひの舞履を叩きて離し立つ ● はかりごとのもるゝこと ● 合圖に上ぐるのよし

不_レ敢辭讓。因進_レ襲_レ集_レ之策。信長心善_レ之。而恐_レ其漏泄。作叱_レ斥_レ忠次。忠次弗_レ憚。罷_レ已。而信長陰召_レ還_レ之。附_レ兵五千。使_レ行。侍從命_レ松平伊忠。其子家忠。本多廣孝。菅沼定盈。阿部定次。奥平貞能。率_レ三千人。一助_レ忠次。約_レ曰。至則舉_レ燧。

忠次不_レ歸_レ舍。而發_レ乘_レ夜險。五更達_レ壘下。伊忠謂_レ家忠曰。我必戰死。汝全_レ驅以事_レ主公。家忠泣_レ請_レ共_レ死。伊忠叱_レ曰。國恩未_レ報。又絕_レ先祀。忠孝安在。乃分_レ兵附_レ之。訣_レ飲_レ而去。味爽。忠次舉_レ燧。大喊_レ逼_レ壘。信實惶_レ遽_レ出_レ拒。伊忠力戰死。

忠次、舍に歸らずして發し、夜に乗じて險を踏え、五更、壘下に達す。伊忠、家忠に謂ひて曰く、我れ必ず戰死せん。汝、軀を全くして以て主公に事へよと。家忠泣きて共に死せんと請ふ。伊忠叱して曰く、國恩未だ報いず、又先祀を絶たば、忠孝安に在ると。乃ち兵を分ちて之に附し、訣飲して去る。味爽忠次、燧を舉げ、大に喊して壘に逼る。信實、惶遽出で拒ぐ。伊忠力戰して之に死す。終に信實を破殺し、遂に諸砦を焚く。甲斐の軍驚動す。我が兵、燧を視て大に喜ぶ。織田氏將に挑戰せんとす。忠佐、忠世に謂ひて曰く、我は主、彼は客なり。彼をして先づ戰はしむるは、我の恥なりと。忠世曰く、然りと。乃ち共に柵外に出でて敵を誘ふ。敵の左陣の突騎三千先づ縱つ。我が銃隊撃ちて之を卻く。敵の中軍繼ぎ至る。忠世・忠佐周馳健闘す。

之。終破_レ殺_レ信實。遂焚_レ諸砦。

● 壘の下に行きつく ● 國の恩を報せず先祖の祀を絶たば忠孝共にすたる ● 別れの酒宴をなして去る ● 夜明がた ● もそれあわつ ● 驚き動く ● 旗なり ● かげめぐりけなげに取ふ

甲斐軍驚動。我兵觀_レ大_レ喜。織田氏將_レ挑戰。忠佐謂_レ忠世曰。我主_レ被_レ客。使_レ被_レ先_レ戰。我之_レ恥也。忠世曰。然。乃共_レ出_レ柵外。誘_レ敵。敵左陣突騎三千先縱。我銃隊擊_レ卻_レ之。敵中軍繼至。忠世忠佐周馳健闘。

信長望_レ其背。旗徽號。使_レ二人來問_レ曰。一人以_レ蝶爲_レ徽。一人以_レ鏡爲_レ徽。其督_レ衆也。如_レ臂使_レ指_レ敵乎。我乎。侍從對_レ曰。蝶爲_レ兄。鏡爲_レ弟。皆僕家舊_レ臣也。信長歎_レ曰。德川氏

信長、其背旗徽號を望み、人をして來り問はしめて曰く、一人は蝶を以て徽と爲し、一人は鏡を以て徽と爲す。其の衆を督するや、臂の指を使ふが如し。敵か我かと。侍從、對へて曰く、蝶は兄たり。鏡は弟たり。皆僕が家の舊臣なりと。信長歎じて曰く、德川氏何ぞ佳士多きやと。是の時に當りて、二人の擊破する所と爲る者、皆轉じて信長の前軍に赴く。敵の右軍も亦銃を冒して直進す。信長の前軍走りて柵内に入る。柵殆ど破る。敵其麾下に逼る。侍從、騎を馳せて信長に告げて曰く、公諸隊をして齊しく銃を發せしめよ。我が軍槍を用ひて横撃せ

何多住士也。當是時爲三人所擊破者。皆轉赴信長前軍。敵右軍亦冒銃直進。信發銃。我軍用槍橫擊。可克也。信長傳令敵兵大沮。

ば、以て克つべきなりと。信長令を傳ふ。敵兵、大に沮む。

● しろし ● 其部下の兵を自由に引きまはす有様は恰も臂の指を使ふが如し ● 一本に良臣とあり、よき士 ● 本陣にせまる ● 大に氣が弱る

本多忠勝。松平忠正。鳥居元忠。榊原康政等。撥槍接戰。甲斐諸軍遂大潰。信昌伊昌出長篠夾擊。幾獲勝。賴勝賴。是日。自卯至午。戰凡三八合。斬首一

本多忠勝・松平忠正・鳥居元忠・榊原康政等、槍を撥めて接戦す。甲斐の諸軍遂に大に潰ゆ。信昌・伊昌長篠を出でて夾撃し、幾ど勝頼を獲んとす。勝頼屢かに免る。是の日、卯より午に至り。戰凡そ五十八合、斬首一萬餘級なり。武田氏の宿將精兵略々此に殲く。侍従往きて信長に説きて曰く、今大勝の威に乗じて、長驅して北ぐるを追はば、則ち甲斐・信濃一舉して取るべきなりと。羽柴秀吉從ひて軍中に在り。亦之を勸む。信長聽かずして去る。侍従、信昌を見て、其堅守を賞し、采邑を加賜し、女を以て之に妻はすを許し、遂に大に將士を賞す。

萬餘級。武田氏宿將精兵略殲於此。侍從往説信長曰。今乘大勝之威。長驅迫北。則甲斐信濃可一舉取也。羽柴秀吉從在軍中。亦勸之。信長弗聽而去。侍從見信昌賞其堅守。加賜采邑。許以女妻之。遂大賞將士。

● 敵に近づきて取ふ ● 戦中に調れたる大将 ● 長追

數日親往。岐阜に往きて謝す。信長も亦謝して曰く、卿の君臣、寡を以て衆を撃ち、吾爲に東面を扞ぐこと數年なり。不らずんば則ち吾れ安んぞ京畿を定むるを得んや。今勝頼、一敗に氣を覆れ、復た頭を出す能はず。卿宜しく駿河を取り、遂に甲斐・信濃に及ぶべし。吾れ亦當に相助くべしと。因りて區從の將士を見て曰く、長髯の將何ぞ來らざると。蓋し忠世を謂ふなり。忠佐區從に在り。對へて曰く、家兄、故有りて、拜趨を得ずと。信長曰く、吾子の兄弟、長篠の戰に、絶類逸羣と謂ふべしと。手づから衣服を賜ひ、又忠次の功を賞して、薙刀を賜ふ。侍従辭して歸る。

數日にして親ら岐阜に往きて謝す。信長も亦謝して曰く、卿の君臣、寡を以て衆を撃ち、吾爲に東面を扞ぐこと數年なり。不らずんば則ち吾れ安んぞ京畿を定むるを得んや。今勝頼、一敗に氣を覆れ、復た頭を出す能はず。卿宜しく駿河を取り、遂に甲斐・信濃に及ぶべし。吾れ亦當に相助くべしと。因りて區從の將士を見て曰く、長髯の將何ぞ來らざると。蓋し忠世を謂ふなり。忠佐區從に在り。對へて曰く、家兄、故有りて、拜趨を得ずと。信長曰く、吾子の兄弟、長篠の戰に、絶類逸羣と謂ふべしと。手づから衣服を賜ひ、又忠次の功を賞して、薙刀を賜ふ。侍従辭して歸る。

焉。因見二扈從將士曰。長髯將何不來。蓋謂二忠世也。忠佐在二扈從。對曰。家兄有故。不_レ得_二拜趨_一。信長曰。吾子兄弟。長髯之職。可_レ謂_二絕類逸羣_一矣。手賜_二衣服_一。又賞_二忠次功_一。賜_二羅刀_一。侍從辭歸。

● 一度の敗に銳氣を挫かれ ● とも ● 長髯の大将 ● 拜謁 ● 類を絶ち羣を抜く

六月。侍從攻二股。使_二忠世守_一。使_二原碧以當_一之。轉至_二掛川_一。攻_二光明城_一。使_二諸將逼_一其前。而自潛_レ兵襲_二其後_一。下_レ之。七月。與_二世子信康_一攻_二諏訪原_一。至_二八月_一。下_レ之。城在_二田中高天神之間_一。難_二其守_一。松平忠次請_レ守。乃

六月、侍從、二股を攻め、忠世をして、懸原の砦を守りて以て之に當らしめ、轉じて掛川に至り、光明城を攻め、諸將をして其前に逼らしめ、而して自ら兵を潛め、其後を襲ひて、之を下す。七月、世子信康と諏訪原を攻め、八月に至りて之を下す。城は田中・高天神の間に在り。其守を難んず。松平忠次、守らんと請ふ。乃ち偏諱を賜ひ、名を康親と改め、周防守と稱せしめ、城を名づけて牧野と曰ふ。武田氏を以て殷紂に比するなり。是より勝頼、數々出づるも遂に深く入る能はず。侍從、遂に小山を攻む。酒井忠次曰く、我れ己に二城を得、師暴し兵疲る。戦めざるべからず。勝頼、慍は父に過ぐ。我れ小山を攻めば、必ず來りて之を援はん。前に堅城あり。後に強敵あり。敗を取るの道なりと。康親往くを勸む。遂に往

賜_二偏諱_一。改_二名康親_一。稱_二周防守_一。以_二武田氏_一比_二殷紂_一也。自_レ是勝頼數出。遂不能_レ深入。

く。九月、勝頼兵二萬を募り、大井河の上_二に陣す_一。侍從曰く、果して忠次の言の如しと。乃ち河に循ひて師を班す。城兵出でて躡す。世子信康殿して退く。勝頼敢て逼らず。是より世子常に軍に従ふ。

● 遊江國に在り ● 同上 ● 名の一字 ● 支那古代の夢唐の王、殷の紂王のこと

侍從遂攻_二小山_一。酒井忠次曰。我已得_二二城_一。師暴兵疲。不可_レ不_レ戰。勝頼慍_レ過_レ父。我攻_二小山_一。必來_レ授_レ之。前有_二堅城_一。後有_二強敵_一。取_レ敗之道也。康親勸_レ往。遂往。九月。勝頼募_二兵二萬_一。陣_二大井河上_一。侍從曰。果如_二忠次言_一。乃循_レ河班_レ師。城兵出_レ躡_レ。世子信康殿_レ而退。勝頼不_二敢逼_一。自_レ是世子常從_レ軍。

十月。使_二大久保忠世_一。神原康政攻_二二股_一。陰_レ月下_レ之。遂取_二伯耆塚_一。八荒山。信長復_レ下_レ岩村。佐久間信盛與_二水

十月、大久保忠世・神原康政をして、二股を攻めしむ。月を踏えて之を下し、遂に伯耆塚八荒山を取る。信長復た岩村を下す。佐久間信盛、水野信元と郤あり、信元、岩村に通ずと請して、之を殺さんと欲す。信元懼れて來り奔る。侍從、固く之を宥さんと請ふ。信長聽かず。遂に死を賜ひ、信盛をして其邑を取らしめ、盡く信元の族人を逐ふ。獨り其季子、留りて參河に匿る。

野信元有部。滑信元通二岩村。欲殺之。信元懼來奔。侍從固請存之。信長弗聽。遂賜死。使信盛取其邑。盡逐信元族人。獨其季子留置參河。

四年春。侍從築城。橫須賀。使大須賀康高守焉。以久世廣宣坂部廣勝。渥美勝吉。以之屬。勝頼糧を高天神に納る。侍從、自ら出でて芝原に相拒ぎ、戦はんと欲す。内藤信成、諫めて止む。乃ち交綏す。上杉謙信、兵を上野に出し、遙かに應援を爲す。勝頼敢て南に出でず。侍從乃ち今川氏眞を駿河に納る。松平康親・松平家忠をして、竝に其政を視しむ。八月、自ら將として樽井砦を抜き、安倍光眞をして之を守らしむ。

四年春。侍從築城。横須賀。使大須賀康高守焉。以久世廣宣坂部廣勝。渥美勝吉。以之屬。勝頼糧を高天神に納る。侍從、自ら出でて芝原に相拒ぎ、戦はんと欲す。内藤信成、諫めて止む。乃ち交綏す。上杉謙信、兵を上野に出し、遙かに應援を爲す。勝頼敢て南に出でず。侍從乃ち今川氏眞を駿河に納る。松平康親・松平家忠をして、竝に其政を視しむ。八月、自ら將として樽井砦を抜き、安倍光眞をして之を守らしむ。

● 共に遠江國に在り ● 美濃國に在り ● モシリうつたふ ● 末子

● 兩陣ひとしく返く ● 遠方に在りて意志を通じて援く ● 駿河の國政を執らしむ

五年八月。侍從入山梨。擊甲斐將穴山信良。破之。甲斐兵又攻井。光眞擊卻之。十月。侍從修築濱松城。十二月。侍從進從四位下。遷右近衛少將。

五年八月、侍從、山梨に入りて甲斐の將、穴山信良を撃ちて、之を破る。甲斐の兵、又樽井を攻む。光眞、撃ちて之を卻く。十月、侍從、濱松城を修築す。十二月、侍從、從四位下に進み、右近衛少將に遷る。

● 家康 ● 遠江國に在り ● 修築をなす

六年三月。少將徇駿河。攻田中。井伊直政從軍。每戰先衆。與諸將破其外郭。而還。八月。大須賀康高破甲斐兵于國安河。少將侵掠

六年三月、少將駿河を徇へ、田中を攻む。井伊直政、軍に従ひ、戰ふ毎に衆に先んず。諸將と其外郭を破りて還る。八月、大須賀康高、甲斐の兵を國安河に破る。少將、駿河を侵掠し、持舟に至りて還り、田中を過ぐ。其兵の出で尾せんことを恐れ、城を攻むるの狀を爲す。敵兵、敢て出でず。我が兵乃ち還る。十一月、勝頼、小山に陣し、少將、馬伏に陣す。總社に徙る。世子、夜、潛かに水を濟り、敵營を覗ひて歸り、之を撃たんと欲す。少將曰く、險に據るの敵は、

駿河。至持舟。面還。過田中。恐其兵出尾。爲攻城狀。敵不敢出。我兵乃還。十一月。勝頼陣小山。少將陣馬伏。從于總社。世子夜潛濟水。視敵營。欲擊之。少將曰。據險之敵。不可輕擊。復交綏。

輕しく撃つ可からずと。復た交綏す。

● 每戦常に先して進む ● もとよりわ ● 駿河國に在り ● 敵の陣營 ● 後より退來ることを氣遣ひ ● 駿河國に

七年。正月。勝頼又入遠江。閉少將出乃去。四月。三子長丸生。于濱松。母西郷氏。以故水野信元孤子。土井利勝爲其侍臣。利勝從其母。依土井氏。遂冒之也。

七年正月、勝頼、又遠江に入る。少將の出づるを聞きて、乃ち去る。四月、三子長丸、濱松に生る。母は西郷氏なり。故水野信元の孤子土井利勝を以て其侍臣と爲す。利勝、其母に従ひて土井氏に依り、遂に之を冒す。

● みなしご ● 土井の姓を名乗る

初世子信康

初め世子信康、人と爲り剛厲、近臣を手刃するに至る。酒井忠次・大久保忠世

爲人剛厲。至三手刃近臣。酒井忠次大久保忠世數諫。不聽。所生關口氏。以妬悍被廢。居岡崎。其婦織田氏。亦妬而無男。又爲姑氏所離。問憤怨。是歲。七月。織田氏遂作書。以二姑氏陰事告二信長。因疏二世子十二罪。會忠次赴安土。信長示而問之。對曰。信信長怒。使歸告少將。關口氏與勝頼通。欲除。卿以立世子。遂滅我。也。卿其亟計之。忠次過岡崎。不入。世子憂悸。

數々諫む。聽かず。所生關口氏、妬悍を以て廢せられ、岡崎に居る。其婦織田氏、亦妬にして男無し。又姑氏の離間する所と爲り、憤怨す。是の歲、七月、織田氏遂に書を作りて、姑氏の陰事を以て信長に告げ、因りて世子の十二罪を疏す。會々忠次安土に赴く。信長、示して之を問ふ。對へて曰く、信信なりと。信長怒り、歸りて少將に告げしむ。關口氏、勝頼と通じ、卿を除きて以て世子を立て、遂に我を滅さんと欲す。卿其れ亟かに之を計れと。忠次、岡崎を過ぎて入らず。世子、憂悸す。

● 性質たけくはげし ● 生母 ● ねたみぶかく心たけきこと ● 兩人の間の交情を刺く ● 一本に對とあり ● うれへもそる

八月。少將至

八月、少將、岡崎に至り、世子を大濱に放ち、後命を依たしむ。其明、世子親ら

岡崎。放三世子。于大濱。使俟。後命其明。世子親來哀訴。弗聽。平岩親吉爲傳。謂曰。世子材武。今違殺之。後必悔焉。臣爲傳母狀。願斬臣首。以謝信長。少將泣曰。喪我良臣。而兒終不免。悔更甚矣。數日。遷世子于堀江。遂遷二股。令忠世護焉。誅關口氏。信長意未解。九月。望終。使世子自殺。年二十一。世終。忠世輩不曉。少將意也。

初少將。娠人永見氏。孕而獲罪。出產於

來りて哀訴す。聞かず。平岩親吉、傳たり。請ひて曰く、世子材武あり、今遽に之を殺さば、後必ず悔いん。臣、傳と爲りて母狀なり。願はくは臣の首を斬りて以て信長に謝せよと。少將泣きて曰く、我が良臣を喪ひて、兒、終に免れずんば、悔更に甚だしからんと。數日にして世子を堀江に遷し、遂に二股に遷し、忠世をして護らしめ、關口氏を誅す。信長、意未だ解けず。九月望終に世子をして自殺せしむ。年二十一なり。世のひと、忠世の輩、少將の意を曉らざるを咎む。

後日の沙汰 ① 亂事なり ② 我が良臣を死せしめ世子免れず後悔いよと、甚だしからん ③ 疑ひ暗れず

初め少將の娠人永見氏、孕みて罪を獲、出でて其郷に産す。世子潛かに之を擧げ、菘丸と呼ぶ。三年にして之を見る。少將子とせざるなり。本多重次、抱持し

其郷。世子潛擧之。呼菘丸。三年而見之。少將不子也。本多重次抱持而賀曰。酷育君。君處戰國。宜多子矣。臣

て賀して曰く、酷だ君に肖たり。君、戰國に處る。宜しく子多かるべし。臣請ふ。育てんと。世子卒す。時に菘丸甫めて六歳なり。而して長丸を立てて世子と爲す。

● 娠人の實家にて出產す ● 我子と認定せず ● 抱上げて親依を申上げて ● 主君と乍認なり

先是。上杉謙信卒。義子景虎與從子景勝爭國。景勝略武田勝頼。合攻殺景虎。景虎北條氏政弟也。氏政怒。絶勝頼。遂來修好。於是三國交盟。約曰。武田侵伊

是より先、上杉謙信卒す。義子景虎、從子景勝と國を争ふ。景勝、武田勝頼に略ひ、合せ攻めて景虎を殺す。景虎は、北條氏政の弟なり。氏政怒り、勝頼と絶り、遂に來りて好を修む。是に於て、三國交々盟ひ、約して曰く、武田、伊豆を侵さば、則ち徳川、兵を駿河に出さん。遠江を侵さば、則ち北條、兵を上野に出さん。美濃を侵さば、則ち徳川・北條、竝に甲斐に向ひ、織田をして東顧する毋からしめんと。是の月、勝頼氏政、黄瀬河に相持す。少將之を聞き、自ら將として駿河に入らんとす。酒井忠次、諫めて曰く、險を踏えて深く入るは、其危き

豆。則德川出二兵。駿河。侵二遠江。則北條出二兵。上野。侵二美濃。則德川北條。並向二甲斐。使二織田。毋二東顧。也。是月。勝頼。氏政。相持。于二黃瀬河。少將。聞之。自將入二駿河。酒井忠次。諫曰。論險。深入。其危不測。少將曰。約不可違。且二人相持。而我乘其弊。必有利矣。使三忠次。留陣二瀬戸。而進過二田中城。攻二持舟。拔之。縱火。至二由井。勝頼引兵來迎。氏政不取尾。少將欲逆二擊之。諸將諫曰。勝不可必。而敵城在背。乃還。忠次爲殿。十一月。松平家忠。伏二兵瀧坂。擊二破甲斐兵。

八年。正月。少

こと測られずと。少將曰く、約は違ふ可からず。且つ二人相持す。而して我れ其弊に乗れば、必ず利有らんと。忠次をして、留りて瀬戸に陣せしめて、進みて田中城を過ぎ、持舟を攻めて之を抜き、火を縱ちて由井に至る。勝頼兵を引きて來り迎ふ。氏政敢て尾せず。少將之を逆撃せんと欲す。諸將諫めて曰く、勝は必ず可からず。而して敵城背に在りと。乃ち還る。忠次殿と爲る。十一月、松平家忠、兵を瀧坂に伏せ、甲斐の兵を撃破す。

- 養子 ● 東方の心配なからしめん ● 約束には背くこと能はず ● 駿河河に在り ● 一本に逼るとあり
- 同上

八年正月、少將、從四位上に進む。三月、高天神を攻め、砦を連ねて之に逼る。

將進二從四位上。三月。攻二高天神。連二砦逼之。五月。攻二田中。侵掠而還。持舟兵出蹶之。返戰大破之。七月。復攻二田中。岡田元次曰。天將雨。大井必漲。請速收兵。少將乃濟河而還。其夜果雨。勝頼聞我攻二田中。疾驅而至。河漲不得濟。

五月、田中を攻め、侵掠して還る。持舟の兵出て之を蹶す。返り戦ひて大に之を破る。七月、復た田中を攻む。岡田元次曰く、天將に雨ふらんとす。大井必ず漲らん。請ふ、速かに兵を收めよと。少將乃ち河を濟りて還る。其夜果して雨ふる。勝頼、我の田中を攻むるを聞き、疾驅して至る。河漲りて濟るを得ず。

- はやく先を引上げよ ● とくかきて

九年。二月。高天神兵力屈而逃。我兵邀擊。斬守將岡部與行。初小笠原氏叛。降二甲斐。我監軍

九年二月、高天神の兵、力屈して逃る。我が兵邀撃して、守將岡部與行を斬る。初め小笠原氏叛き、甲斐に降る。我が監軍大河内政局従はず。武田氏利を以て、誘降せんとす。政局、唾罵して顧みず。石窟に幽せらるゝこと八年、此に至りて出づるを得。瘞して起つ能はず。少將之を賞賜す。

- いくさ目附 ● つばしてのがる ● いはやの中に押込めらるること ● 足をましばれて

大河内政局不從。武田氏以利誘降。政局唾罵不顧。幽于石窟。八年。至此得_レ出。痿不能_レ起。少將賞_レ賜_レ之。

少將遂與_レ織田氏議。大舉攻_レ甲斐。十年。二月。信長遣_レ信忠將_レ前軍入_レ信濃。而自繼_レ之。少將將_レ騎卒三萬五千。入_レ駿河。陣_レ牧野。分_レ兵攻_レ遠目。鞠子。持舟。久能諸城。皆陷_レ之。甲斐將_レ穴山信良。在_レ江尻。少將遣_レ長坂血槍。說_レ降_レ之。信良

少將、遂に織田氏と議し、大舉して甲斐を攻む。十年、二月、信長、信忠を遣し、前軍に將として信濃に入らしめて、自ら之に繼ぐ。少將騎卒三萬五千に將として、駿河に入り、牧野に陣し、兵を分ちて遠目・鞠子・持舟・久能の諸城を攻め、皆之を陷る。甲斐の將穴山信良江尻に在り。少將、長坂血槍を遣して説きて之を降す。信良、潛かに來謁し、走りて其邑に還る。乃ち進みて江尻に陣し、人を遣して田中の守將依田信蕃を降す。肯せず。乃ち信良をして書を以て之を諭さしむ。三月、信蕃、城を致して去る。府中の守將武田信龍、守を棄てて逃る。少將、信良を以て郷導と爲し、市川より甲斐の古府に入る。過ぐる所、毫毛を犯さず。沿道風を望みて歸降す。

● 翌日鞠子共に駿河川に在り ● 聞き入れず ● 城を棄出して去る ● オこしも人民の物を探奪せず ● 通行のみちばたの人に其威風凛々を見て従ひ降る

潛來謁。走還_レ其邑。乃進陣_レ江尻。遣_レ人降_レ田中守將依田信蕃。不肯。乃使_レ信良以_レ書諭_レ之。三月。信蕃致_レ城而去。府中守將武田信龍棄_レ守逃。少將以_レ信良爲_レ郷導。自_レ市川入_レ甲斐古府。所過毫毛不_レ犯。沿道望_レ風歸降。

是の時に當りて、信忠已に信濃の諸城を下し、進みて甲斐の古府に入る。北條氏政兵三萬を以て境上に臨む。勝頼逃る。之く所なし。乃ち殘兵を以て天目山に棲む。織田氏の兵逼りて之を殺し、首を信長に獻す。信長、罵りて曰く、豎子、乃公をして枕を高くするを得ざらしむること數年なり。今果して何の狀ぞやと。傳へて我が營に至る。少將、胡床を下り、禮を加へて曰く、公、五州の主將を以てして、遂に此に至る。豈に天に非ずやと。甲斐・信濃の士民之を聞きて、皆竊かに心を徳川氏に歸す。

● 岡地に入る ● 小僧指者をして安心に眠ること能はずらしめしこと五六年の間をりなき ● 牀几

乃公不_レ得_レ高枕數年矣。今果何狀也。傳至_レ我營。少將下_レ胡床。加_レ禮曰。公以_レ五州主將。而遂至_レ於_レ此。豈非_レ天哉。甲斐信濃士民聞_レ之。皆竊歸_レ心於_レ徳川氏。

信長初誘武田氏諸將使叛。及勝頼死。皆誅之。下令逮捕期無遺。少將竊庇之。多得免者。依田信蕃久守田中。以抗我兵。少將最嘉之。收隸部下。於是少將會信長于諏訪。賀戰捷。信長曰。長篠之戰。奪其爪牙。今日固易爲力。皆卿之力也。遂分武田氏地。使少將

信長、初め武田氏の諸將を誘ひて叛かしめ、勝頼の死するに及びて皆之を誅す。令を下して逮捕し、遺類なからんと期す。少將、潛かに之を庇ひ、免るゝを得る者多し。依田信蕃、久しく田中を守りて、以て我が兵に抗す。少將、最も之を嘉し、收めて部下に隸す。是に於て、少將、信長に諏訪に會し、戰捷を賀す。信長曰く、長篠の戰に、其爪牙を奪ふ。今日固より力を爲し易し。皆卿の力なりと。遂に武田氏の地を分ち、少將をして駿河を取らしむ。少將曰く、今川氏眞、僕の所に寓居す。願はくは其半を割きて之に予へんと。信長許さずして曰く、子、兵力を以て駿河を取る。何ぞ之を一寓公に分たんと。遂に甲斐の一都を割きて、穴山信良に賜ひ、我をして之を統屬せしむ。瀧川一益を上野に置き、關東を經略せしめ、河尻鎮吉を甲斐に、森長可等を信濃に置き、皆我が節度を受けしむ。四月、信長惠林寺を焚き、其僧徒を盡にし、遂に海道より西歸す。少將、供給甚だ豊かなり。

● のこりのやから ● 敵の防固を奪ひ取る ● 軍威をふるふに容易なり ● 假住居す ● 一人のかゝり人 ● 我が指揮を受けしむ ● 賄料十分なり

取駿河。少將曰。今川氏眞寓所。願割其中予之。信長不許。曰。子以兵力取駿河。何分之一寓公乎。遂割甲斐一郡。賜穴山信良。使我統屬之。置瀧川一益于上野。經略關東。置河尻鎮吉于甲斐。森長可等于信濃。皆使受我節度。四月。信長焚惠林寺。盡其僧徒。遂自海道西歸。少將供給甚豊。

五月。少將西往安土。穴山信良從焉。信長命吏除道。使明智光秀掌鑿。鑿于高雲寺。親饋之。使信良及酒井大久保。石川井伊本多。榊原六將侍食。召優人爲

五月、少將、西安土に往く。穴山信良從ふ。信長、吏に命じて道を除し、明智光秀をして鑿を掌らしめ、高雲寺に鑿し、親ら之に饋る、信良及び酒井・大久保・石川・井伊・本多・榊原の六將をして侍食せしめ、優人を召して樂を爲さしむ。因りて少將に謂ひて曰く、卿、盍ぞ、京畿を遊觀せざる。吾も亦、當に踵ぎて往くべしと。少將、信良と小隊を以て發す。信長、長谷川秀一、京商茶屋晴延をして之に従はしむ。京師を經て、大坂に至る。織田信孝將に南海を略せんとし、大坂に屯す。迎へて鑿す。少將、遂に界府に往き、晴延を遣し京師に入りて、以

樂。因謂少將曰。卿盍遊觀京畿。吾亦當隨往。少將與信良以小隊發。信長使一京商茶屋晴延從之。經京師。至大坂。織田信孝將略南海。屯于大坂。迎襲焉。少將遂往界府。遣晴延入京師。以候信長。六月二日。將還入京師。本多忠勝先發。至牧方。逢一騎來。近則晴延也。回指謂忠勝曰。公不見夫烟乎。明智光秀作亂。右府已被弑矣。忠勝大驚。回馬返報。

て信長に候せしむ。六月二日、將に還りて京師に入らんとす。本多忠勝先づ發し。牧方に至り、一騎の來るに逢ふ。近づけば則ち晴延なり。回指して忠勝に謂ひて曰く、公、夫の烟を見ざるか。明智光秀亂を作し、右府已に弑せらる。忠勝大に驚き、馬を回して返り報す。

● 捕殺し ● 襲の敵軍物をかくる ● 吾樂回 ● 遊び見物せざる ● 河内國に在り ● よりかへりて指して ● 信長

少將已至飯盛山。望見二人。察其有異。留從隊。獨與五將挺前。二

少將已に飯盛山に至り、二人を望見し、其の異なるを察し、從隊を留めて、獨り五將と挺前す。二人、變を告ぐ。少將、晴延を前めて悉しく之を問ふ。秀一も亦來る。十騎、馬首を聚む。計、出づる所なし。少將曰く、吾れ義として當に立ちど

人告變。少將前晴延悉問之。秀一亦來。十騎聚馬首。計無所出。少將曰。吾義當立討光秀。而從從兵至寡。今獨有入京自殺而已。乃引隊北上。使忠勝前行。數甲。忠勝回響。謂五將曰。僕欲敢獻異議。今光秀方得志。擁大軍據要地。吾浪戰貽禽。徒取笑天下。曷如歸國。舉兵徐圖誅討哉。願公等勸之。主公。酒井忠次。石川數正曰。老成之慮。乃出於少壯之人。吾輩慚愧。乃勸之。少將且曰。光秀已扼衢路。宜取間道。

ころに光秀を討つべし。而して從兵至りて寡し。今は獨京に入り自殺する有るのみと。乃ち隊を引ききて北上し、忠勝をして前行せしむ。數里にして、忠勝、轡を回し、五將に謂ひて曰く、僕敢て異議を獻せんと欲す。今、光秀方に志を得、大軍を擁して要地に據る。吾れ浪戰して禽を貽し、徒に笑を天下に取るは、曷ぞ國に歸り兵を擧げて、徐に誅討を圖るに如かんや。願はくは、公等、之を主公に勸めよと。酒井忠次・石川數正曰く、老成の慮、乃ち少壯の人に出づ。吾が輩慚愧すと。乃ち之を少將に勸め、且つ曰く、光秀已に衢路を扼す。宜しく間道を取るべしと。

● 河内國に在り ● 異變ありしを察し知り ● 拔出て、進む ● 馬を引返し ● シヤマに取ひて ● 物馳れたる者の考へ

少將曰。我不
 謂地利。必爲
 土寇所困。終
 不若自殺。秀
 一曰。此間士
 民素慣。臣使
 令。臣能使之
 導。晴延亦散
 金募之。大和
 人越智玄蕃。
 某爲其臣。吉川
 寇乘夜起。侵
 我輜重。高力
 清長數返戰。
 攘之。穴山信
 良自懷猜疑。
 不欲同行。自
 普賢谷分道
 而去。至草內

少將曰く、我れ地利を諳んぜず。必ず土寇の困しむる所と爲らん。終に自殺するに若かずと、秀一曰く、此間の士民素より臣の使令に慣る。臣能く之を導かしめんと。晴延も亦、金を散じて之を募る。大和の人越智玄蕃、其臣吉川某をして郷導を爲さしむ、土寇、夜に乗じて起り、我が輜重を侵す。高力清長、數々返り戦ひて、之を攘ふ。穴山信長、自ら猜疑を懷き、同行を欲せず。普賢谷より、道に分ちて去り、草内渡に至り、村民の殺す所と爲る。明日、少將、木津に至る。渡るべからず。一舟有りて來る。呼びて乗らんと欲す。舟人肯せず。忠次銃を擬して之を脅す。舟人怖れ、載して之を載す。既に濟り、忠勝、槍鐵を以て其舟を撞き破りて、以て追者を防ぐ。織田氏の將山岡景隆衆を帥りて來り迎ふ。已にして、光秀少將の逃れ去るを覺り、兵を諸路に出して之を要す。

● 地利に暗し ● 指圖に於る ● 洲野内をみましむ ● 兵糧及び軍用品を運送する車 ● 追拂ふ ● 山城國に在り ● 同上 ● 鐵砲を向けてしどす ● 舟よもほひ ● 鐵の石突 ● 途に待受く

渡。爲村民所殺。明日。少將至木津。不可渡。有二舟來。呼而欲乘。舟人不肯。忠次擬銃脅之。舟人怖。載而載之。既濟。忠勝以槍鐵撞破其舟。以防追者。織田氏將山岡景隆帥衆來迎。已而光秀覺少將逃去。出兵諸路要之。

本多正信聞
 少將當厄。馳
 至宇治河。與
 景隆議。論茶
 商上林。發土
 人。護入信樂。
 館于尾尾氏。
 使土人馳還
 設篝火河上。
 宜言德川公
 將來於此。光
 秀斥兵聞之。
 萃以俟焉。而
 少將已入伊
 賀矣。初信長
 暨伊賀入。獨
 匿我管内者

本多正信、少將の厄に當るを聞き、馳せて宇治河に至り、景隆と議して、茶商上林に諭し、土人を發して、護りて信樂に入り、尾尾氏に館す。土人をして馳せ還りて篝火を河上に設けしめ、宣言せしむらく、德川公、將に此に來らんとすと。光秀の斥兵之を聞き、萃りて俟つ。而して少將は已に伊賀に入る。初め信長、伊賀の人を、壘にす。獨り我が管内に匿るゝ者は免るゝを得たり。是に於て、其父兄相告げて來り護り、伊勢に入り、白子浦より舟に上り、七日にして參河の大濱に達し、永井直勝の家に入る。將士迎へ賀す。即日、少將、兵を管内に徴して、光秀を討つ。美濃・尾張の將士、使をして款を送らしむ。或ひと急に一國を取ること勸む。少將曰く、右府の故國なり。吾れ亂に乗じて之を利す可けんやと。十七日、進みて熱田に陣す。羽柴秀吉、山陽の兵を以て入討し、光秀已に誅

得免。於是其父兄相告來護。入伊勢。自白子浦上舟。

七日達於參河大濱。人永井直勝家將士迎賀。即日少將徵兵管内。討光秀。美濃尾張將士。使使遂款。或勸急取一國。少將曰。石府故國也。吾可乘亂利之乎。十七日進陣于熱田。聞下羽柴秀吉以山陽兵入討。光秀已伏誅也。乃班師。論賞畿道扞衛之功。

● 近江國に在り ● 斥候兵 ● 借攻 ● よらさと ● 防ぎ守る

當是時。四方聞變。騷擾。河尻鎮吉初藉信長威權。凌二國。國人每事行新法。國人驚然。及信長薨。鎮吉恇怯。欲走。不敢。少將至。參河之日。遣本多百助護鎮吉。曰。

是の時に當りて、四方變を聞きて騷擾す。河尻鎮吉、初め信長の威權を藉り、國人を凌轢し、事毎に新法を行ふ。國人驚然たり。信長の薨するに及びて、鎮吉恇怯して走らんと欲す。敢てせず。少將、參河に至るの日、本多百助を遣して鎮吉を護らしめて曰く、子、西に歸らんと欲せば、宜しく道を我に借るべしと。國人流言して曰く、本多河尻を圖ると。鎮吉乃ち百助を饗し、醉はせて之を殺す。國人之に乗じて、攻めて鎮吉を殺す。森長可等、皆守を棄てて西に走る。是に於て、甲斐・信濃は空虚にして主無し。上杉景勝・北條氏政、並に兵を出して

之を爭ふ。

● 騷ぎ亂る ● しのぎあかす ● がやくし騷ぎ立つ ● おそれて逃走せんと欲す

子欲四歸。宜借道於我。國人流言曰。本多圖河尻。鎮吉乃饗百助。醉而殺之。國人乘之。攻殺鎮吉。森長可等。皆棄守西走。於是甲斐信濃空虚。無主。上杉景勝北條氏政並出兵爭之。

少將鎮吉の死を聞き、酒井忠次・大須賀康高・成瀬正一を遣して甲斐に入り、武田氏の降將依田信蕃・岡部正綱を以て介と爲し、旗を柏坂嶺に立てて以て、國人を招來す。武田氏骨鯁の臣横田尹松・城昌茂等、相踵ぎて來歸す。凡そ千餘人あり。少將皆之に印信を予へ、安堵故の如し。大村某といふ者、氏政の兵を導きて甲斐に入らんと欲す。穴山氏の部兵、撃ちて之を平ぐ。又大久保忠世・石川康通・本多廣孝を遣し、兵に將として繼ぎて往き、諏訪頼忠・小笠原信嶺を招き、皆之を降す。七月、少將兵を留めて駿河の諸城を守らしめ、親ら將として甲斐に入る。甲斐の父老、争ひて芻糧を供す。進みて古府に陣し、降附を撫循し、諸要を分守

少將聞鎮吉死。遣酒井忠次大須賀康高成瀬正一入甲斐。以武田氏降將依田信蕃岡部正綱爲介。暨旗於柏坂嶺。以招來國人。武田氏骨鯁之臣横田尹松城昌茂等

少將鎮吉の死を聞き、酒井忠次・大須賀康高・成瀬正一を遣して甲斐に入り、武田氏の降將依田信蕃・岡部正綱を以て介と爲し、旗を柏坂嶺に立てて以て、國人を招來す。武田氏骨鯁の臣横田尹松・城昌茂等、相踵ぎて來歸す。凡そ千餘人あり。少將皆之に印信を予へ、安堵故の如し。大村某といふ者、氏政の兵を導きて甲斐に入らんと欲す。穴山氏の部兵、撃ちて之を平ぐ。又大久保忠世・石川康通・本多廣孝を遣し、兵に將として繼ぎて往き、諏訪頼忠・小笠原信嶺を招き、皆之を降す。七月、少將兵を留めて駿河の諸城を守らしめ、親ら將として甲斐に入る。甲斐の父老、争ひて芻糧を供す。進みて古府に陣し、降附を撫循し、諸要を分守

相踵來歸。凡千餘人。少將皆予之印信。安堵如故。大村某者。欲募氏將兵繼往。招諏斐父老。爭供二穀糧。進陣于古府。撫二附。分守諸要。遣忠次忠世以下。以兵三千徇信濃。圍高島城。

す。忠次・忠世以下を遣し、兵三千を以て信濃を徇へ、高島城を圍む。

● 中介者とし ● 剛直の臣 ● 印 ● 縁と糧食 ● 降参の者をてなづけ安んじ

八月、氏政遣子氏直。將四萬騎。入佐久郡。諸將聞之。退也。音骨。遂引還。初諏訪頼忠不厭二忠次。少將更遣二忠世。乃服。二人頗有郤。於

八月、氏政、子氏直を遣し、四萬騎に將として、佐久郡に入る。諸將之を聞きて、退きて音骨に屯し、遂に引きて還る。初め諏訪頼忠、忠次に服せず。少將、更に忠世を遣す。乃ち服す。二人頗る郤有り。是に於て、殿を争ひて決せず。衆之を和解し、六將更々殿して退く。氏直之に尾す。行くこと七里、十餘合せしも、我が兵、一人を損せず。氏直止りて若巫に陣す。少將乃ち伏を措き、自ら數百騎に將として、淺生原に出づ。氏直敢て進まず。少將、烏居元忠・水野勝成・松

是争殿不決。衆和解之。六將更殿而退。氏直尾之。行七里。十餘合。我兵不損一人。氏直止陣。若巫少將乃措伏。自將數百騎。出淺生原。氏直不取。進少將使鳥居元忠水野勝成。平清宗三宅康貞守古府。而自陣新府。氏政遣弟氏忠族氏勝。將數千騎。入郡内。氏直潛遣使告焉。曰。古府兵寡。子攻取之。則新府隨潰。家康當自下山遁。乃夾擊殲之。古府四將。謀知其謀。以二千入邀擊之。氏忠氏勝大敗遁去。

平清宗・三宅康貞をして、古府を守らしめて、自ら新府に陣す。氏政、弟氏忠、族氏勝を遣し、數千騎に將として、郡内に入らしむ。氏直潛かに使を遣して告げて曰く、古府兵寡し。子、之を攻取せば、則ち新府、隨ひて潰え、家康、當に下山より遁るべし。乃ち夾撃して之を殲さんと。古府の四將、其謀を諜知し、二千人を以て之を邀撃す。氏忠・氏勝大に敗れて遁れ去る。

● 信濃國に在り ● 同上 ● 甲斐國に在り ● 同上 ● 間諜を入れて之を知り

少將望塵曰。我兵勝矣。已而四將以首級三百還獻。命梟之新府。

少將、塵を望みて曰く、我が兵勝てりと。已にして四將、首級三百を以て還り獻す。命じて之を新府の郊外に梟す。氏直の兵之を視るに、皆其子弟親戚なり。乃ち悲駭して關ふを欲せず。少將四將を賞し、元忠に賜ふに郡内を以てす。氏直、

郊外。氏直兵視之。皆其子弟親戚也。乃悲駭不。欲。少將賞。四將。賜。元忠。以。郡。内。氏直。碧。子。豆。生。田。參。河。

豆生田に碧す。參河の人久世廣宣、甲斐の人曲淵吉景皆功有り。氏政、又弟氏規を遣して駿河を窺ふ。松平康親は三枚橋を守り、本多重次は沼津を守り、氏規を撃ちて之を破る。氏直、數々甲斐の人を招く。甲斐の人、使者を斬りて其書を獻す。信濃の人眞田昌幸・保科正直、初め北條氏に降る。

● 關の立たるを見 ● 悲みちどき ● 甲斐國に在り

人久世廣宣。甲斐人曲淵吉景。皆有功焉。氏政又遣弟氏規。窺駿河。松平康親守三枚橋。本多重次守沼津。擊氏規破之。氏直數招甲斐人。甲斐人斬使者。獻其書。信濃人眞田昌幸。保科正直。初降北條氏。

九月、少將、依田信蕃をして昌幸を招降せしめ、兵を合して碓氷嶺に屯し、關東の糧道を絶つ。正直、酒井忠次に因りて來降す。高遠の兵を以て箕輪を取り、諸城を招きて以て我に屬せしむ。氏直益々窘しむ。十月、氏政乃ち氏規をして來りて和を請はしめて曰く、公は甲斐・信濃を取れ。我は上野を取らんと。且つ氏直の

九月。少將使依田信蕃招降昌幸。合兵屯碓氷嶺。絶關東糧道。正直因酒井忠

九月、少將、依田信蕃をして昌幸を招降せしめ、兵を合して碓氷嶺に屯し、關東の糧道を絶つ。正直、酒井忠次に因りて來降す。高遠の兵を以て箕輪を取り、諸城を招きて以て我に屬せしむ。氏直益々窘しむ。十月、氏政乃ち氏規をして來りて和を請はしめて曰く、公は甲斐・信濃を取れ。我は上野を取らんと。且つ氏直の

次來降。以高遠兵取箕輪。招諸城以屬。我氏直益窘。十月。氏政乃使氏規來請。和曰。公取甲斐。信濃。我取上野。且請爲氏直娶少將女。少將許之。十一月。氏直撤兵。而修平澤砦。少將使人謂之曰。我初欲取上野。遇和而止。今既和而築。是爲和也。使諸將發兵赴之。北條氏兵懼。毀砦而去。

爲に少將の女を娶らんと請ふ。少將、之を許す。十一月、氏直、兵を撤して平澤の砦を修む。少將、人をして之を請めしめて曰く、我れ初め上野を取らんと欲す。和に遇ひて止む。今既に和して築く。是れ爲和なりと。諸將をして兵を發して之に赴かしむ。北條氏の兵懼れ、砦を毀ちて去る。

● 兵糧運搬之道 ● 偏りの和議なり

是時。上杉景勝既取河中島。築砦四外。少將遣依田信蕃。柴田康忠。菅沼大膳。

是の時、上杉景勝既に河中島を取り、砦を四外に築く。少將、依田信蕃・柴田康忠・菅沼大膳等を遣し、前山・高棚・小田井の諸砦を攻めて、之を抜く。是に於て、甲斐・信濃の豪傑、盡く我が部下に屬す。少將、其采邑を檢し、或は舊に依り、或は之を削り、平岩親吉をして甲斐を鎮し、大久保忠世をして信濃を鎮せしむ。務

等。攻前山高
棚小田井諸
岩。拔之。於是
甲斐信濃豪
傑盡屬我部
下。少將檢其
采邑。或依舊
或削之。使平
岩親吉鎮甲
斐。大久保忠
世鎮信濃。務
因武田氏舊
制。無所更變。
獨除其厚敵
苛刑。建寺于
田野。以弔勝
組。嘉小宮
山内膳忠節。召其弟又七。祿之。以其季弟爲僧者。爲田野寺主。收山縣土屋原一條四族之兵。屬於井伊直政。軍裝皆用赤色。井伊氏兵自是勁矣。

めて武田氏の舊制に因り、更變する所なし。獨り其厚敵苛刑を除く。寺を田野に建てて以て勝頼を弔す。小宮山内膳の忠節を嘉し、其弟又七を召して、之に祿し、其季弟の僧と爲れる者を以て田野の寺主と爲し、山縣・土屋・原・一條の四族の兵を收めて、井伊直政に屬せしむ。軍裝皆赤色を用ふ。井伊氏の兵、是より勁し。

● 河中島の四方 ● 領地をしらべ ● もとの規則 ● 重税を取立つることと苛酷なる刑罰と ● 軍兵のいざたち

十二月。少將乃還濱松。以降附四人。以探訪北條氏。使納幣。織

十二月、少將乃ち濱松に還る。降附四人を以て探訪を掌らしむ。北條氏、使をして幣を納れしむ。織田氏の故將柴田勝家も亦使をして平定を賀せしむ。十一年閏正月、松平康親の功を賞し、河東二郡を賜ふ。二月、依田信蕃、攻めて岩

田氏故將柴田勝家亦使一年。閏正月。賞松平康親功。賜河東二郡。二月。依田信蕃攻拔岩尾。而死之。少將祿其子。賜姓名松平康

尾を抜きて、之に死す。少將、其子に祿し、姓名を松平康親と賜ふ。康親の例に依るなり。乃ち大久保忠世に命じて康國を助けしめ、攻めて小室を抜き、守將宇佐美定行を走らす。景勝敢て援はず。七月、北條氏、女を迎ふ。酒井忠次、之を護送す。八月、少將甲斐に如き、法令を修む。眞田昌幸に賜ふに上田を以てす。昌幸上野を攻め、沼田を取る。十月、少將正四位下に進み、右近衛中將に遷る。

● 各地の動靜を探り調ぶること ● 前例 ● 附添ひ給成して送る

國。依康親例也。乃命大久保忠世助康國。攻拔小室。走守將宇佐美定行。景勝不敢援。七月。北條氏迎女。酒井忠次護送之。八月。少將如甲斐。修法令。賜眞田昌幸以上田。幸昌攻上野。取沼田。十月。少將進正四位下。遷右近衛中將。

卷二十

德川氏正記

德川氏三

天正十二年。正月朔。參河遠江駿河甲斐信濃五國將士。盡賀正。于深松。謁中將及世子長九。二月。中將遷參議。進從三位。當是時。故織田信長將羽柴秀吉。爲三以於京畿。

天正十二年正月朔、參河・遠江・駿河・甲斐・信濃五國の將士、盡く正を濱松に賀し、中將及び世子長丸に謁す。二月、中將參議に遷り、從三位に進む。是の時に當りて、故織田信長の將羽柴秀吉、政を京畿に爲し、十餘國を略行し、威權獨り熾なり。參議も亦之と好を通ず。信長の二孤、信雄・信孝、勢皆秀吉の下に及ぶ。信孝兵を擧げて之を圍り、克たずして死す。其黨柴田勝家等、皆攻滅する所と爲る。諸宿將豪傑、皆首を俯して秀吉に事ふ。信雄孤立して援なし。秀吉、復た激して之を除かんと欲し、故に之を遇すること亡狀なり。其驍將岡田重善・津川義冬・淺井多宮を誘ひ、叛きて己に降らしむ。信雄怒り、三月、三將

を召して之を誅し、兵を分ちて其邑を攻め、遂に秀吉と絶つ。

● 新年 ● 採取りて所有し ● よるくより大將 ● 腹立して信雄を滅さんと欲し ● 無情なり ● 強き大將

略有十餘國。威惟獨熾。參議亦與之通。好。信長二孤。信雄。信孝。勢皆出。秀吉下。信孝舉兵。圍之。不克而死。其黨柴田勝家等。皆爲所攻滅。諸宿將豪傑。皆俯首事。秀吉。信雄孤立。無援。秀吉復激而除之。故遇之亡狀。誘其驍將岡田重善。津川義冬。淺井多宮。使叛降。己。信雄怒。三月。召三將。誅之。分兵攻其邑。遂與秀吉絶。

池田信輝。二婿森長可。堀秀政。と美濃に在り。信雄、秀吉、竝に之を招く。秀吉、特に昭はすに利を以てす。乃ち秀吉に附く。瀧川一益・稻葉通朝・蒲生氏郷等、皆並招之。秀吉、特昭以。利。乃附。秀吉。瀧川一益。稻葉通朝。蒲生氏郷等。皆黨之。信雄益窘。乃來乞。援。於。德川。

池田信輝、二婿森長可・堀秀政と美濃に在り。信雄、秀吉、竝に之を招く。秀吉、特に昭はすに利を以てす。乃ち秀吉に附く。瀧川一益・稻葉通朝・蒲生氏郷等、皆之に黨す。信雄益々窘しむ。乃ち來りて援を德川氏に乞ふ。參議曰く、吾れ信長の厚誼を荷ふ。其孤の窮蹙を視て援けずんば、將何を以て天下に對せんと。即ち之を諾し、石川數正・水野忠重、其子勝成を遣し、往きて信雄を助け、攻めて星崎を抜かしむ。勝成先登す。秀吉陰かに諸將を誘ふ。忠重、納れずして其書を獻す。忠重は、故信元の子なり。是に於て、四近の城邑、交々相攻撃し、迭に勝

氏。參議曰。吾荷信長厚誼。親其孤之窮。豈而不援焉。將何以對天。下。即諾之。遣石川數正。水野忠重。其子勝成。往助信雄。攻拔星崎。勝成先登。秀吉陰誘諸將。忠重不納。而獻其書。忠重故信元子也。於是四近城邑。交相攻擊。迭有勝敗。參議聞秀吉大舉。且東下也。欲親將投信雄。慮北條上杉。窺其後。使大久保忠世。備北而松平康親。平岩親吉。鳥居元忠。備東而十日。親將發濱松。酒井忠次。奧平信昌等。以前軍先發。敵攻城邑者。聞之。往往解圍去。參議四日而至清洲。見信雄。信雄謝之。參議曰。公安之。某在焉。秀吉之兵。雖有百萬。不能以病公也。

敗あり。參議、秀吉の大舉して且に東下せんとするを聞き、親ら將として信雄を援けんと欲す。北條・上杉、其後を窺ふを虞り、大久保忠世をして北面に備へ、松平康親・平岩親吉・鳥居元忠をして東面に備へしむ。十日、親ら將として濱松を發す。酒井忠次・奥平信昌等、前軍を以て先づ發す。敵の城邑を攻むる者、之を聞きて、往往圍を解きて去る。參議四日にして清洲に至り、信雄を見る。信雄之を謝す。參議曰く、公之を安んぜよ。某在り。秀吉の兵、百萬ありと雖も、以て公を病へしむる能はざるなりと。

● 利益を以て人を誘ふ ● 厚恩を受く ● 信長の孤子のくるしみこまる ● 後方より其の隙をねらふ ● 心配せしむる

乃引諸將。議戰守之策。榭原康政曰。宜下進取。小牧山。以敵國內。莫使敵據之。參議然之。本多康重曰。往年勝頼侮敵。臨川而進。終以取敗。今盍監焉。酒井忠次曰。勝頼之敵。我之敵。秀吉不可比也。參議遂命忠次。修小牧。故

乃ち諸將を引き、戰守の策を議す。榭原康政曰く、宜しく進みて小牧山を取りて以て國內を敵すべし。敵をして之に據らしむる莫れと。參議之を然りとす。本多康重曰く、往年、勝頼、敵を侮り、川を臨みて進み、終に以て敗を取りき。今盍ぞ監みざると。酒井忠次曰く、勝頼の我に敵するは、我の秀吉に敵するに、比すべからずと。參議遂に忠次に命じて小牧の故壘を修めしむ。十六日、自ら信雄を携へて往き、軍を駐む。間使を發して南海に入り、雜賀・根來及び阿波・土佐の諸豪を招き、並び起りて大坂を圍らしむ。秀吉之を患へ、未だ來るを果さず。遙かに池田信輝をして犬山に據り、森長可をして羽黒に陣せしめて以て我が軍を拒ぐ。長可は武藏守と稱し、驍勇を以て著る。鬼武藏の目あり。

● 高所より見下す ● 先年 ● ふるさとよりて ● 及びの使者 ● つよく勇ましき評判高し

● 十六日、自携信雄往駐軍焉。發間使入南海。招雜賀根來及阿波土佐諸豪。使並起圍大坂。秀吉患之。未果來。遙令池田信輝據犬山。森長可陣羽黒。以拒我軍。長可稱武藏守。以驍勇著。有鬼武藏之日。

忠次請曰。嘗試一搏。鬼武藏。使京兵知參河技倆也。乃與諸將進。縱火誘之。長可出軍八幡林。隔水挑戰。奧平信昌單騎先濟。衆從之。擊走長可。斬首三百級。信輝與稻葉通朝聞之。來撓。或止之曰。敵兵乘勝。未可與爭鋒。宜按兵。憑高待其來。而信輝從之。參議謀。令諸將收兵。終留康政於小牧。而自入清洲。使本多廣孝築城。小幡。以便參河往來。

秀吉聞羽黑

忠次請ひて曰く、嘗試に一たび鬼武藏を搏し、京兵をして參河の技倆を知らしめんと。乃ち諸將と進みて、火を縱ちて之を誘ふ。長可、軍を八幡林に出し、水を隔てて戰を挑む。奥平信昌單騎先づ濟る。衆、之に従ひて、擊ちて長可を走らす。斬首三百級なり。信輝と稻葉通朝と、之を聞きて來り援く。或ひて之を止めて曰く、敵兵勝に乗ず。未だ與に鋒を爭ふべからず。宜しく兵を按じ高きに憑り、其來るを待ちて下り突くべしと。信輝之に従ふ。參議其謀を謀知し、諸將に令して兵を收めしめ、終に康政を小牧に留めて、自ら清洲に入り、本多廣孝をして城を小幡に築かしめて、參河の往來を便にす。

● うてまへ ● 兵をまさへ ● 探偵して知る

秀吉、羽黒の敗を聞き、大に忿り、戊を南海に置きて、自ら將として來り、犬山

之敗。大忿。置戌南海。而白將而來。軍于犬山。兵凡十二萬五千人。分爲十五隊。自按視地形。仰視小牧山。曰。吾後矣。乃穿空濠二重。于山前。使數千人守之。起壘植柵。以頓諸軍。軍營彌至數十里。參議謂之。留內藤信成等守清洲。而自攜信雄。合兵一萬八千。復陣

に軍す。兵凡そ十二萬五千人なり。分ちて十五隊と爲し、自ら地形を按視し、仰ぎて小牧山を視て曰く、吾れ後れたりと。乃ち空濠二重を山前に穿ち、數千人をして之を守らしめ、壘を起し柵を植て、以て諸軍を頓す。軍營、數十里に彌互す。參議之を聞きて、内藤信成等を留め清洲を守らしめて、自ら信雄を攜へ、兵一萬八千を合せ、復た小牧山に陣す。康政、信雄の爲に檄を敵軍に移して曰く、秀吉、君恩を蔑棄し、鬼と爲り賊と爲り、兵を君の遺孤に加ふ。天下の人、孰か切齒せざらん。汝將士、嘗て之と肩を比して以て先君に事へたり。乃ち其の驅役する所と爲る。果して何の心ぞや。徳川公依託を受けて征討を圖り、盡く五國の卒を發し、視ら將として此に至る。大義の臨む所、必ず豎子を梟せん。汝將士、苟も過を改めて順に歸せば、皆其の自ら償ふを聽さん。然らずんば則ち併せて之を誅戮し、身首處を異にせん。其れ悔ゆる勿れと。

● 地ををしらべみる ● からぼり ● 暫む ● 進りわたる ● あなどりすつ ● 水中に打ち海島
● 殘念に思ひて齒をくひしばる ● 追ひはふ ● たのみ ● 罪し殺し ● 斬首せらる

小牧山。康政爲信雄移。徵敵軍。曰。秀吉。蔑棄君恩。爲鬼爲賊。加兵於君之遺孤。天下之人。孰不切齒。汝將士。皆與之比。肩以事先君。乃爲其所驅。役果何心哉。德川公受依託。圖征討。而發五國之卒。親將至此。大義所臨。必鼻豎子。汝將子。苟改過歸順。皆聽其自償。不然。則併誅戮之。身首異處。其勿悔。

秀吉覽之。乃勝康政。首千金。參議上樓櫓。望見塹柵。笑謂信雄曰。彼襲尊公長篠之策。豈以我比勝賴乎。乃下令軍中。禁擅進。秀吉遣書參議。謂戰曰。且日吾欲背塹柵。進戰。使西士無志。公亦盡做。

秀吉之を覽て、乃ち康政の首を千金に購ふ。參議樓櫓に上り、塹柵を望見し、笑ひて信雄に謂ひて曰く、彼れ尊公の長篠の策を襲ぐ。豈に我を以て勝賴に比するかと。乃ち令を軍中に下し、擅に進むを禁ず。秀吉、書を參議に遣りて戰を請ひて曰く、且日、吾れ塹柵を背にして進み戦ひ、士をして退志なからしめんと欲す。公も亦盡ぞ我が爲す所に倣はざると。渡部守綱、銃長を以て前部に在り。私かに答書して曰く、來諭に言ふ所、以て寡君に聞するに足らず。寡君固より君と樂しみて戰はんと欲す。敢て約を奉ぜざらんや。斷後の備に至りては、君自ら之を爲せ。弊邦の士は、進むありて退くなし。必ずしも此を須ふるをせざるなりと。秀吉、書を獲て大に悲り、進み戰はんと欲して敢てせず。乃ち邱に上りて

罵る。四月、秀吉の兵益々至り、山野に充滿す。而して我が兵は繼なし。

- 千圓の懸賞にかく
- 信長を指す
- 退かんとする志
- 銃隊の長
- 書面にての申越
- 他國の者に對して我主君を稱する尊稱
- 後方を斷切る備へ
- 山野にみちみつ

我所爲。渡部守綱以銃長。在前部。私答書曰。來諭所言。不足。以聞。寡君。寡君固欲與君樂戰。敢不奉約。至斷後之備。君自爲之。弊邦之士。有進無退。不必須此也。秀吉。獲書大恚。欲進戰。而不敢。乃上邱而罵。四月。秀吉兵益至。充滿山野。而我兵無繼。

四日。池田信輝。說秀吉曰。敵悉銳拒此。料參河必空。虛。我潛軍出。敵背。掘基窟穴。則彼必顧而潰。內夾擊之。可以獲其渠魁矣。秀吉

四日、池田信輝、秀吉に説きて曰く、敵銳を悉して此に拒ぐ。料るに參河必ず空虚ならん。我れ軍を潛めて敵背に出で、其窟穴を搦かば、則ち彼れ必ず顧みて潰えん。因りて之を夾撃して、以て其渠魁を獲べしと。秀吉沈吟して答へず。明日、復た説きて曰く、公速かに之を斷ぜよ。二三日を遅れば、敵も亦備を爲さんと。秀吉乃ち之を許す。信輝は前軍に將とし、森長可は二軍に將とし、堀秀政は三軍に將とし、長谷川秀一は四軍に將とし、秀吉の甥秀次は五軍に將として、兵凡て

沈吟不答。明日復說曰。公速斷之。遲三日。敵亦爲備。秀吉乃許之。信輝將前軍。森長可將二軍。細秀政將三軍。長谷川秀一將四軍。秀吉甥秀次將五軍。兵凡三萬。翌夜潛發。秀吉戒曰。慎勿侮敵。信輝諾而往。至篠木。柏井誘土寇以向參河。織田氏將丹羽氏次爲岩崎城主。時從在小牧。其弟氏重居守。信輝等欲先取岩崎。以及岡崎。買人開警。走至丸根。告之守將酒井忠利。忠利單騎來小牧。白之。參議發謀。覘之。悉得其實。

● 精銳の兵を隠らず出して ● 相國地 ● はさみ撃つ ● かしち ● 深く沈み考ふ ● 共に尾張國に在り ● 同主して守る

八日。嘯。秀吉陣。燧起。參議

八日嘯、秀吉の陣に燧起る。參議曰く、是れ號を爲すなりと。乃ち密かに諸將を

曰。是爲號也。乃密戒諸將。夜半傳發。選輕騎四千人。自將之。皆卷旗。裏馬街。尾信輝軍而馳。神原康政。水野忠重等爲先鋒。至小幡。碧造斥兵五十。調敵。敵前軍。製取岩崎。斬氏重。信輝檢其首級。大喜。報捷後軍。遂向岡崎。梨明。我先鋒至。稻葉則敵後軍。頓東山下。

戒め、夜半に傳發せしめ、輕騎四千人を選び、自ら之に將として、皆旗を卷き馬街を裏み、信輝の軍に尾して馳す。神原康政、水野忠重等、先鋒たり。小幡の岩に至り、斥兵五十を遣して敵を調はしむ。敵の前軍、岩崎を襲ひ取り、氏重を斬る。信輝其首級を檢して、大に喜び、捷を後軍に報じ、遂に岡崎に向ふ。黎明我が先鋒、稻葉に至れば、則ち敵の後軍、東山の下に頓し、餐を傳へて坐す。我が兵急に之を撃つ。秀次・秀一倉皇起罷し、終に大に敗れて、秀政に走る。秀政敗を前軍に報じて、自ら回り撃つ。是の時に當りて、參議、信輝を携へて勝川に至り、其地名を問ひて之を喜び、其兵に謂ひて曰く、我れ勝てり。甲を擲して進み、遂に捷聞を得、遂に長湫に至る。來り告ぐる者ありて曰く、先鋒、再戦して大に敗れたり。我が軍危懼す。已にして康政歸り調す。參議其手を執りて、泣きて曰く、汝恙なきを得たるかと。康政曰く、臣等一捷して兵疲れ、秀政の乗する所と爲る。君の在すを以て、恥を忍びて此に至ると。

傳餐而坐。我兵急擊之。秀次秀一倉皇起。於大敗。走於秀政。秀政報敗前軍。而自回擊。當是時。參議搆信雄。至勝川。問其地名。而喜之。謂其兵曰。吾勝矣。損甲而進。途得捷報。遂至長湫。有來告者。曰。先鋒再戰大敗矣。我軍危懼。已而康政歸。參議執其手。泣曰。汝得無恙乎。康政曰。臣等一捷而兵疲。爲秀政所乘。以二君在也。忍恥至此。

秀政已與信輝。長可合。追北而來。政說曰。敵大衆乘勝。勢不可抗。不若速走。保岡崎也。參議晒而不答。渡部守綱還報曰。敵亂次。迫北。以麾下迎擊。必克。高木

秀政已信輝・長可と合して、北ぐるを追ひて来る。或ひと説きて曰く、敵の大衆、勝に乗ず。勢抗す可からず。速かに走りて岡崎を保つに若かずと。參議、晒ひて答へず。渡部守綱、還り報じて曰く、敵、次を亂して北ぐるを追ふ。麾下を以て迎へ撃たば、必ず克たんと。高木清秀敵の首を提けて還りて曰く、勝機、此に在り。急に撃ちて失ふ勿れと。本多正信、側侍す。進みて曰く、是れ危を行ひて幸を徴むるなり。蓋ぞ萬全の策に就かざると。清秀、守綱怒りて曰く、子、擲に坐し籌を握れば可なるのみ。何ぞ戰機を沮するかと。參議曰く、二人の言、然りと。

● のろし ● 合を備へて遊せしめて ● 馬のくつわ ● 斥候兵 ● 夜のひきまけ ● 兵糧をつかひて坐す ● ちわたしく起ちて闘ふ ● 勝利の知らせ

清秀提敵首而還曰。勝機在此。急擊勿失。本多正信侍側。進曰。是行危微幸也。盡就萬全之策。清秀守綱怒曰。子坐籌握籌可耳。何沮戰機乎。參議曰。二人之言然。乃命幢主擊葵章白旗。金扇馬標。逸出山後。敵兵望見驚沮。參議乃麾軍而進。井伊直政自南山下。以銃手橫擊。收秀政軍。奪其陣據之。長可信輝與麾下相挑。勝敗未決。

乃ち幢主に命じて葵章の白旗、金扇の馬標を撃けしめ、逸りて山後に出づ。敵兵、望見して驚き沮む。參議乃ち軍を麾きて進む。井伊直政、南山の下より、銃手を以て横撃して、秀政の軍を敗り、其陣を奪ひて之に據る。長可・信輝、麾下と相挑む。勝敗、未だ決せず。

● 列を亂して逃ぐるを追ふ ● 勝利のはづみ ● 敵物の上に坐しかずとりを持つ ● 敵をつかまざるの即ち旗奉行 ● 擲より撃つ

安藤直次獻計。循左麓發銃。長可挺進。指揮中丸而斃。其陣大亂。

安藤直次、計を獻じ、左麓に循ひて銃を發す。長可、挺進指揮して、丸に中りて斃る。其陣、大に亂る。參議大に呼びて曰く、二婿、既に敗れぬ。蓋ぞ撃ちて阿翁を破らざると。我が兵、争ひ進み、池田氏の陣を陷る。永井直勝、信輝の胡床に

參議大呼曰。二婿既敗矣。盡擊破阿翁。我兵爭進。陷池田氏陣。永井直勝。觀信輝據胡床也。舉槍刺之。安藤直次斬信輝。曰。我兵疲矣。卒與生兵遇。必敗。參議曰。然。即收兵而退。入小幡砦。

據るを觀るや、槍を擧げて之を刺す。安藤直次、信輝の子之助を斬る。諸將走るを追ひて、斬首一萬五千級なり。而して日已に午を加ふ。高木清秀・内藤正成白して曰く、我が兵疲れたり。卒かに生兵と遇はば、必ず收れんと。參議曰く、然りと。即ち兵を收めて退き、小幡の砦に入る。

● 案を抜いて進む ● しうと ● 午の刻限に入る ● 新子の兵

秀吉聞敗大怒。獨度以爲我兵恃勝懈備也。以數萬騎疾發。酒井忠次石川數正本多忠勝松平家忠留

秀吉敗を聞きて大に怒り、獨り度りて以爲へらく、我が兵勝を恃みて備を懈りしならんと。數萬騎を以て疾く發す。酒井忠次・石川數正・本多忠勝・松平家忠・小牧に留守す。忠次、虛に乗じて其營を襲はんと欲す。數正、之を沮みて止む。忠勝曰く、敵の大兵赴き援ふ。主公必ず危からんと。自ら兵五百を率ゐて、追ひて秀吉に及び、之と並び行く。相距ること四百歩可なり。秀吉問ひて曰く、彼は誰と爲

守小牧。忠次欲乘虛襲其營。數正沮之而止。忠勝曰。敵大兵赴援。主公必危。自率兵五百。追及秀吉。與之並行。相距可四百步。秀吉問曰。彼爲誰。左右曰。本多平八也。秀吉曰。名不虛已。每兩軍相近。忠勝輒發銃。其騎逸馬。追入敵中。忠勝獨騎馳取之。授騎共還。秀吉兵誘擊之。秀吉不肯。遂至長湫。則無尸蔽野。而不見隻騎。問偵人曰。敵安之。曰。入小幡矣。秀吉歎曰。家康可謂下具華實者也。乃欲遂攻小幡。以三日暮兵疲乃止。

すと。左右曰く、本多平八なりと。秀吉曰く、名虚しからざるのみと。兩軍相近づく毎に、忠勝、輒ち銃を發す。其騎、馬を逸し、追ひて敵中に入る。忠勝獨騎馳せて之を取り、騎に授けて共に還る。秀吉の兵、之を撃たんと請ふ。秀吉肯せず。遂に長湫に至れば、則ち無尸野を蔽ひて、隻騎を見ず。偵人に問ひて曰く、敵は安に之きしと。曰く、小幡に入れりと。秀吉歎じて曰く、家康は華實を具ふる者と謂ふ可きなりと。乃ち遂に小幡を攻めんと欲す。日暮れ兵疲るゝを以て、乃ち止む。

● 推量して ● 御獨の臣 ● たよれたる死體 ● 敵城偵察の兵 ● 花も實もある者

令を下して曰く、二魁一砦に在り。是れ天の予ふる所なり。且日、圍みて之を取

在二一營。是天所予。且日。圍而取之。遂會龍泉寺。忠勝見參議于小幡。說曰。臣不與於戰。人馬皆銳。秀吉之兵。衆而不整。臣遣老兵。觀之。悉其可擊矣。願主公益一隊兵。夜襲敵軍。走之。必取秀吉首。

らんと。遂に龍泉寺に會す。忠勝、參議に小幡に見ゆ。説きて曰く、臣は戰に與らず。人馬皆銳なり。秀吉の兵、衆くして整はず。臣、老兵を遣りて之を覗はしむるに、其の撃つ可きを悉す。願はくは主公、臣に一隊の兵を益せ。夜、敵軍を襲ひて之を走らせ、必ず秀吉の首を大山以南に取り、之を麾下に致さんと。參議曰く、吾れ大勝を得たり。勝に狂るゝ者は必ず危し。且つ秀吉未だ侮る可からざるなりと。即夜路を平戸に取りて、以て小牧に歸る。且日秀吉來り攻む。及ばず。曰く、家康何ぞ神なると。

● 家康と信雄と ● 尾張國に在り ● 物懸れたる兵 ● 擊つ可き事柄を十分に取り調ふ ● 知の明かきること神の如きをいふ

于大山以南。致之麾下。參議曰。吾得二人勝。狙勝者必危。且秀吉未可侮也。即夜。取三路於平戸。以歸小牧。且日。秀吉來攻。不及。曰。家康何神也。

乃引兵還樂

乃ち兵を引きて樂田に還り、壘柵を益増し、堀秀政・蒲生氏郷等をして、萬人を以

田。益増壘柵。使蒲生氏郷等。以萬人守重濠。參議出。勅兵。濠前。氏郷等馳使中軍。請戰。秀吉曰。俟彼來攻。整隊防之。不然。則勿出。參議亦下令曰。敵未踰濠。勿戰。西軍最長。井伊直政。以其裝赤色。目曰赤鬼。五月。朔。秀吉留三戌樂田。撤軍西還。自度。大舉徒歸。恐取三人笑。乃攻取美濃二營。入三大垣。六月。參議使三酒井忠次。留三守小牧。而收入清洲。信雄亦歸三長島。

て重濠を守らしむ。參議出で、兵を濠前に勅す。氏郷等、使を中軍に馳せて、戰はんと請ふ。秀吉曰く、彼の來り攻むるを俟ちて、隊を整へて之を防げ。然らずんば則ち出づる勿れと。參議も亦令を下して曰く、敵、未だ濠を踰えず。戰ふ勿れと。西軍、最も井伊直政を畏る。其裝の赤色なるを以て、目して赤鬼と曰ふ。五月朔、秀吉、戌を樂田に留め、軍を撤して西に還る。自ら度る、大舉して徒に歸らば、恐らくは人の笑を取らんと。乃ち攻めて美濃の二營を取り、大垣に入る。六月、參議、酒井忠次をして小牧を留守せしめて、收めて清洲に入る。信雄も亦長島に歸る。

● 二軍ばり ● 部隊を分ちて整ふ ● 引拂ひて

是時。織田氏一益九鬼嘉隆。皆黨秀吉。一益將略最著。誘信雄統內。市前田三城。降之。又誘大野。大野守將山口重政拒戰不屈。一益將以舟師入蟹江。城中舉烽爲應。參議衆見之。急發兵赴援。呼記室作檄。有吾可親往之語。參議曰。可字

是の時、織田氏の故將瀧川一益・九鬼嘉隆、皆秀吉に黨す。一益將略最も著る。信雄の統内を侵し、蟹江及び下市・前田の三城を誘ひて、之を降す。又、大野を誘ふ。大野の守將山口重政、拒ぎ戦ひて屈せず。一益、將に舟師を以て蟹江に入らんとす。城中、烽を舉げて應を爲す。參議、之を望見し、急に兵を發して赴き援ふ。記室を呼びて檄を作らしむ。吾れ親ら往く可しの語有り。參議曰く、可の字、兵機を沮むと。命じて之を削らしむ。即ち緋衣鞍に上り、鞭を奮ひて馳す。井伊直政・成瀬正成・内藤宗成・水野勝成等、路に追及す。信雄も亦來りて、俱に蟹江に至れば、江潮方に落ち、一益の舟、膠して進む能はず。我が兵、急に之に迫る。一益、兵潰え、厩かに身を以て城に入るを得たり。我が兵、隨ひて之を攻め、別に石川數正・安倍信勝をして、攻めて前田を抜かしめ、其叛將岡部長盛を走らす。山口重政、又、嘉隆を下市に撃ちて之を走らす。

● 領内 ● 海軍 ● 書記 ● かねたびち ● 舟師、土砂につきて進ま

沮兵機命削之。即緋衣上鞍。奮鞭而馳。井伊直政成瀬正成内藤宗成水野勝成等。追及於路。信雄亦來。俱至蟹江。江潮方落。一益舟膠不能進。我兵急迫之。一益兵潰。墮得以身入城。我兵隨攻之。別使石川數正安倍信勝攻拔前田。走其叛將岡部長盛。山口重政又擊嘉隆于下市。走之。

參議與信雄。以中軍攻下市。城負大澤。澤多蘆葦。參議曰。蘆葦蟠根。或可踐而行。使人試之。果然。乃徑澤。過城。城兵不備。因立拔之。斬其守將。乃合兵圍蟹江。榊原康政起土山下射。城中。城中大困。嘉隆以大

參議、信雄と中軍を以て下市城を攻む。城は大澤を負ひ、澤に蘆葦多し。參議曰く、蘆葦の蟠根、或は踐みて行く可しと。人をして之を試みしむ。果して然り。乃ち澤を徑りて城に逼る。城兵備へず。因りて立ちどころに之を抜き、其守將を斬る。乃ち兵を合せて蟹江を圍む。榊原康政、土山を起し、城中を下射す。城中大に困しむ。嘉隆、大艦を以て來り援ふ。我が兵、迎へ撃ちて、復た之を走らす。一益、終に降を乞ふ。參議曰く、叛將を斬りて之を獻じ、盡く邑を信雄に致さば、則ち死を宥さんと。一益、盡く其命の如くす。七月、城を出でて遁れ去る。秀吉大垣に在り。蟹江の急報を得。軍を悉して來り援ふ。及ばず。乃ち桑名に屯す。參議進みて、神戸に至り、諸砦を修築す。秀吉引き去ると聞き、乃ち清洲に還る。

● あし ● わだかまりたる根 ● 土山を築き ● 急の報知

體一來援。我兵迎擊。復走之。一益終乞降。參議曰。斬叛將。獻之。盡我邑於信雄。則宥死。一益盡如其命。七月。出城。遁去。秀吉在大垣。得蟹江急報。悉軍來援。不及。乃屯桑名。參議進至神戶。修築諸砦。開秀吉引去。乃還清洲。

八月。秀吉將兵八萬。復入尾張。前軍至樂田。參議出陣。岩倉。信雄陣。冰村。九月。秀吉至茂呂。參議與信雄。拔軍赴之。親出巡師。西軍。觀我馬表。曰。金扇復至矣。相驚擾。不可定。大久保忠佐。率騎乘之。秀吉夜退軍。二十餘里。砦。

八月、秀吉、兵八萬に將として、復た尾張に入りて、前軍は樂田に至る。參議は出でて岩倉に陣し、信雄は冰村に陣す。九月、秀吉、茂呂に至る。參議、信雄と軍を抜きて之に赴き、親ら出でて師を巡る。西軍、我が馬表を覩て曰く、金扇復た至ると。相驚擾して定む可からず。大久保忠佐、騎を率るて之に乗ず。秀吉、夜、軍を退くる二十餘里なり。大野・奈良に砦し、自ら大垣に入る。參議、乃ち還る。是の月、信濃の諸將、妻籠を攻む。西軍來り援ふと聞きて解きて還る。城兵追蹙す。保科正直、殿戦して之を卻く。十月、參議、酒井忠次を留めて清洲を守り、榊原康政をして小牧を守り、松平家忠・菅沼定盈をして、小幡を守らしめて、兵を收めて岡崎に入る。

● 岩倉・冰村・茂呂、共に尾張國に在り ● 馬をるし ● 信濃に在り

于大野奈良。自入大垣。參議乃還。是。信濃諸將攻妻籠。聞西軍來援。解還。城兵追蹙。保科正直殿戦卻之。十月。參議留酒井忠次守清洲。榊原康政守小牧。松平家忠菅沼定盈守小幡。而收兵入岡崎。

德川氏羽柴氏相持美濃尾張之間者。幾乎一歲。天下下開德川氏屢克羽柴氏不。多。多。來通。款者。南海兵倍奮。屢侵大坂。土佐國主長曾我部元親與故紀伊國主島山貞政。皆應於我。秋。刻。期。夾。擊。秀吉。而。未。來。約也。秀吉懼。

德川氏、羽柴氏、美濃・尾張の間に相持すること、一歲に幾し。天下、德川氏屢々克ち、羽柴氏、競はざるを聞き、來りて款を通ずる者多し。南海の兵、倍々奮ひ、屢々大坂を侵す。土佐の國主長曾我部元親、故の紀伊の國主島山貞政と、皆我に應じ、期を刻して秀吉を夾撃せんと欲す。而して未だ來約せざるなり。秀吉懼れ、十一月、兵に將として伊勢に入る。信雄、之と軍を對す。參議、之を聞きて赴き援はんとす。秀吉、遽かに降を信雄に乞ふ。信雄、之を許す。秀吉而調して誓を獻じ、馳せて、坂に歸る。參議、清洲に至り、之を聞きて慄然たり。石川數正をして和の成るを賀せしめ、十六日、岡崎に還る。而して土佐・紀伊の書至る。參議、慨然として大息して曰く、此書をして十日前に在らしめば、則ち秀吉は生致す可かりしを、今已に後れたりと。使者を勞ひて之を遣る。南海の兵、所在皆解く。居

十一月。將兵入伊勢。信雄與之對軍。參議聞之。赴授。秀吉遣石川數正賀和。成十六日。返岡崎。而土佐紀伊書至。參議慨然。大息曰。使此書在十日。前則秀吉可生。教一也。今已後矣。秀吉使者遣之。南海之兵。所在皆解。居六日。參議凱旋。濱松。論賞長湫戰功。

秀吉遣富田知信津田信季來請和。信雄亦遣瀧川維利介之。參議召詢之。諸將石川數正嘗爲秀吉所誘。心竊嚮之。進說曰。主公之國。不能當秀吉之半。而

ること六日にして、參議、濱松に凱旋し、長湫の戦功を論賞す。

● 時間を定めて ● 一本に集約とあり ● 見えて ● がつかりせり ● 生捕

秀吉、富田知信・津田信季を遣し、來りて和を請ふ。信雄も亦瀧川維利を遣して之を介す。參議、召して之を諸將に詢ふ。石川數正、嘗て秀吉の誘ふ所と爲り、心竊かに之に嚮ふ。進み説きて曰く、主公の國、秀吉の半に當る能はず。而して氏政は其背を劫し、景勝は其肩に逼り、三面に敵を受く。事、爲す可からず。宜しく速かに和を聽して以て國家の計を爲すべしと。參議、怒りて曰く、義如何と問ふのみ。勝敗の數に至りては、則ち乃公、自ら之を計ると。乃ち三使を遣歸す。秀吉復た土方雄久をして數々來り請はしむ。

● 仲人となす ● 秀吉に好意を持つ ● 勝敗の如何 ● 自分が ● マリかへす

氏政劫其背。景勝逼其肩。三面受敵。事不可爲矣。宜速聽和。以爲國家之計。參議怒曰。問義如何耳。至勝敗之數。則乃公自計之。乃遣歸三使。秀吉復使土方雄久數來請焉。

十二月。信雄自來濱松。謝出援之勞。且謂曰。公與秀吉素無仇怨。特爲援我。構兵。今我已與之。和矣。公獨何自執乎。宜聽其所言。秀吉以無子。欲養公之子。公宜予之一人。參議不得已。聽之。欲遣異父弟松平定勝。母水野

十二月、信雄、自ら濱松に來り、出援の勞を謝し、且つ謂ひて曰く、公、秀吉と素より仇怨無し。特に我を援ふ爲に兵を構ふるのみ。今、我れ己に之と和す。公、獨り何ぞ自ら執るか。宜しく其の言ふ所を聽くべし。秀吉は子無きを以て、公の子を養はん。と欲す。公、宜しく之に一人を予ふべしと。參議、已むを得ずして之を聽し、異父弟松平定勝を遣らんと欲す。母水野氏泣きて曰く、渠が兄、嚮に今川・武田に質となり、己に艱楚を極む。其れ之を復するに忍びんやと。參議、愍然として乃ち止む。時に世子の外に三庶子有り。曰く、秀康・忠吉・信吉といふ。秀康は、乃ち萩丸なり。忠吉は東條松平氏を嗣ぎ、信吉は穴山氏を嗣ぐ。乃ち萩丸を遣す。時に年十二なり。本多重次・石川數正、皆其子を以て之に従はしむ。秀吉大に喜び、養ひて子と爲す。羽柴秀康と稱し、邑萬石を給す。後に參河守に任ぜら

氏泣曰。渠兄
 鑿實於今川
 武田。已極二
 楚。其忍復之
 乎。參議怒然
 乃止。時世子
 之外有三庶
 子。曰秀康。忠
 吉。信吉。秀康
 乃獲丸。忠吉
 嗣東條松平氏。
 信吉嗣
 穴山氏。乃遣
 二獲丸。時年
 十二。本多重
 次石川數正。皆
 以其子從之。
 秀吉大喜。發
 爲子。稱二羽
 柴秀康。給二
 邑萬石。後任
 參河守。

● なたきうらみ ● 何ぞ困り物なる ● 甚だ困苦をなす ● 不意に思ひて止めにする ● 三人の腹腹
 子あり ● 養子となす

是月。織田氏
 故將佐佐成
 政自越中來。
 見參議及信
 雄。請三戮力
 攻二。秀吉。信
 雄不許。參議
 厚遇之。諸將
 忿二成政。倭
 政。倭。交勸
 勿援。曰。北地

是の月、織田氏の故將佐佐成政越中より來り、參議及び信雄に見え、力を戮せて秀吉を攻めんと請ふ。信雄、許さず。參議、厚く之を遇す。諸將、成政の倭倭を忿り、交々援ふ勿れと勸む。曰く、北地阻絶、赴き援ふ可からずと。參議、乃ち之に謂ひて曰く、吾れ必ずしも秀吉と戦はず。即し戦ふも、亦必ずしも子の力を借らず。然りと雖も、子の來意は、答へざる可からず。他日緩急有らば、當に之が聲援を爲すべしと。成政、謝して去る。

阻絶。不可二赴
 援。參議乃謂
 之曰。吾不
 與二秀吉二戰。即
 戰。亦不三必借
 子力也。雖然
 子之來意。不
 可二不答。他日
 有二緩急。當
 爲二之聲援。成
 政謝而去。

● 厚く佐々成政を待遇す ● もごりて不疑なること ● 道路遠くかけはなる ● 貴賤の差られたる親切に
 は報ひざる可からず ● 意 なること

十三年。二月。
 城吉良。三月。
 參議患疔。危
 篤。臣民憂懼。
 本多重次造
 枕。請曰。臣嘗
 患此疾。有
 醫治之而愈。
 君請命焉。參
 議曰。毋爲也。
 吾已決死矣。
 重次慙曰。君
 自絶命。臣請
 先焉。乃趨出。

十三年二月、吉良に城く。三月、參議、疔を患へて、危篤なり。臣民憂懼す。本多重次、枕に造り、請ひて曰く、臣嘗て此疾を患ふ。一醫有り、之を治して愈ゆ。君請ふ、命ぜよと。參議曰く、爲す毋れ。吾れ已に死を決せりと。重次慙えて曰く、君、自ら命を絶つ。臣請ふ、先んぜんと。乃ち趨り出づ。參議驚き、左右に命じて之を止む。重次、顧みず。強ひて率る至る。參議曰く、汝、何ぞ此言を得る。吾れ汝が曹有るに頼りて、以て嘆するなり。汝が曹、宜しく軀を全くし子弟を撫循して以て我が家を保つべし。汝何ぞ此言を得ると。

● 病氣重りて生命危し ● 捨て取れ ● 主君の御死去以前に死せん ● 一本に此とあり ● 無理に連れ
 て歸る ● 汝は何故に斯の如き言をなすか ● 安心して死するなり ● 撫てしたがへること

參議驚命左右止之。重次不願。強而率至。參議曰。汝何得此言。吾賴有汝曹也。以暎也。汝曹宜全驅撫。捕子弟以保我家。汝何得此言。

重次泣曰。否。否。臣不欲生也。臣近視甲斐將士喪其首領。折腰於我門。情狀可羞。今臣喪主也。亦將如是也。臣少小從軍。面目削。手足缺。一疲癯翁耳。特以主公眷顧。願爲人所長。主公一嘆。鄰國四襲。我子弟沮喪不支。事可

重次、泣きて曰く、否。否。臣は生を欲せざるなり。臣、近ごろ甲斐の將士、其首領を喪ひ、腰を我が門に折るを視るに、情狀羞づ可し。今臣、主公を喪はば、亦將に是の如くならんとす。臣、少小より軍に従ひ、面目削き、手足缺く。一の疲癯翁のみ。特に主公の眷顧を以て、頗る人の畏るゝ所と爲る。主公、一たび嘆せば、鄰國四襲し、我が子弟沮喪支へず。事、知る可し。是の時に當りて、臣彷徨支吾せば、人將に指して曰はんとす。彼れ疲癯翁、何ぞ恥ぢざるの甚だしきと。臣、故に寧ろ速かに死せん、生を欲せざるなりと。參議曰く、然り。吾れ能く汝の意に従はん。汝も亦能く吾が意に従ひ吾が爲に恥を忍ぶや、否やと。重次曰く、君苟も臣に聽く。臣、豈に敢て違はんやと。乃ち其醫を召す。醫曰く、宜しく灸すべしと。重次、手づから艾を灼き藥を進む。其夜、疔潰えて瘻の。重次、喜極

りて哭す。

● 我が家に平伏するを視るに其の有様は實に恥かし ● 一人のつかれたる老人のみ ● 目をかけたるゝ故に心撞けては少少掃掃へられず ● さまよひあるきて他人の情少を乞はる ● 主君に於て苟も臣の言を聞聞入にされば私も決して主君の御命令に逆はず ● 喜びの餘り聲を立て、泣く

知矣。當是時。臣彷徨支吾。人將指曰。彼疲癯翁。何不聽之甚。臣故寧速死。不欲生也。參議曰。然。吾能從汝意。汝亦能從吾意。爲吾忍恥乎。否。重次曰。君苟聽於臣。臣豈敢違。乃召其醫。醫曰。宜灸。重次手灼艾。進藥。其夜。疔潰而瘻。重次喜極而哭。

是の月、秀吉、南、紀伊を取る。根來の僧兵、來奔するもの二百人なり。乃ち根來部を置く。五月、參議、甲斐を巡る。是より先、眞田昌幸、上野を侵し、沼田を取る。北條氏直、之を還さんと請ふ。參議、昌幸に諭して之を還らしめ、償を内地に取る。昌幸、命を奉ぜず。終に上杉氏に屬し、困りて秀吉に降る。大久保忠世、烏居元忠、平岩親吉、將士を率ゐて之を攻む。八月、秀吉、北、越中を取り、佐佐成政を降す。上杉景勝、又越後を舉げて之に降る。秀吉密に景勝と議し、昌幸を援けて以て我を圖らしむ。閏月、我が兵、上田を攻め、利あらず。敵、追ひて利川に至

地。昌幸不奉命。終屬上杉氏。因降於秀吉。大久保忠世。鳥居元忠。平岩親吉。率將士攻之。八月。秀吉北取。越中。降佐佐成政。上杉景勝。又舉越後。降之。秀吉密與景勝一議。使援昌幸。以圍我。閏月。我兵

る。忠世、十餘騎を以て殿して濟り、南岸に陣し、返撃せんと欲す。二將、肯ぜず。明日、忠世、筑摩川を濟り、八重原に陣す。昌幸、手白塚に陣す。忠世、柴田康忠をして還りて二將に告げしめて曰く、公等、河を壓して陣し、我と夾撃せば、必ず之を殲さんと。二將曰く、吾れ地理に暗し。持重に若かずと。忠世、怒り、又、謂はしめて曰く、公等、敵を怖れば、猶ほ當に我が後に來りて以て聲援を爲すべしと。亦肯ぜず。往復の間、昌幸、己に退き、城下に陣す。忠世、切齒して曰く、籠禽を脱すと。

- 徳川氏に來り從ふ者
- つぐのひを領分内にて取らしむ
- 越後全國を以て降參す
- 信濃國に在り
- 鳥居・平岩
- 八重原・手白塚、共に信濃國に在り
- 齒をくひしはりて殘念がる
- 籠の鳥を脱すと

攻上田。不利。敵追至利川。忠世以三十餘騎殿而濟。陣兩岸。欲返擊。二將不肯。明日。忠世濟。筑摩川。陣八重原。昌幸陣手白塚。忠世使柴田康忠還告二將曰。公等壓河而陣。與我夾擊。必殲之。二將曰。吾暗於地理。不若持重。忠世怒。又使謂曰。公等怖敵。猶當來我後。一以爲聲援。亦不肯。往復之間。昌幸已退。陣于城下。忠世切齒曰。脱籠禽也。

於。是諸將列壁相持。昌幸不取出。參議遣井伊直政等一援之。昌幸出兵。康忠擊走之。岡部長盛要其歸途。又敗之。九月。閉。景勝大舉。且直政。康忠爲。殿。昌幸子幸村請追之。昌幸曰。將勇陣整。不可追也。忠世於是留守小室。以備景勝。昌幸來襲。參議欲徙國都于駿河。命諸將士修築府中。

是に於て、諸將、壁を列ねて相持す。昌幸、敢て出でず。參議、井伊直政等を遣して之を援はしむ。昌幸、兵を出して、康忠の營を犯す。康忠、撃ちて之を走らす。岡部長盛、其歸途を要す。又之を敗る。九月、景勝の大舉して且に至らんとするを聞き、兵を解きて還る。直政・康忠殿と爲る。昌幸の子幸村、之を追はんと請ふ。昌幸曰く、將勇に陣整ふ。追ふ可からざるなりと。忠世、是に於て、小室を留守して、以て景勝・昌幸の來襲に備ふ。參議、國都を駿河に徙さんと欲し、諸將士に命じて、府中を修築せしむ。

- 籠を脱すと
- 歸り路を待受く
- 信濃國に在り
- 來りて不意うちすること

北條氏聞景勝與秀吉連

北條氏、景勝の秀吉と連衡するを聞き、大に懼れ、十月、將士をして來りて盟

衛上也。大懼。十月。使將士來尋盟。益固從約。本多重次自度曰。物情恟恟。而我兒在上國。恐受搆貳之疑。乃使使大坂曰。兒之母有疾。請使一訣。因取其兒而還。石川數正亦在大坂。秀吉資望日隆。位至關白。賜姓豐臣。諸名族大邦入謁者。皆被恩榮。

を尋がしめ、益々從約を固くす。本多重次、自ら度りて曰く、物情恟恟たり。而して我が兒は上國に在り。恐らくは搆貳の疑を受けんと。乃ち使をして大坂に使用して曰く、兒の母、篤疾有り。請ふ。一訣せしめんと。因りて其兒を取りて還る。石川數正、岡崎を守る。其兒も亦大坂に在り。秀吉資望日々に隆なり。位、關白に至り、姓を豊臣と賜ふ。諸の名族、大邦の入謁する者、皆恩榮を被る。數正、竊かに之を歎む。秀吉も亦八萬石の邑を以て之を招く。數正、遂に款を送る。眞田昌幸及び小笠原貞慶と謀を通ず。又、其部將松平近正を誘ふ。近正怒り、肯せずして曰く、使者再び來らば之を斬らんと。因りて其書を獻す。十一月、數正、家を撃つて大坂に出奔す。時に將士の孥、多く岡崎に在り。松平家忠、深溝より馳せ至り、其四門を護る。酒井忠次も亦吉田より至り、使を馳せて變を上る。中外動搖す。參議、行々鷹を放ち、岡崎に至り、即日、忠次の第に臨み、命じて散樂を張る。人心即ち定る。

● 東西に連合す ● 南北に連合す ● 平靜ならず ● ふたごゝる ● 一度訣別せしめん ● 身分と名
● 組大將 ● 家柄を引連れて ● 動き騒ぐ ● 能狂言 ● 人心がもちつく

數正竊歎之。秀吉亦以二八萬石邑招之。數正遂送款焉。與眞田昌幸及小笠原貞慶通謀。又誘其部將松平近正。近正怒。不肯曰。使者再來。斬之。因獻其書。十一月。數正擊家出奔大坂。時將士孥多在岡崎。松平家忠自深溝馳至。護其四門。酒井忠次亦至。自吉田馳使上變。中外動搖。參議行放鷹。至岡崎。即日。臨忠次第。命張散樂。人心即定。

乃召大久保忠世。忠世曰。景勝日伺我隙。而貞慶舉兵。應之。又聞昌幸迎故信玄孥子某。以煽將士。吾一動。則甲斐信濃皆覆沒矣。弟忠教曰。敢請代守。生死

乃ち大久保忠世を召す。忠世曰く、景勝、日々に我が隙を伺ふ。而して貞慶、兵を舉げて之に應ず。又聞く、昌幸、故信玄の孥子某を迎へて以て將士を煽すと。吾れ一たび動かば、則ち甲斐・信濃、皆覆沒せんと。弟忠教曰く、敢て請ふ、代りて守り、生死之を以てせんと。忠世喜び、乃ち發す。大雪、歳に踰ゆるに會ふ。景勝・昌幸、兵を出す能はず。忠教、代を得て歸る。參議、岡崎の塹壘を修め、厚く近正を褒し、數正の部兵を以て内藤家長に屬せしむ。是に於て、諸將、皆質を獻す。參議、多く之を還す。數正、既に大坂に至る。秀吉之を遇すること甚だ薄

以之。忠世喜。乃發會大雪。幸能出兵。忠諸將皆獻賀。參議多還之。數正既至。六坂。秀吉遇之甚薄。或榜其門。噉之。數正羞縮不出。或ひと其の門に榜して之を噉ふ。數正、羞縮して出でず。

秀吉既定南海・北陸を定め、以爲へらく、我れ己に德川氏左右の臂を奪ふと。景勝を噉して之を脅さしむ。其國、又内訌あり。是の時に於て、家康と和せば、和必ず成り、家康必ず來らん。天下復た圖るに足る者莫しと。乃ち信雄と議し、羽柴勝雅・土方雄久をして、來りて和を議せしむ。使者を戒めて曰く、德川は數正の故を以て、意必ず不平ならん。汝が輩善く之に處せよと。二使岡崎に來り、辭を卑くし禮を厚くし、秀吉・信雄の意を陳べ、參議の京師に入觀するを請ふ。參議而論して曰く、長湫の獲は、皆秀吉の愛重する所なり。其の我に甘心せんと欲する久し。吾れ敢て往かず。旗鼓を見るに至りては、敢て努力せざらんやと。

二使乃ち去る。或ひと諫めて曰く、主公、往かずんば、則ち次郎將に免れざらんとすと。參議曰く、羽柴秀康、其父の殺す所と爲る。我れ何て與らんと。遠近傳言す、秀吉、大舉して東下すと。參議、乃ち守備を修め、羣臣に問ひて曰く、岡崎は我が墳墓の地なり。而して敵の衝に當る。誰か守らしむ可き者ぞと。本多正信曰く、緩急能く妻兒を手刃し、城を枕にして死する者にして而る後に可なりと。參議曰く、作左衛門は其人なりと。乃ち精兵數百を以て本多重次に屬し、往きて之を守らしむ。重次、辭して出づ。意色甚だ決す。參議、乃ち其子成重をして封を襲がしめんと約し、給するに手書を以てす。

● 内翰もり ● うまく遣れ ● 入朝 ● 合戦始る時には ● 故郷の地なり ● 急の場合には妻を別殺し城に立籠りて死する決心を有する酒にして此役を仕果す ● 白筆の書状

久來議和。戒二使者曰。德川以二數正故也。意必不平。汝輩善處之。二使來岡崎。車辭厚禮。陳二秀吉信雄之意。請參議入觀。京師參議面論曰。長湫之獲。皆秀吉所愛重。其欲甘二心於我久矣。吾不致往。至二旗鼓相見。敢不努力。二使乃去。或諫曰。主公不往。則次郎將不免。參議曰。羽柴秀康爲其父所殺。我何與焉。遠近傳言。秀吉大舉東下。參議乃修守備。問羣臣。岡崎我墳墓之地。而當敵之衝。誰可使守者。本多正信曰。緩急能手刃妻兒。枕城而死者。而後可。參議曰。作左衛門其人也。乃以精兵數百。屬本多重次。往守之。重次辭出。意色甚決。參議乃約其子成重。襲封。給以手書。

● 内翰もり ● うまく遣れ ● 入朝 ● 合戦始る時には ● 故郷の地なり ● 急の場合には妻を別殺し城に立籠りて死する決心を有する酒にして此役を仕果す ● 白筆の書状

十四年正月。參議、岡崎に通く。秀吉、復た羽柴勝雅をして來りて、固く入觀を請はしむ。信雄も亦、其叔父長益をして來りて之を慫慂せしむ。參議、肯せず。使者、敢て去らず。其館に在りて之を候ふ。參議、吉良に獵す。使者、間を承けて來り見ゆ。參議、鷹を臂にして顧みて曰く、一搏撃つ可し。人の條制に就く能はずと。明日、復た見ゆ。參議曰く、若未だ去らざるか。吾れ復た若が説を聞くを欲せずと。勝雅進みて曰く、願はくは君侯、少く之を容して、臣をして其説を終ふるを得しめよ。夫れ關白、百萬の兵を以て、天子を翼けて令を出す。西に毛利の援有り。東に上杉の助有り。俊雄豪傑、争ひて之が用を爲す。復た何を欲して致さざらん。而して節を屈して君侯を招き、使者三反す。君侯、安危の決を思はず。徒に放鷹逐禽を以て事と爲す。臣、君侯の境内を視るに、城壘固からず。溝池濶からず。關白一たび趾を舉げば、則ち上田の南、鳴海以東、君侯の有に非ざるなり。臣竊かに君侯の爲に之を危むと。參議、色を起して曰く、何

十四年正月、參議、岡崎に通く。秀吉、復た羽柴勝雅をして來りて、固く入觀を請はしむ。信雄も亦、其叔父長益をして來りて之を慫慂せしむ。參議、肯せず。使者、敢て去らず。其館に在りて之を候ふ。參議、吉良に獵す。使者、間を承けて來り見ゆ。參議、鷹を臂にして顧みて曰く、一搏撃つ可し。人の條制に就く能はずと。明日、復た見ゆ。參議曰く、若未だ去らざるか。吾れ復た若が説を聞くを欲せずと。勝雅進みて曰く、願はくは君侯、少く之を容して、臣をして其説を終ふるを得しめよ。夫れ關白、百萬の兵を以て、天子を翼けて令を出す。西に毛利の援有り。東に上杉の助有り。俊雄豪傑、争ひて之が用を爲す。復た何を欲して致さざらん。而して節を屈して君侯を招き、使者三反す。君侯、安危の決を思はず。徒に放鷹逐禽を以て事と爲す。臣、君侯の境内を視るに、城壘固からず。溝池濶からず。關白一たび趾を舉げば、則ち上田の南、鳴海以東、君侯の有に非ざるなり。臣竊かに君侯の爲に之を危むと。參議、色を起して曰く、何

曰。願君侯少容之。使臣得終其說。夫關白以百萬之兵。翼天子出令。西有毛利之援。東有上杉之助。俊雄豪傑。争爲之用。復何欲而不致。而屈節招君侯。使者三反矣。君侯不思安危之決。徒以放鷹逐禽爲事。臣視君侯境内。城壘不固。溝池不濶。關白一舉趾。則上田之南。鳴海以東。非君侯之有也。臣竊爲君侯危之。參議起色曰。何啻啻也。秀吉兵雖衆。不過二十萬。我兵雖寡。可得三四萬。要客兵於熱地。遊險而擊之。何難之有。歸語秀吉。能來則來。不能往也。勝雅長益返大坂。慮秀吉怒。匍伏復命。秀吉徐曰。家康言良然。

ぞ啻啻する。秀吉の兵衆しと雖も、十萬に過ぎず。我が兵寡しと雖も、三四萬を得べし。客兵を熱地に要し、險に遊へて之を撃たば、何の難か之れあらん。歸りて秀吉に語けよ。能く來らば則ち來れ。往く能はざるなりと。勝雅・長益、大坂に返り、秀吉の怒を慮り、匍伏して復命す。秀吉徐に曰く、家康の言良に然りと。

- ① ナ、めしむ ② 上き折を見て ③ 鷹を臂にすまて ④ 人の下につきて之に甘ずる能はず ⑤ 吾が言はんと欲す不處を言はしめよ ⑥ 何事も欲して得ざるものなし ⑦ 鷹狩取符を以て仕事となす ⑧ 皮込まば ⑨ 口やかましき ⑩ 他國の兵を地理を熟知して待受け險阻の地に迎へ撃たば何のむづかしきことかあらん ⑪ 身をひれ伏して返事を申上り

決。徒以放鷹逐禽爲事。臣視君侯境内。城壘不固。溝池不濶。關白一舉趾。則上田之南。鳴海以東。非君侯之有也。臣竊爲君侯危之。參議起色曰。何啻啻也。秀吉兵雖衆。不過二十萬。我兵雖寡。可得三四萬。要客兵於熱地。遊險而擊之。何難之有。歸語秀吉。能來則來。不能往也。勝雅長益返大坂。慮秀吉怒。匍伏復命。秀吉徐曰。家康言良然。

堀秀政蒲生氏郷等。爭勸東伐。秀吉不聽。沈思竟日。其夜四更。急召勝雅及信雄。被衣而出。曰。吾業已使家康來矣。二人驚問。故曰。彼亡室。吾以我妹繼之。彼寧不來。國人猶有不安。則以我大廳爲質。堀尾吉晴生駒親正侍坐。問曰。尊妹何在。曰。佐治之室是也。初秀吉有二異父妹。適佐治日向者。秀吉欲奪之。改適於我也。明日。使吉晴親正諭告佐治。佐治勉強聽命。遣妻而自殺。

堀秀政・蒲生氏郷等、争ひて東伐を勸む。秀吉聽かず。沈思すること竟日なり。其夜四更、急に勝雅及び信雄を召し、衣を被て出でて曰く、吾れ業已に家康をして來らしむと。二人驚きて故を問ふ。曰く、彼れ室を亡ふ。吾れ我が妹を以て之に繼がん。彼れ寧ぞ來らざらんや。國人猶ほ安んせざるあらば、則ち我が大廳を以て質と爲さんと。堀尾吉晴・生駒親正侍坐す。問ひて曰く、尊妹何に在ると。曰く、佐治の室是なりと。初め秀吉に異父妹あり。佐治日向といふ者に適ぐ。秀吉之を奪ひて改めて我に適がしめんと欲するなり。明日、吉晴・親正をして、佐治に諭告せしむ。佐治、勉強して命を聽き、妻を遣して自殺す。

- 深く考へ込む
- 終日
- 夫人死す
- 御側にあす
- 嵐ちがひの妹
- まとしつげしむ
- 我慢して

二月。乃使長益勝雅及富田知信。天野雄光來議婚。別授密旨於淺野彈正。少弼繼發。四使至。因酒井忠次。求參議不見。忠次告故。固請。延見之。四使曰。齋藤白無子。得養君侯。子。聞君侯亡。室。欲進關白。妹。參議曰。好意至此。吾豈拒之。獨有三事。約之。則後

二月、乃ち長益・勝雅及び富田知信・天野雄光をして、來りて婚を議せしむ。別に密旨を淺野彈正少弼に授け、繼ぎて發せしむ。四使至り、酒井忠次に因りて見ゆるを求む。參議見ず。忠次、故を告げて固く請ふ。數日にして之を延見す。四使曰く、齋藤關白に子なし。君侯の子を養ふを得たり。君侯、室を亡ふと聞く。關白の妹を進めんと欲すと。參議曰く、好意此に至る。吾れ豈に之を拒まんや。獨三事有り。之を約して後に婚せんと。請ひ問ふ、答へず。使者曰く、淺野彈正、密諭を帯びて清洲に在りと。乃ち駟を以て召し至る。參議、三事を書して之に示す。曰く、新婦に出あるも、嗣と爲す可からず。故の嗣子出でて質たる可からず。吾れ或は蚤世するも、寸地を割く可からずと。彈正少弼曰く、某、關白の手書を袖にす。亦三條有り。出して之を視す。皆暗合す。參議、怡然として、遂に婚を許す。信雄來り賀す。

- 婚約を申込しむ
- 強ひて問ふ
- 早馬
- 早死
- よろこぶ

婚。詢問。不答。使者曰。淺野彈正帶密論。在清洲。乃以昭召至。參議書三事。示之曰。新婦有出。不可爲嗣。故嗣子不可出質。吾或蚤世。不可割寸地。彈正少弼曰。某袖關白手書。亦有三條。出而視之。皆暗合焉。參議怡然。遂許婚。信雄來賀。

北條氏聞之。意頗危疑。請盟。三月。參議與氏直盟于黃瀬河。極歡而止。遂毀沼津。鄂以示意。四月。納幣京師。秀吉使彈正少弼送女。參議使榊原康政往告禮成。館于富田氏。秀吉就見曰。吾欲見子而久矣。小牧之役。醜我者。非子乎。吾嘗購子頭千金。今德川已爲我婿。我婿有材。臣如子者。吾所喜也。

北條氏、之を聞きて、意頗る危疑し、盟を請ふ。三月、參議、氏直と、黃瀬河に盟ひ、歡を極めて止む。遂に沼津の鄂を毀ちて以て意を示す。四月、幣を京師に納る。秀吉、彈正少弼をして女を送らしむ。參議、榊原康政をして往きて禮の成るを告げしむ。富田氏に館す。秀吉、就きて見て曰く、吾れ子の面を見んと欲するこゝと久し、小牧の役に、我を醜詆せし者は、子に非ずや。吾れ嘗て子の頭を千金に購ふ。今、德川已に我が婿と爲る。我が婿に材臣の子の如き者あるは、吾が喜ぶ所なりと。

● 意中甚だ危ぶみうたかふ ● 盟言を放ちてせしむ ● 材質ある足下の如き者あるは

七月。參議將自將討上田。秀吉聞之。使使來言。關白爲昌幸請願釋之。八月。令昌幸及小笠原貞慶來謝罪焉。

七月、參議、將に自ら將として上田を討たんとす。秀吉、之を聞きて、使をして來り言はしむらく、關白、昌幸の爲に請ふ、願はくは之を釋せと。八月、昌幸、及び小笠原貞慶をして、來りて罪を謝せしむ。

● 家康の親征を聞きて ● 來りて罪を詫びしむ

參議遂議。西上。酒井忠次曰。彼雖婚未可輕信。宜下確得其情。然後往。是月。秀吉遣書固請。九月。使彈正少弼以下六輩來約。送大廳爲質。秀吉

參議、遂に西上を議す。酒井忠次曰く、彼れ婚すと雖も、未だ輕くしく信ずべからず。宜しく其情を確得して然る後に往くべしと。是の月、秀吉、親書を遣りて固く請ふ。九月、彈正少弼以下六輩をして來らしめ、大廳を送りて質と爲さんと約す。秀吉の弟秀長諫めて曰く、母を以て質と爲す。天下後世、之を何と謂はんや。何ぞ之を征伐せざると。秀吉晒ひて曰く、汝何ぞ狭中なる。是れ汝が知る所に非ざるなりと。十月、詔して、參議を中納言に遷す。秀吉、奏して

弟秀長諫曰。以母爲質。天下後世謂之何哉。何不征伐之。秀吉晒曰。汝何狹中。是非汝所知也。十月。詔。遷參議中納言。秀吉奏請之也。中納言遂決意入朝。

之を請ふなり。中納言遂に意を決して入朝す。

● たしかめて ● 自筆 書をわくりて ● 心狭き

諸將皆諫曰。秀吉威力如此。豈眞以其母爲質。恐有詐謀。吾陷其計中。雖悔可追。願君勿往。秀吉怒而來。臣等當以死拒之。中納言曰。吾亦不保其非僞。雖然。彼百方修好。

諸將皆諫めて曰く、秀吉の威力此の如し。豈に眞に其母を以て質と爲さん。恐らくは詐謀あらん。吾れ其計中に陥らば、悔ゆと雖も、追ふべけんや。願はくは君往く勿れ。秀之怒りて來らば、臣等當に死を以て之を拒ぐべしと。中納言曰く、吾も亦其の僞に非ざるを保せず。然りと雖も、彼れ百方好を修め、母を以て質と爲すに至る。而して吾れ猶ほ遅回せば、世のひと、吾を怯と謂はん。且つ彼も亦天命有り。吾れ當に之を助けて共に天下の亂を定むべし。今復た與に兵を構へば、則ち亂曷ぞ止むあらんや。我が一人の命を捐てて、以て億萬の生靈を救ふ。亦多ならずやと。乃ち世子をして留りて國を監せしめ、大久保忠世・石川家成、之を

至以母爲質。而吾猶遲回。世謂吾怯也。且彼亦有天命。吾當助之。共定天下之亂。今復與構兵。則亂曷有止乎。捐我一人之命。以救億萬生靈。不亦多乎。乃令世子留監國。大久保忠世・石川家成輔之。井伊直政助二本多重次守岡崎。而親帥士卒萬人上。至岡崎。遇秀吉母。至。迎夫人。見之。信矣。

輔け、井伊直政に本多重次を助けて岡崎を守らしめ、而して親ら士卒萬人を帥りて西上し、岡崎に至りて、秀吉の母の至るに遇ふ。夫人を迎へて之を見しむるに、信なり。

● いつはり はかりごと ● 偏にあらざることを保證すること能はず ● 種々ト手を盡して ● ためらふ

秀吉命沿道諸國。修橋梁。供帳。二十七日。至京師。館于茶屋晴延。秀吉與弟秀長。及彈正少弼。以下來見。

秀吉、沿道の諸國に命じ、橋梁を修め、供帳せしむ。二十七日、京師に至り、茶屋晴延に館す。秀吉、弟秀長及び彈正少弼以下と、來り見て曰く、長篠の役より、相而見せざること十二年なり。今、吾子一たび天下の爲に節を屈す。吾が事成れりと。遂に扈從の諸將を見、本多忠勝に謂ひて曰く、小牧の役に、汝、我が軍と抗して行く。一騎當千の者と謂ふべきなりと。遂に酒饌を命じ、自ら嘗みて

曰。自長篠之役。不相而見。十二年矣。今吾子一爲。天下。一屈節。吾事成矣。遂見。扈從諸將。謂。本多忠勝曰。小牧之役。汝與我軍。抗而行。可謂一驍當千者也。遂命。酒餼。自營而進。贈賄極厚。如是者。連夜。因從容問曰。我起微賤。諸侯多不心服。奚爲則可。中納言對曰。公第莫違義。義所在。天下從之。秀吉曰。善。既而曰。明日見。子于聚樂。子枉意降我。以視諸侯。十一月二日。入聚樂第一。秀吉大會諸侯。延見如儀。中納言拜跪甚恭。諸侯皆改容。其明日。大饗。

進め、贈賄極めて厚し。是の如きこと連夜なり。因りて從容として問ひて曰く、我れ微賤より起り、諸侯多く心服せず。奚爲れば則ち可ならんと。中納言對へて曰く、公、第義に違ふ莫れ。義の在る所、天下之に従ふと。秀吉曰く、善しと。既にして曰く、明日、子を聚樂に見ん。子、意を枉けて我に降りて、以て諸侯に視せと。十一月二日、聚樂の第に入る。秀吉、大に諸侯を會し、延見すること儀の如くす。中納言拜跪すること甚だ恭し。諸侯、皆容を改む。其明日、大に饗す。

● 通行の道路にそよこと ● 面置 ● 貴殿一たび天下の爲に心を曲げて従ふ ● とも ● 贈賄 ● 如
何せばよからん ● 貴殿心をまげて我に降りて諸侯に手本となれ

當此時。秀吉母在岡崎。岡崎役卒。日積薪其館外。其侍婢怪之。召役卒問故。對曰。作左遲中納言歸也。曰。若有短長。焚殺大廳。此老性急。今且已欲縱火。井伊公留之而止。婢大怖。相謂曰。往年參河任子來。關白指其一人曰。彼鬼作左之兒也。今其鬼乃欲殺我輩。

此時に當りて、秀吉の母、岡崎に在り。岡崎の役卒、日々に薪を其館外に積む。其侍婢之を怪しみて、役卒を召して故を問ふ。對へて曰く、作左中納言の歸を運つ。曰く、若し短長あらば、大廳を焚殺せん。此老、性急なり、今且已に火を縱たんと欲す。井伊公之を留めて止む。婢、大に怖れ、相謂ひて曰く、往年、參河の任子來りしに、關白、其一人を指して曰く、彼れ鬼作左の兒なりと。今、其鬼乃ち我が輩を殺さんと欲すと。遂に之を大廳に白す。大廳、憂悸し、書を秀吉に馳せて、中納言の歸を促す。中納言方に秀長の饗を受く。宴酣なるとき、秀吉至りて、楮袍にて茗を點じて曰く、請ふ、聚樂に祖せんと。乃ら與借に出づ。諸侯、皆門外に在り。秀吉曰く、吾れ我が母の早歸を欲す。故に我が婿をして趣して國に就かしむと。秀長、中納言の足に躡す。中納言、進みて其楮袍を乞ふ。秀吉曰く、此れ戎衣なりと。中納言曰く、家康在り。公をして復た戎衣せしめずと。秀吉笑ひて、脱して之を附し、因りて左右に顧みて曰く、吾れ

遂白之大廳。大廳憂悸。馳書秀吉。促中納言歸。中納言方受秀長之饗。宴酣。秀吉至。楮袍點。

快婿を得たりと。衆、譏然たり。蓋し秀長をして豫め中納言に教へしめしなり。

- はたちきの兵
- 毎日新を館の外に柄上ぐ
- 本多山次の通稱
- 萬一いさくさあちは
- 氣早なり
- 一本に且とあり
- 憂ひもそる
- 紙製の陣羽織を著て茶をたて
- 調道の宴を強る
- 軍服
- 心持よき楮
- 一本に堂羅紗の三字なし

茗曰。請祖於三樂。乃與偕出。諸侯皆在門外。秀吉曰。吾欲我母之早歸。故使我婿趣就國。秀長臨中納言足。中納言進乞其楮袍。秀吉曰。此戎衣也。中納言曰。家康在焉。不使公復戎衣。秀吉笑。脫而附之。因左右顧曰。吾得快婿一矣。衆譏然。蓋使秀長豫教中納言一也。

秀吉遂起。德川氏第。于二條。賜酒。井忠次宅。命秀長部將藤堂高虎。監役。以近江地三萬石。爲湯沐邑。賜

秀吉遂に德川氏の第を二條に起し、酒井忠次に宅を賜ひ、秀長の部將藤堂高虎に命じて役を監せしめ、近江の地三萬石を以て湯沐の邑と爲し、忠次に千石の邑を賜ふ。五日、中納言、正三位に進む。井伊直政は兵部大輔に任じ、榊原康政は式部大輔に任じ、皆從五位下に敘せらる。其餘の將領、官爵を受くること差あり。鳥居元忠以爲へらく、是れ秀吉、朝爵を假りて我が輩を結納するなりと。乃ち

忠次千石邑。五日。中納言進正三位。井伊直政任兵部大輔。榊原康政任式部大輔。皆敘從五位下。其餘將領受官爵。有差。鳥居元忠以爲是秀吉假朝爵。結納我輩也。乃辭曰。臣關東野人。創夷之餘。不便跪起。豈任衣冠哉。後秀吉使羽柴勝雅以女妻元忠子忠政。因養爲子。元忠曰。臣兒不可使有君。亦辭之。

辭して曰く、臣は關東の野人なり、創夷之餘、跪起に便ならず。豈に衣冠に任へんやと。後、秀吉、羽柴勝雅をして、女を以て元忠の子忠政に妻はさしめ、因りて養ひて子と爲さんとす。元忠曰く、臣の兒、二君あらしむ可からずと。亦之を辭す。

● 工事の監督をさす ● 采地の意

十四日。中納言歸參河。重次以下迎賀。乃令直政送還大廳。諸侍女畧直政有禮。秀吉喜。饗之。中納言之

十四日、中納言、參河に歸る。重次以下迎へ賀す。乃ち直政をして大廳を送還せしむ。諸侍女、直政の禮あるを饗む。秀吉喜びて、之を饗す。中納言の京師に在るや、秀吉、石川數正の謁見を許されんと請ふ。直政を饗するに及びて、又數正をして接伴せしむ。饗を終ふるまで、直政一言を交へず。數正を指して衆に謂ひて曰く、彼は人面にして獸心の者なりと。一坐、色を失ふ。大廳の侍女、又重次

在京師也。秀吉請許石川數正謁見。及正直政。又使數正接伴焉。終饗。直政不交一言。指數正謂衆曰。彼人面獸心者。一坐失色。大廳侍女又懇重次亡狀。請加罰。秀吉笑曰。家康多佳士。可羨。

の亡狀を懇へ、罰を加へんと請ふ。秀吉笑ひて曰く、家康は佳士多し。羨むべしと。

●送り還さしむ ● まみゆ ● 人の面をして心中は獸なり證を知らず ● 無禮

十二月。駿府城成。中納言留菅沼定政守濱松。而徙居駿府。以板倉勝重爲奉行。勝重幼爲僧。喜讀書。父好重。弟定重。皆死。事兄忠重。卒。無子。中納言乃令勝

十二月、駿府城成る。中納言、菅沼定政を留めて濱松を守らしめて、徙りて駿府に居る。板倉勝重を以て奉行と爲す。勝重幼にして僧と爲り、喜みて書を讀む。父好重、弟定重、皆事に死し、兄忠重、卒して子なし。中納言、乃ち勝重をして髪を蓄へて吏と爲らしめ、終に之を識拔す。勝重、固辭す。許さず。乃ち請ひて曰く、願はくは家に歸りて妻と計るを得んと。中納言晒ひて、之を許す。妻欣び迎へて曰く、人有り、夫婦に慶事ありと告ぐ。何ぞやと。勝重、朝服を脱して坐し、之に謂ひて曰く、吾れ奉行の命を受く。汝と之を計らんと欲し、且

重著髮爲吏。終藏拔之。勝重因辭不許。乃請曰。願得歸家與妻計焉。中納言晒許之。妻欣迎曰。有人告天婿有慶事。何也。勝重脫朝服坐。謂之曰。吾受奉行之命。欲與汝計之。且辭而歸。願汝謂何。妻驚曰。是公事也。妾何得辨之。勝重曰。不然。自古爲吏者。誰不以內謁取事。自今以往。汝於我所爲。無一有。議於外人。苞直。無一有。受。則吾拜命矣。妻曰。敢不唯命是聽。勝重與之誓。復被朝服。穿袴而出。妻送。見其袴後。拗

く辭して歸る。願ふに、汝、何と謂ふと。妻驚きて曰く、是れ公事なり。妾、何ぞ之を辨するを得んと。勝重曰く、然らず。古より吏と爲る者、誰か内謁を以て事を敗らざる。今より以往、汝、我が爲す所に於て、一も議するあるなく、外人の苞直に於て、一も受くるあるなくんば、則ち吾れ命を拜せんと。妻曰く、敢て唯命を是れ聽かざらんやと。勝重之と誓ひて、復た朝服を被り、袴を穿きて出づ。妻送り、其袴後の拗れたるを見て、呼び返して、之を正さんと欲す。勝重怒りて曰く、何ぞ誓に背くと。妻、惶恐して謝す。是に於て、往きて命を拜して職に就く。訟獄平允、百事、大に治る。

● 還俗せしめて ● 其の器量あるを知り拔擢す ● 妻と相談をしたし ● 喜び事 ● 正服を着けて ● 婦人の謁託 ● 彼此と口出せず ● 他人よりの贈物を一つも受けぬとらば ● 公平誠實にして萬事大に治まる

也。呼返。欲正之。勝重怒曰。何背誓也。妻惶恐謝。於是往拜命就職。訟獄平允。百事大治。

十五年二月。造駿府二城。秀吉既與我。和不慮東面。於是大舉四。伐中納言遣。本多廣孝。勞。師攻二岩石。城。廣孝力戰。受賞。七月。秀吉定九州。而還。中納言赴。大坂。賀之。八月。聘大納言。進從二位。乃還。十二月。兼左近衛大將。左馬寮御監。

十五年二月、駿府の二城を造る。秀吉既に我と和し、東面を慮らず。是に於て、大舉して西伐す。中納言、本多廣孝を遣して師を勞はしむ。師、岩石城を攻む。廣孝力戦して賞を受く。七月、秀吉、九州を定めて還る。中納言、大坂に赴きて之を賀す。八月、大納言に轉じ、從二位に進む。乃ち還る。十二月、左近衛大將、左馬寮御監を兼ね。十六年二月、兩職を辭す。三月、大納言、京師に朝す。秀康、西征に従ひて功有るを以て、左近衛少將に進む。我が諸臣、任を遷さるゝもの多し。四月、後陽成天皇、聚樂に幸す。大納言、内大臣信雄等と先驅たり。關白秀吉後乘たり。秀吉、大納言以下の盟辭を要す。特に大納言と、信雄・秀長・秀次及び浮田秀家とに、詔して、清華の上に班す。禮畢りて東に還る。

- 大軍をひきかみて
- 驅勢せしむ
- 先驅をなす
- 五攝家に次ぐ家柄にして三公に任ぜらるべき家筋列す

十六年二月。辭兩職。三月。大納言朝京師。秀康以下從西征。有功。進左近衛少將。我諸臣多遷任者。四月。後陽成天皇幸聚樂。大納言與內大臣信雄等爲先驅。關白秀吉爲後乘。秀吉要大納言以下盟辭。特詔大納言。與信雄秀長秀次及浮田秀家。班清華之上。禮畢東還。

是に於て、秀吉、北條氏未だ至らざるを以て、乃ち使を遣して其不庭を責む。北條氏遷延し、意に婚及び質を得ること徳川氏の如きを欲す。而して秀吉意に加へず。閏五月、氏政の使來り、我に因りて和を請ふ。六月、大廳、疾有り。大納言、夫人と京師に赴きて、之を問ふ。九月、夫人を留めて還る。十一月、酒井忠次致仕を請ふ。大納言、優旨もて之に答ふ。固く請ふ。乃ち其第に蒞み、驢を盡して日を竟ふ。其子家次をして封を襲かしむ。是の歲、陸奥の伊達氏來りて好を通ず。

- 來朝せざるを
- 心にかかげず
- 仕官を辭す

於て是秀吉以北條氏未至。乃遣使責其不庭。北條氏遷延。意欲得婚及質。如徳川氏。而秀吉不加於意。閏五月。氏政使來。因我請知。六月。大廳有疾。大納言與夫人。赴京師。問之。九月。留夫人。而還。十一月。酒井忠次請致仕。大納言優旨答之。固請。乃蒞其第。盡驢。

竟日。使其子家次襲封。是歲。陸奥伊達氏來通好。

十七年正月。眞田昌幸。以子信幸。質於我。是月。大納言。見寺。有一兒。捧茗而出。問其名。僧曰。甲斐人士。屋惣藏之孤也。惣藏事武田氏。死於天目山之難。大納言喜得。其胤也。載歸。謂世子曰。吾與汝。以一口護身刀。拉兒附之。後賜名忠直。常侍世子。

十七年正月、眞田昌幸、子信幸を以て我に質とす。是の月、大納言、中泉に獵し、清見寺に息ふ。一兒有り、茗を捧けて出づ。其名を問ふ、僧曰く、甲斐の人、土屋惣藏の孤なりと。惣藏は武田氏に事へ、天目山の難に死す。大納言其胤を得るを喜ぶ。載せて歸り、世子に謂ひて曰く、吾れ汝に與ふるに、一口の護身刀を以てすと。兒を拉して之に附す。後に名を忠直と賜ふ。常に世子に侍す。

● 土屋惣藏の子孫 ● 時をまもる刀

時少將秀康在京師。益長有英氣。嘗習騎。秀吉牙騎失禮。秀康馳

時に少將秀康、京師に在り。益々長じて英氣有り。嘗て騎を習ふ。秀吉の牙騎禮を失ふ。秀康馳せて之を斬る。秀吉問はず。是の時關東の諸豪、往往我に因りて降る。結城晴朝も亦降る。豊臣氏の族を得て子と爲さんと請ふ。秀吉乃ち秀康

を遣る。三月、大納言、京師に如く。兩月にして還る。

● 了げれたる氣象 ● 麾下の騎士

斬之。秀吉不問。是時。關東諸豪往往因我降。結城晴朝亦降。請得豊臣氏族爲子。秀吉乃遣秀康。三月。大納言如京師。兩月而還。先是北條氏政。請得我。地沼田。而後入朝。秀吉不憚。曰。吾欲伐北條氏。以三其爲。德川姻戚。姑假之耳。七月。秀吉發三使來請。大納言乃使人諭眞田昌幸。致沼田。而就內。地。償之。因謀氏政。以順逆。

是より先、北條氏政、我が侵地沼田を得て而る後に入朝せんと請ふ。秀吉憚ばずして曰く、吾れ北條氏を伐たんと欲す。其の徳川の姻戚たるを以て、姑く之を假すのみと。七月、秀吉三使を發して來り請ふ。大納言乃ち人をして眞田昌幸に諭して沼田を致さしめて、内地に就きて之を償ひ、因りて氏政に説くに順逆を以てして、其入朝を勸む。亦伊達政宗に勸む。沼田の守將も亦其傍地を侵す。十二月、大納言、大坂に如く。秀吉入朝して、東伐を請ふ。詔して、之を許す。大納言を以て前軍と爲す。秀吉、諸將に謂ひて曰く、家康は前軍と爲り、秀吉は後繼と爲る。萬國を横行すと雖も可なり。況や北條氏に於てをやと。大納言をして國に還りて兵を治めしむ。

勸其入朝。亦勸伊達政宗。皆不聽。沼田守將亦侵其傍地。十二月大納言如大坂。秀吉入朝。請東伐。詔許之。以大納言爲前軍。秀吉謂諸將曰。家康爲前軍。秀吉爲後繼。雖三橫行萬國。可也。況於北條氏乎。令大納言還國治兵。

十八年正月。夫人病。卒于京師。以東事興。祕不發喪。大納言遣世子如京師。井伊直政內藤正成等從。至聚樂。秀吉喜。迎曰。佳兒也。執其手入內。使夫人淺野氏結其髮。更十八年正月。夫人病。卒于京師。以東事興。祕不發喪。大納言遣世子如京師。井伊直政內藤正成等從。至聚樂。秀吉喜。迎曰。佳兒也。執其手入內。使夫人淺野氏結其髮。更

十八年正月、夫人病みて、京師に卒す。東事興るを以て、祕して喪を發せず。大納言、世子を遣して京師に如かしむ。井伊直政・内藤正成等從ひて、聚樂に至る。秀吉喜び迎へて曰く、佳兒なりと。其手を執りて内に入り、夫人淺野氏をして、其髮を結び衣袴を更へしめ、親ら金飾刀を取りて之を帶びしむ。攜へ出で、直政に謂ひて曰く、野様を變じて京様と爲す。大納言之を見て必ず驚喜せん。大納言は朴實なり。其の幼兒を送るは、蓋し北條と姻あるを以て、故に此を以て質に擬するならん。吾れ豈に疑ふ所あらんや。宜しく速かに護し去るべしと。世子還り至る。大納言曰く、秀吉、我が兒を留めざるは、是れ我が諸城を借

- 上きこ
- 黄金を以て飾りたる刀
- 田舎のなりゆり
- 都の風俗となす
- まじめ
- 浮出
- 駿河國に在り

衣袴。親取金飾刀。帶之。攜出。謂直政曰。變野様爲京様。大納言見之。必驚喜。大納言朴實。其送幼兒。蓋以下與北條。有姻。故以此擬質也。吾豈有所疑哉。宜速護去。世子還至。大納言曰。秀吉。不留我兒。是欲借我諸城也。乃命本多重次。本多正信。掃除海道諸城。命伊奈忠次。造浮梁于富士河。居三日。秀吉使者至。果如其言。二月。大納言發兵二萬五千。警師而發。軍于長窪。三月。秀吉發京師。入岡崎。本多重次留守焉。不取出迎。秀吉召見之。重次曰。非我君。何謂爲。辭不入。

らんと欲すればなりと。乃ち本多重次・本多正信に命じて、海道の諸城を掃除し、伊奈忠次に命じて、浮梁を富士河に造らしむ。居ること三日にして、秀吉の使者至る。果して其言の如し。二月、大納言、兵二萬五千を發し、師に誓ひて發し、窪に軍す。三月、秀吉、京師を發し、岡崎に入る。本多重次、留守す。敢て出で迎へず。秀吉、召して之を見る。重次曰く、我が君に非ず。何ぞ謂するを爲さんと。辭して入らず。

秀吉至吉田。

秀吉、吉田に至る。伊奈忠次曰く、天雨ふり河漲る。請ふ、霧るゝを待ちて

伊奈忠次曰。天雨河漲。請待霽而行。秀吉曰。吾聞。兵行臨水。宜亟涉。不則後者病焉。對曰。是所三以行。大衆耳。以行。大衆則溺矣。秀吉從之。留三日。至駿府。將入。石田三成。耳語曰。聞。德川與北條。通謀。勿入。秀吉猶豫。彈正少弼。諫。浮言。勿信。乃入。三成。自童年。以三面首。承寵。及長。慧巧。過人。秀吉。以爲。奉行。任治部少輔。與少弼。同僚。自是。寔有。豐隙。

大納言聞秀吉

行かんと。秀吉曰く、吾れ聞く、兵行に水に臨まば、宜しく亟かに渉るべし。不らば則ち後者病まんと。對へて曰く、是れ寡兵を行る所以のみ。以て大衆を行らば則ち溺れんと。秀吉之に従ふ。留ること三日なり。駿府に至りて、將に入らんとす。石田三成耳語して曰く、德川、北條と謀を通すと聞く。入る勿れと。秀吉、猶豫す。彈正少弼、浮言信する勿れと諫む。乃ち入る。三成童年より而首を以て寵を承け、長ずるに及びて、慧巧人に過ぐ。秀吉以て奉行と爲す。治部少輔に任ぜらる。少弼と同僚なり。是より寔々豐隙あり。

- 後より来る者難儀せん
- みづうち
- ためらふ
- 容貌よきを以て愛せらる
- さときこと
- 同僚
- 不和

大納言、秀吉の至るを聞き、兵を留めて來り會す。上國の諸將と皆其次に在り。

吉至。留兵而來會。與上國諸將。皆在其次。本多重次。以事來謁。自後罵曰。咄。主公爲此大怪事。主於國者。豈有空其城。假人哉。如是則人或欲借之手。且罵且出。諸將相視而噫。大納言謂諸將曰。彼本多重次者。僕舊臣也。自僕幼時。從而百戰。僕亦愛之也。然天質頑縱。及老益甚。今於樹人中。誦僕如此。諸公可三以想其平時矣。衆謝曰。聞此老之名久矣。今乃得見。有臣如此。真可倚賴。

本多重次事を以て來謁し、後より罵りて曰く、咄、主公、此大怪事を爲す。國に主たる者、豈に其城を空しくして人に假すんあらんや。是の如くば則ち人或は夫人を借らんと欲するも、亦之を許すかと。且つ罵り且つ出づ。諸將相視て噫す。大納言諸將に謂ひて曰く、彼れ本多重次は、僕の舊臣なり。僕の幼時より、從ひて百戦す。僕も亦之を愛感するなり。然れども天質頑縱なり。老に及びて益々甚だし。今、樹人中に於て、僕を誦ること此の如し。諸公以て其平時を想ふ可しと。衆謝して曰く、此老の名を聞くこと久し。今乃ち見るを得たり。臣あること此の如し。真に倚賴すべしと。

- 大なる怪からぬ行爲をなす
- 互ひに面を見合ひて笑ふ
- かたくなにして氣まゝなり
- 老年に及びて益々ひどし
- 多人數の中にて
- 平生の事を想像す可し
- 上り臣のあること此の如し直にたよりとす可し

已而大納言復至其軍。秀吉至沼津。二十八日親巡敵寨。就我營。諸將皆說我曰。氏政父子。擁二數萬精甲。而不出戰。是欲誘我於險。而四襲之上也。卿以為如何。大納言對曰。以某觀之。是畏我焉。爾。今宜為三軍。一攻葦山。一攻山中。彼或來援。則以一軍遊擊之。

已にして大納言、復た其軍に至り、秀吉、沼津に至る。二十八日、親ら敵寨を巡り、我が營に就きて諮ひて曰く、諸將皆我に説きて曰く、氏政父子、數萬の精甲を擁して出で戦はず。是れ我を險に誘ひて之を四襲せんと欲するなりと。卿以て何如と爲すと。大納言對へて曰く、某を以て之を觀るに、是れ我を畏るゝのみ。今宜しく三軍と爲し、一は葦山を攻め、一は山中を攻め、彼れ或は來り援はば、則ち一軍を以て邀へて之を撃つべしと。秀吉曰く、彼れ果して來らば、卿を煩して邀撃せんと。對へて曰く、諾。某嘗て一萬に將として、彼の四萬と、甲斐・信濃に戦ふ。十合して九勝す。固より與し易きのみ。然りと雖も、今彼れ險に據りて死を決す。某若し利あらずば、公、幸に之に繼げと。秀吉曰く、諾。是れ必勝の計なり。然りと雖も、彼れ敢て出でずんば、則ち奚を爲さんと。曰く、二城必ず一を取り、某則ち手軍を以て、古道より酒勾驛に出で、早川に陣して、以て八州の援路を扼し、而して公は、大軍を以て直に小田原を撞かば、敵必ず支ふる

秀吉曰。彼果來。煩卿遊擊。對曰。諾。某嘗將一萬。與彼之四萬。戰於甲斐。信濃。十合。九勝。固易與耳。雖然。今彼據險。決死。某若不。利。公幸繼之。秀吉曰。諾。是必勝之計也。雖然。彼不敢出。則奚援路。而公以大軍直撞小田原。敵必不能支焉。曰。酒勾之道。得無二城。寨乎。曰。有。應集足柄新莊三城。曰。何。以踰之。曰。彼不能守也。武田信玄嘗以二萬入小田原。如行無人之地。今兵什二倍。信玄其不能守必矣。曰。焉知無二將拒我者乎。曰。能然。我所欲也。某當攻而滅之。

能はざらんと。曰く、酒勾の道、城寨なきを得んやと。曰く、應集・足柄・新莊の三城ありと。曰く、何を以て之を踰えんと。曰く、彼れ守る能はざるなり。武田信玄、嘗て二萬を以て小田原に入る。無人の地を行くが如し。今、兵、信玄に什倍す。其の守る能はざること必せりと。曰く、焉んぞ二將の我を拒ぐ者なきを知らんやと。曰く、能く然らば、我が欲する所なり。某當に攻めて之を殲すべしと。

● 敵のとりて ● 精兵 ● 相手にし易し ● 葦山と山中 ● 三城共に相隣りに在リ ● 人無き處を通行するが如し ● 關強の將

秀吉乃ち其軍に還り、夜、令を發して、且日二城を攻む。豊臣秀次、中村一氏、

軍夜發令。且日攻二城。豐臣秀次中村一氏攻拔山中。北條氏不出。大納言則以別軍出古康。松平康重本多忠勝等爲先鋒。攻鷹巢。陷之。足柄城潰。進攻新莊。守將拒戰。不克而走。秀吉繼至。與諸將相見于湯本。出戰。抱三領。使其大納言取其一。且使以下其一一授甲秀

攻めて山中を抜く。北條氏出でず。大納言則ち別軍を以て古道に出づ。松平康重・本多忠勝等、先鋒たり。鷹巢を攻めて之を陷る。足柄城潰ゆ。進みて新莊を攻む。守將拒ぎ戦ひ、克たずして走る。秀吉繼ぎて至り、諸將と湯本に相見る。戰袍三領を出し、大納言をして其一を取らしむ。且つ其一を以て秀次に授けしむ。因りて秀次を戒めて曰く、汝宜しく徳川を學ぶべきなりと。又大納言をして世子を駿府より召さしめ、秀吉自ら甲を取りて之を被せて曰く、宜しく我に頼すべきなりと。自ら其偏名を取り、名づけて秀忠と曰ふ。秀吉蓋し事勢未だ定らざるを以て、務めて我に結納するなり。四月、松平康重等、宮城野を攻めて、之を破る。湯本・竹浦解きて走る。三日、大納言諸軍に先だちて、酒匂に至る。城中豊怖す。我が兵復た衢路に伏し、敵の援兵を要撃して、俘斬する所多し。秀吉、大に喜びて、我に、事平がば盡く北條氏の地を領せしむるを約す。

●陣羽織 ●似る ●名の一字 ●おもしろ ●俘斬と斬首と

次。因戒秀次曰。汝宜學徳川也。又使大納言召三世子於駿府。秀吉自取甲被之。曰。宜類我也。自取其偏名。名曰秀忠。秀吉蓋以二事勢未定。務結納我也。四月。松平康重等攻宮城野。破之。湯本竹浦解走。三日。大納言先諸軍。至於酒匂。城中豊怖。我兵復伏衢路。要擊敵。援兵多。所俘斬。秀吉大喜。約我事平盡領北條氏地。

我將松平康國。鳥居元忠。平岩親吉。助前田上杉氏。入上野武藏。下諸城。本多忠勝。酒井家次等。助淺野木村氏。會前三將。徇上總。下總。還入武藏。攻岩築。陷之。本多忠勝之子忠政。手斬首級。城兵就

我が將松平康國・鳥居元忠・平岩親吉、前田・上杉氏を助けて、上野武藏に入り、諸城を下す。本多忠勝・酒井家次等、淺野・木村氏を助けて、前の三將に會し、上總・下總を徇へ、還りて武藏に入り、岩築を攻めて、之を陷る。本多忠勝の子忠政、手づから首級を斬る。城兵、元忠に就きて降る。五月、康國總社に次し、降將の賤す所と爲る。弟康貞、手づから十餘人を斬りて之を定む。大納言、康貞を以て嗣と爲す。是の月、小田原の城兵、夜出でて、蒲生氏の陣を襲ひ、轉じて我が陣に赴く。陣堅くして動かす。乃ち收めて入る。六月、大納言、伊達政宗を召して來り見えしむ。

●くび ●上野國に在り

元忠降。五月。康國次總社。爲降將所殺。弟康貞手斬二十餘人。定之。大納言以康貞爲嗣。是月。小田原城兵夜出。襲蒲生氏陣。轉赴我陣。陣堅不動。乃收入。六月。大納言召伊達政宗。使來見。

甘索城主北條氏勝初守山中。敗保其邑。秀吉遣黑田孝高。說降之。弗聽。大納言使二本多忠勝諭之。乃降。

甘索城主北條氏勝、初め山中を守り、敗れて其邑を保つ。秀吉、黒田孝高を遣して、説きて之を降す。聽かず。大納言、木多忠勝をして之を諭さしむ。乃ち降る。江戸城主遠山景佐、初め新莊を守り、我が兵の敗る所と爲り、走りて小田原に入る。其弟川村兵部、其姪遠山丹波、眞田信尹と、處りて江戸を守る。丹波・信尹、款を我に納る。大納言、兵を遣して、兵部を逐ひて其城を取る。

相模川に在り 好を誦す

江戶城主遠山景佐初守新莊。爲我兵所敗。走入小田原。其弟川村兵部。其姪遠山丹波。與眞田信尹處守江戶。丹波信尹納款於我。大納言遣兵。逐兵部。取其城。

石田三成。大谷吉隆。攻館林。不拔。氏勝

石田三成、大谷吉隆、館林を攻む。拔けず。氏勝、城兵を諭す。乃ち降る。三成等轉じて忍城を攻む。彈正少弼、助け攻め、將に諭して之を降さんとす。三成

論城兵。乃降。三成等轉攻。忍城。彈正少弼助攻。將諭降之。三成忌其多功。給曰。城兵已有內應者。請分陣攻之。城兵怒而戰。三成曰。內應敗矣。遂引水灌之。不得地利。而罷。

其の功多きを忌み、給きて曰く、城兵已に内應するもの有り。請ふ、陣を分ちて之を攻めんと。城兵怒りて戰ふ。三成曰く、内應敗れたり。遂に水を引きて之に灌ぐ。地利を得ずして罷む。

上野國に在り うちざり 城上のかき

前田上杉氏。降附萬餘。來謁。秀吉不賞。曰。彼無血刃之功。或屠之。或降之。可也。西將加藤嘉明竊言曰。是豈主天下者言乎。二將遂攻居八王子。守將中山家範。狩野一菴等死之。大納言索一菴子主膳。家範二子昭守

前田・上杉氏、降附萬餘を以て來り謁す。秀吉賞せずして曰く、彼れ血刃の功なし。或は之を屠り、或は之を降す、可なりと。西將加藤嘉明竊かに言ひて曰く、是れ豈に天下に主たる者の言ならんやと。二將遂に攻めて八王子を屠る。守將中山家範・狩野一菴等、之に死す。大納言、一菴の子主膳、家範の二子昭守・信吉を索めて、之に祿す。

降參せるもの 攻戰の功なし 扶持を與ふ

遂攻居八王子。守將中山家範。狩野一菴等死之。大納言索一菴子主膳。家範二子昭守

信吉。録之。

時小田原固守數月。兩軍禁戰。徒以弓銃相挑。先是。我軍徙于築地。鑿地道入城。未達。井伊氏營前有敵別堡。一橋通城。城兵時出。戍堡。直政私計。以部下子弟襲之。會暴雨。地道壞。城樓崩陷。直政設伏壘外。而進攻。輒取堡。直政至橋。自

時に小田原、固守すること數月なり。兩軍戰を禁じ、徒に弓銃を以て相挑む。是より先、我が軍、築地に徙り、地道を鑿ちて城に入らんとす。未だ達せず。井伊氏の營前に敵の別堡あり。一橋、城に通ず。城兵時に出でて堡を成る。直政私かに計り、部下の子弟を以て之を襲ふ。暴雨に會し、地道壞れ、城樓崩陷す。直政、伏を壘外に設けて進み攻め、輒ち堡を取る。直政橋に至りて、自ら銃を發す。銃、炸して手を傷く。進みて已まず。士卒力戦し、斬首四百なり。火を城に縱つ。城兵益々出づ。而して我が兵繼ぐなし。乃ち兵を收めて卻く。城兵追躡し、伏に遇ひて敗れ還る。我が中軍、火を望みて愕く。松平家忠曰く、少年輩、雨に乗じて城に入るのみと。捷聞至る。秀吉、大に喜びて、之を賞す。是の役に城中の首級を得しは、是を始と爲す。

● 相互に取ひをしかく ● 陣前 ● 本城の外のとりにて ● くづれちちいる ● 裂けて ● 戦捷のしら

發銃。銃炸傷手。進而不已。士卒力戰。斬首四百。縱火于城。城兵益出。而我兵無繼。乃收兵。卻。城兵追躡。遇伏。敗還。我中軍望火而愕。松平家忠曰。少年輩乘雨入城耳。捷聞至。秀吉大喜。賞之。是役得城中首級。是爲始也。

織田信雄、及び西將數人、葦山を攻めて、數々利あらず。大納言、小笠原廣勝を遣して之を視しむ。廣勝、諸將の返鏡を怒り、自ら進みて其門を奪ふ。繼々して死す。七月、大納言又内藤信成を遣し、城將北條氏規を諭して、之を降す。

● とゞまりて進まざるを怒り ● 後詰

將返鏡。自進奪其門。無繼而死。七月。大納言又遣内藤信成。諭城將北條氏規。降之。

五日。氏直遂出。就我營。乞降。致城。大納言遣井伊本多、神原三將。與西將二人。

五日、氏直遂に出で、我が營に就きて、降を乞ひて城を致す。大納言、井伊・本多・神原の三將を遣し、西將二人と、入りて城を受け、嚴に抄掠を禁じ、盡く氏政以下を出す。我が叛將、小笠原長忠、斐より亡げ、小田原に依る。是に於て、執へて之を誅す。十日、大納言城に入る。其明、氏政、自殺す。秀吉は四使

入受城。嚴禁抄掠。盡出二氏政以下。我叛將小笠原長忠自甲斐亡。

を遣し、大納言は榊原康政を遣して蒞ましむ。氏直を高野に縦ち、厚く之に給す。

依小田原。於是執誅之。十日。大納言入城。其明。氏政自殺。秀吉遣四使。大納言遣榊原康政蒞焉。縱二氏直高野。厚給之。

● 探めとること ● もむきたる大將 ● 翌日

德川氏於是領關東八國。近江地九萬石。爲朝宿色。海道地萬石。爲田獵邑。凡二百五十五萬七千石。秀吉害我國。逼京畿。而人心固結。日久也。乃乘事徙之。

德川氏、是に於て、關東八國を領す。近江の地九萬石を朝宿の邑と爲し、海道の地萬石を田獵の邑と爲す。凡て二百五十五萬七千石。秀吉、我が國の京畿に逼りて、人心の固結すること日久しきを害とするや、乃ち事に乘じて之を徙し、八國の名を以て其心を厭かす。其實は武藏・相摸・伊豆・上總・下總・上野の六州のみ。安房に里見氏有り。下野に宇都宮氏有り。其他、結城・佐野・皆川の諸族方隅に割據する者頗る多し。而して北條氏の餘黨、所在に潛伏し、兵燹の餘、城邑、荒廢す。乃ち我を趣して徙り居らしむ。而して駿河・甲斐・信濃・近江・參河

以八國之名。厭其心。其實武藏相摸伊豆上總下總

を以て、親臣宿將に割予し、織田信雄を放ちて、尾張・伊勢を奪ひ、之を甥秀次に予へて、以て我を拒塞す。

● 入朝の際宿泊の用を便する領地 ● 殿をすする時の費用を便する領地 ● 四方の隅にたてこもる者 ● 火 ● 荒れたる

見氏。下野有。宇都宮氏。其他結城佐野皆川諸族。割據方隅者頗多。而北條氏餘黨所在潛伏。兵燹之餘。城邑荒廢。乃趣我使徙居焉。而以駿河甲斐信濃遠江參河。割予於親臣宿將。放織田信雄。奪尾張伊勢。予之於甥秀次。以拒塞我。

陸奥會津。葦名氏故國也。爲伊達氏所侵。請復之。秀吉不許。予之於蒲生氏郷。以鎮壓我。五國士民大失。

陸奥の會津は、葦名氏の故國なり。伊達氏の侵す所と爲る。之を復せんと請ふ。秀吉許さず。之を蒲生氏郷に予へて、以て我を鎮壓す。五國の士民、大に望を失ひ、諸將も亦怏怏として樂しません。關八州も亦我が宗の故國にして、古より武を用ふるの地と稱す。士を養ひ民を撫して、以て天下の變を觀るに足ると。乃ち兵を發して四出し、諸の城邑の未だ服せざる者を伐ち、盡

望。諸將亦快。不樂。大納言曰。可也。關八州亦我宗。故國。自古稱。川武之地。養士。撫民。足以觀。天下之變。一矣。乃發兵。四出。伐諸城邑。未服者。盡定之。遂相地。建都。將士以爲。非小田原。則鎌倉也。大納言乃與秀吉議。營于江戶。八月朔。振旅入焉。

く之を定む。遂に地を相して都を建つ。將士以爲へらく、小田原に非ずんば則ち鎌倉ならんと。大納言乃ち秀吉と議して、江戸に營し、八月朔、振旅して入る。

即ち功を論じて地を分ち、武藏の忍を松平家忠に、其私部を松平康重に、其岩築を高力清長に、其東方を松平康長に、其松山を松平家廣に、其羽生を大久保忠隣に、其河越を酒井重忠に、其本莊を小笠原信嶺に、其八幡山を松平清宗に、相摸の小田原を大久保忠世に、其甘索を本多正信に、伊豆の韮山を内藤信成に、下總の矢造を鳥居元忠に、其古河を小笠原秀政に、其關宿を松平康元に、其相馬を土岐定政に、其蘆戸を木曾義就に、上總の緒瀧を本多康勝に、其久留里を大須賀

即論功分地。賜武藏忍于松平家忠。其私部于松平康重。其岩築于高力清長。其東方于松平康長。其松山于松平家廣。其羽生于大久保忠隣。其河越于酒井重忠。其本莊于小笠原信嶺。其八幡山于松平清宗。相摸于小田原。下總于鳥居元忠。其古河于小笠原秀政。其關宿于松平康元。其相馬于土岐定政。其蘆戸于木曾義就。上總緒瀧于本多康勝。其久留里于石川康通。其

即ち功を論じて地を分ち、武藏の忍を松平家忠に、其私部を松平康重に、其岩築を高力清長に、其東方を松平康長に、其松山を松平家廣に、其羽生を大久保忠隣に、其河越を酒井重忠に、其本莊を小笠原信嶺に、其八幡山を松平清宗に、相摸の小田原を大久保忠世に、其甘索を本多正信に、伊豆の韮山を内藤信成に、下總の矢造を鳥居元忠に、其古河を小笠原秀政に、其關宿を松平康元に、其相馬を土岐定政に、其蘆戸を木曾義就に、上總の緒瀧を本多康勝に、其久留里を大須賀

大久保忠隣。其河越于酒井重忠。其本莊于小笠原信嶺。其八幡山于松平清宗。相摸于小田原。下總于鳥居元忠。其古河于小笠原秀政。其關宿于松平康元。其相馬于土岐定政。其蘆戸于木曾義就。上總緒瀧于本多康勝。其久留里于石川康通。其

忠正に、其鳴渡を石川康通に、其佐貫を内藤家長に、上野の碓氷を酒井家次に、其厩橋を平岩親吉に、其大胡を牧野康成に、其吉井を菅沼定益に、其那波を松平家乘に、其宮崎を奥平信昌に、其藤岡を松平康貞に、其白井を本多廣孝に、其館林を榊原康政に、其箕輪を井伊直政に賜ふ。直政・康政・忠勝は皆十萬石を食み、忠世・元忠・康元は四萬石を食む。其餘は差あり。内外の士人を總べ、分ちて五隊と爲し、直政・忠勝・康政・康通・親吉を以て之を領せしめ、京師に更番す。北條・三浦・木曾・保科・久能・岡部の諸族に皆封邑を給し、乃ち促して封に就かしむ。吏に命じて遠近輕重を度りて、以て資用を給す。衆皆其遷徙の勞を忘る。十月、使を京師に遣し、五州の地を致す。秀吉、其神速に服す。

交代に更番す。領國に赴かしむ。道路の遠近身分の重い輕いをはかして費用を支給す。赴任の勞を忘る。非常に早きこと。

其相馬于土岐定政。其蘆戸于木曾義就。上總緒瀧于本多康勝。其久留里于石川康通。其

佐貫于内藤家長。上野碓冰于酒井家次。其廢橋于平岩親吉。其大胡子牧野康成。其吉井于菅沼定利。其阿布于菅沼定盈。其那波于松平家乘。其宮崎于奥平信昌。其藤岡于松平康貞。其白井于本多廣孝。其館林于榊原康政。其箕輪于井伊直政。直政忠勝皆食十萬石。忠勝元食四萬石。其餘有差。總内外士人。分爲五隊。以直政忠勝康政康通親吉領之。更番京師。北條三浦木曾保科久能岡部諸族。皆給封邑。乃促就封焉。命吏度遠近輕重。以給資用。衆皆忘其遷徙之勞。十月。遣使京師。致五州地。秀吉服其神速。

江戸之地。東帶隅田川。南控海灣。西北接武藏野。上杉氏將太田道灌者始城之。而平衍沮洳。蘆葦叢生。城郭隘陋。至川船板爲階。本多正信白曰。是不可以

江戸の地は、東は隅田川を帯び、南は海灣を控へ、西北は武藏野に接す。上杉氏の將太田道灌といふ者、始めて之を城く。而して平衍沮洳、蘆葦叢生し、城郭隘陋、板を用ひて階と爲すに至る。本多正信白して曰く、是れ以て外賓に視す可からず。請ふ之を更へんと。大納言晒ひて曰く、汝乃ち此婦女の兒を執るか。土木の事、徐に之を議せんのみと。乃ち地勢に因りて、士民を區處し、大番士に賜ふに、西北の地を以てす。高きを鑿り卑きを填めて、以て第宅を置く。東南に渠を鑿ちて淤を疏し、泥土を糞き、街市を起して、以て運漕の道を通ず。復た板倉

勝重を以て奉行と爲し、諸の制度盡く北條氏の舊に因り、而して其煩苛の者を除く。國內大に服す。

● 土地平坦にして卑濕なること ● あしが羣りて ● 船板を以て階段となす ● 他國の賓客には見せられぬ ● 婦人の如き見識を有するか ● 工半の事はゆる／＼相談するばかりなり ● 一區々々比區ぎりをとらしめ ● 溝をはりて泥土を運せしめよ ● こま／＼とし／＼やかましきことを止めよ

視外賓。請更之。大納言晒曰。汝乃執此婦女之兒乎。徐議之耳。乃因地勢。區處士民。賜大番士。以西北地。鑿高填卑。以置第宅。東南鑿渠疏淤。釐泥土。起街市。以通運漕之道。復以板倉勝重爲奉行。諸制度盡因北條氏之舊。而除其煩苛者。國內大服。

秀吉の東下するや、人有り佐藤忠信の曹を獻す。曰く、今日之を被るに當る者は、本多忠勝なりと。乃ち之を忠勝に賜ふ。忠勝の長子忠政、其父に謂ひて曰く、忠信は、源九郎の從僕のみ。大人、徳川氏の將領を以て其曹を被りて、以て榮となすか。亟かに之を還せと。

● 忠信の曹を被るに適當する者 ● 家來 ● 名譽となすか

秀吉之東下。有人獻佐藤忠信曹。曰。今日當被之者。本多忠勝也。乃賜之忠勝。忠勝長子忠政。忠政謂其父曰。忠信源九郎從僕耳。大人以徳川氏將領而被其曹。以爲榮乎。亟還之。

秀吉之西還するや、木多重次の無禮を衒み、我に諷して之を罰せしむ。大納言已むを得ず、之を上總の小原に置き、潛かに三千石を給して、時に人をして之を慰問せしむ。尋ぎて病みて卒す。是の月、陸奥・出羽の寇起る。伊達氏、陰かに之を助く。蒲生氏郷等、來りて援を我に乞ふ。彈正少弼、西還して、途に變を聞きて亦來り乞ふ。乃ち結城秀康、榊原康政を遣して、之に赴かしむ。十二月、秀吉、甥秀次を遣して東伐し、石田三成をして來りて親出を請はしむ。

● 心中に恨みに思ひ ● 遣還しに言ひて ● 訪問せしめて慰む ● 自身出陣

秀吉遣甥秀次東伐。使石田三成來請親出。

是の歲、世子、從四位下に敘し、侍從に任ぜらる。秀康、封を襲ぎて十萬石を食む。忠吉、從五位下に敘し、下野守に任ぜらる。信吉、下總の小金に封ぜられ、三萬石を食む。故の世子信康の女を以て小笠原秀政に妻はす。秀政は、貞慶の子なり。

子なり。

● 領す

位下。任下野守。信吉封下總小金。食三萬石。以故世子信康女妻小笠原秀政。秀政。貞慶子也。

十九年正月、八國の將士、皆正を江戸に賀す。大納言、親ら出でて岩築に至り、亂平ぐと聞きて乃ち還る。伊達氏に勸めて入謝せしむ。閏月、京師に如く。二月、天子、之に御香を賜ひ、勅して、入朝して花を禁園に觀しむ。三月、東に歸る。五月、陸奥復た亂る。六月、秀吉復た人をして來りて東北の諸將を節度せんこと請はしむ。七月、親征す。井伊・木多・榊原、各一軍に將として従ふ。八月、岩手に軍し、九月、盡く陸奥を定め、十月、江戸に還る。

● 新年 ● 來りて謝せしむ ● 皇宮の苑 ● 朝服せん

十九年正月。八國將士皆賀正。于江戸。大納言親出。至岩築。聞亂。平。乃還。勸伊達氏入謝。閏二月。如京師。二月。天子賜之御香。勅入朝。觀花禁園。三月。東歸。五月。陸奥復亂。六月。秀吉復使人來請節度東北諸將。七月。親征。井伊木多榊原各將一軍。從焉。八月。軍于岩手。九月。盡定陸奥。十月。還江戸。

最上義光世主出羽山形。通於織田豐臣氏。大納言楓爲說其名。家使善遇之。義光深德之。於是請以其次子臣我。乃賜名家親。屬之侍從。是月侍從轉左近衛少將。兼武藏守。尋遷右近衛中將。

最上義光世、出羽の山形に主たり。織田・豊臣氏に通す。大納言、楓ち爲に其名家なるを説き、善く之を遇せしむ。義光、深く之を徳とす。是に於て、其次子を以て我に臣とせんと請ふ。乃ち名を家親と賜ひ、之を侍從に屬せしむ。是の月、侍從、左近衛少將に轉じ、武藏守を兼ね、尋きて右近衛中將に遷る。

● 名高き家柄 ● 待遇せしむ ● 恩とす

於海内盡定。將休息於無爲。而秀吉汰修事。諸輕銳小人承旨進說。會其愛兒死。欲用兵朝鮮。以自遣。浮田秀家首懲之。乃

是に於て、海内盡く定り、將に無爲に休息せんとす。而して秀吉、汰修事を喜ぶ。諸の輕銳の小人、旨を承けて進説す。其愛兒の死するに會ひ、兵を朝鮮に用ひて以て自遣せんと欲す。浮田秀家首として之を懲懲す。乃ち關白職を秀次に讓り、自ら太閤と稱し、行營を肥前に建て、人をして來りて我に告げしめて、來會せしむ。木を伊豆に伐りて、以て舟艦を造る。海内騷然たり。諸將皆心に其非を知れども、敢て匡拂する莫し。十一月、中將、參議に陞り、前職を帶す。

● 天下儘く平定す ● 奢侈 ● 輕々しくさかし ● 氣に入ることを進み説く ● 氣をはらす ● ナ、
● さわがし ● ためたす

讓關白職于秀次。自稱太閤。建行營于肥前。使人來告我。令來會焉。伐木伊豆。以造舟艦。海內騷然。諸將皆心知其非。莫敢匡拂。十一月、中將陞參議。帶前職。

文祿元年二月、大納言、榊原康政に命じ、參議を輔けて處守せしめ、而して自ら兵萬五千に將として西行し、伊達・佐竹・南部・最上の諸將を率ゐて、肥前に會す。是の月、松平家忠を下總の小美川に徙し、忍を以て下野守忠吉を封す。三月、五郎信吉を下總の佐倉に徙し、各々十萬石を食ましむ。尋きて外孫奥平忠明を上野の小幡に封す。四月、浮田秀家等、兵を將ゐて朝鮮に入る。七月、大納言遙かに松平家忠に命じて、江戸城を修拓せしむ。

● 後關成天皇の年號 ● 留守番 ● 他家に嫁入りたる姫の子

文祿元年。二月。大納言命。榊原康政。輔參議處守。而自將兵萬五千。行。率伊達。佐竹。南部。最上諸將。會于肥前。是月。徙松平家忠。于下總小美川。以忍封。下野守忠吉。三月。徙五郎信吉。于下總佐倉。各食十萬石。尋封外孫奥平忠明。于上野小幡。

四月。浮田秀家等將兵入朝鮮。七月。大納言遣命松平家忠修拓江戸城。

參議如京師。九月。參議遷中納言。進從三位。十二月。還江戸。先是。京師備人備原肅忤秀吉。避之肥前。豐臣秀秋與之有故。迎客之。大納言聞其名。時延之幕中。諮詢古道。二年。三月。江戸土功告竣。

參議、京師に如く。九月、參議、中納言に遷り、從三位に進む。十二月、江戸に還る。是より先、京師の儒人藤原肅、秀吉に忤ひ、之を肥前に避く。豐臣秀秋之と故有り。迎へて之を客とす。大納言其名を聞き、時に之を幕中に延きて、古道を諮詢す。二年三月、江戸の土功、竣を告ぐ。

● 關者 ● ふるなじみ ● 幕府の中 ● たづねとよ ● 工事出來す

先是。外征諸將取朝鮮。所過殘滅。明氏出軍援之。連戰不決。黑田孝高在行營。

是より先、外征の諸將、朝鮮を取り、過ぐる所殘滅す。明氏軍を出して之を援ひ、連戦して決せず。黑田孝高、行營に在り。議して以爲へらく、元帥其任に堪へず。其任に堪ふる者は新田公なり。不らずんば則ち前田利家、若しくは孝高のみと。秀吉又功成らずして内變あるを慮り、諸將を會して、宣言す、自ら

議以爲元帥不堪其任。堪其任者新田公。不則前田利家。若孝高而已。秀吉又慮功不成。而有内變。會諸將。宣言欲下自與前田利家。蒲生氏郷將三軍入朝鮮。而留大納言守國。大納言即奮辭色。願從行。彈正少弼極諫秀吉。秀吉怒。欲手斬之。諸將救而止。秀吉斥少弼不許見。會肥後寇起。秀吉乃悟。大納言攜少弼入謝。令少弼長子左京大夫討寇。以本多忠勝助而平之。淺野氏嘗坐其臣僞造金幣。獲罪。大納言潛往其家。審實爲白之。事得以免。日益親善。

前田利家・蒲生氏郷と、三軍を將るて朝鮮に入り、而して大納言を留めて國を守らしめんと欲すと。大納言即ち辭色を奮ひて從行を願ふ。彈正少弼、秀吉を極諫す。秀吉怒り、手づから之を斬らんと欲す。諸將救ひて止む。秀吉少弼を斥けて見るを許さず。肥後の寇起るに會ひ、秀吉乃ち悟る。大納言少弼を携へて入りて謝せしむ。少弼の長子左京大夫をして寇を討たしめ、本多忠勝を以て助けしめて之を平く。淺野氏嘗て其臣金幣を僞造するに坐し、罪を獲たり。大納言、潛かに其家に往き、實を審にして爲に之を白す。事以て寢むを得たり。日、益々親善なり。

● 外國征伐 ● 徳川家康 ● 國內の變化 ● 言葉顏色を變へて ● 獎金をつくる

八月。秀吉。庶子。秀頼。生。秀吉。大喜。東歸。大納言。自西。中納言。自東。皆往賀之。豐臣氏。將吏。在朝鮮。竊懷志。因蔽秀吉。曲成和議。弭兵而還。十月。大納言。還江戶。聘藤原肅。待以賓禮。講論益力。

八月、秀吉の庶子秀頼生る。秀吉、大に喜び、東歸す。大納言は西より、中納言は東より、皆往きて之を賀す。豊臣氏の將吏、朝鮮に在るは、竊かに歸志を懷き、秀吉を因蔽し、曲けて和議を成し、兵を弭めて還る。十月、大納言、江戸に還り、藤原肅を聘し、待するに賓禮を以てし、講論益々力む。

三年。春。秀吉。大城。伏見。課諸國。助役。大納言。令榊原康政。論管內將士。貸錢。出役丁。尋自西上。監視。秀吉。要之。共遊吉野。

三年春、秀吉大に伏見に城き、諸國に課して役を助けしむ。大納言、榊原康政をして管内の將士に諭さしめ、格錢を貸し、役丁を出す。尋きて自ら西上して監視す。秀吉、之を要して、共に吉野に遊ぶ。

四月。永井直勝。五位に敘せられ、右近大夫と爲る。大納言の肥前に在るや、秀吉其營を過ぎて與に語る。直勝出でて茗を進む。秀吉問ひて其名を知る。曰く、是れ往年、池田を獲し者かと。因りて大納言に問ひて曰く、爾時、吾れ卿と學を對す。卿、何を以て我が重濠の兵を攻めざりしかと。對へて曰く、樂田の兵、夾みて之を撃たんことを慮りしなり。抑々公も亦何を以て來り戦はざりしかと。秀吉掌を拊ちて曰く、吾れ誠に餌兵を濠に置き、卿の來るを俟ちて夾みて之を殲さんと欲す。故に往きて戦はざりしのみと。諸將の傍聽する者、皆悦服す。秀吉、是に於て、來りて請ふ、直勝に胃すに豊臣氏を以てせんと。遂に斯命あり。大納言の二女、北條氏に適きて寡となる。秀吉自ら媒し、再び池田信輝の子輝政に嫁して、以て其憾を釋く。次年、又三女を以て蒲生氏郷の子秀行に嫁す。九月、大久保忠世卒す。子忠隣嗣ぎ、小田原を守りて、世子の傳を兼ぬ。

四月。水井直勝。敘五位。爲右近大夫。大納言之在肥前。秀吉過其營。與語。直勝出進。茗。秀吉問知其名。曰。是往年獲池田者乎。因問大納言曰。爾時吾與卿對壘。卿何以不攻我重濠之兵。對曰。慮樂田兵夾擊之也。抑公亦何以不來戰。秀吉拊掌曰。吾誠置餌兵于

四月、永井直勝、五位に敘せられ、右近大夫と爲る。大納言の肥前に在るや、秀吉其營を過ぎて與に語る。直勝出でて茗を進む。秀吉問ひて其名を知る。曰く、是れ往年、池田を獲し者かと。因りて大納言に問ひて曰く、爾時、吾れ卿と學を對す。卿、何を以て我が重濠の兵を攻めざりしかと。對へて曰く、樂田の兵、夾みて之を撃たんことを慮りしなり。抑々公も亦何を以て來り戦はざりしかと。秀吉掌を拊ちて曰く、吾れ誠に餌兵を濠に置き、卿の來るを俟ちて夾みて之を殲さんと欲す。故に往きて戦はざりしのみと。諸將の傍聽する者、皆悦服す。秀吉、是に於て、來りて請ふ、直勝に胃すに豊臣氏を以てせんと。遂に斯命あり。大納言の二女、北條氏に適きて寡となる。秀吉自ら媒し、再び池田信輝の子輝政に嫁して、以て其憾を釋く。次年、又三女を以て蒲生氏郷の子秀行に嫁す。九月、大久保忠世卒す。子忠隣嗣ぎ、小田原を守りて、世子の傳を兼ぬ。

● 茶をナメハ ● 敵を誘はんが爲に設けたる兵 ● 悦びしたかふ ● 媒酌人となり ● 守役

濠。欲_レ俟_二歸來_一夾_レ而_レ殲_レ之。故不_レ往_レ戰_レ耳。諸將傍聽者皆悅服。秀吉於是來請。冒_二直勝_一以_二豐臣氏_一。遂有_二斯命_一。大納言二女。適_二北條氏_一而寡。秀吉自謀。再嫁_レ於_二池田信輝_一子輝政。以_レ釋_二其憾_一。次年。又以_二三女_一嫁_レ蒲生氏郷子秀行。九月。大久保忠世卒。子忠隣嗣。守_二小田原_一。兼_二世子_一傳。

四年。大納言中納言少將共在京師。大饗_二秀吉_一。秀吉既生_二秀賴_一。欲廢_二秀次_一。秀次素淫虐。石田三成增田長盛等從而構_レ之。五月。大納言東還。留_二中納言_一于_二京師_一。戒_レ之曰。秀次將_レ及_レ禍。即來誘。慎勿_レ應_レ之。

四年、大納言・中納言・少將共に京師に在り。大に秀吉を饗す。秀吉既に秀賴を生み、秀次を廢せんと欲す。秀次素より淫虐なり。石田三成・増田長盛等、從ひて之を構す。五月、大納言東還し、中納言を京師に留め、之を戒めて曰く、秀次將に禍に及ばんとす。即し來り誘ふも、慎みて之に應ずる勿れと。七月、秀吉、伏見より使を京師に使し、聚樂の第に就きて秀次を詰らしむ。秀次誓ひて之を遣る。事已に迫るを以て、我が中納言を取りて質と爲し、因りて我が兵を抜きて自ら援はんと欲す。即夜五更、人をして來り告げしめて曰く、關白朝餐を供せんと欲す。請ふ速かに來れと、土井利勝答へて曰く、世子未だ起きず。當に起くるを俟ちて之を告ぐべしと。使者去る。

● 淫風にして醜處なり ● 罪をつくりかまふ ● 今の午前四時 ● 一本に言とあり ● 朝飯を煮上げんと欲す

七月。秀吉自_レ伏見_一使_二京師_一。師_一就_二聚樂_一。第一詰_二秀次_一。秀次誓_レ而遣_レ之。以_二事_一已迫。欲_レ取_二我_一中納言_一爲_レ質。因_レ拔_二我_一兵_一。自_レ授_レ。即夜五更。使_二人_一來告_レ曰。關白欲_レ供_二朝餐_一。請_レ速_レ來。土井利勝答_レ曰。世子未_レ起。當_レ俟_レ起_レ告_レ之。使者去。

利勝告_二大久保忠隣_一。忠隣使_二之_一率_二奔_一伏見。從者六人。議_レ取_二間道_一。利勝直由_二大路_一。南馳。使者復來。促_レ忠隣。故留_レ之。度_二中納言_一已遠。乃出見_レ曰。世子早_レ有_二茶會_一之約。赴_レ于_二伏見_一。秀

利勝、大久保忠隣に告ぐ。忠隣之をして奉じて伏見に奔らしむ。從者六人、間道を取らんと議す。利勝、直に大路より南に馳す。使者、復た來り促す。忠隣、故に之を留め、中納言、已に遠きを度り、乃ち出でて見えて曰く、世子、早に茶會の約有り。伏見に赴けりと。秀次之を聞きて大に悔ゆ。秀吉、中納言の來るを見、悦びて曰く、眞に新田公の子なりと。乃ち書を以て變を江戸に告ぐ。大納言、即ち發す。途に秀次、既に殺さると聞き、程を兼ねて至る。秀吉大に喜ぶ。秀吉、素より刑殺を嗜む。老に及び、喜怒測られず。秀次の獄を治するに至りて、尤も慘酷を極む。

次開之大悔。秀吉見中納言來。悅曰。眞新田公之子也。乃以書告。變江戸。大納言即發。途聞秀次已被殺。兼程而至。秀吉大喜。秀吉素嗜刑殺。及老。喜怒不測。至治秀次獄。尤極慘酷。

● 照と ● 酒川家康公 ● 行程を倍にして至る ● つみ殺すことを好み ● 處刑をなす ● 至極むごたらしいことをなす

三成既陷。秀次遂欲連累諸將異己者。誣伊達政宗爲反黨。秀吉大怒。欲徙政宗于伊豫。政宗在京師。第使三人往伏見。就請大納言營救。大納言不答。賜使者食。食畢。請對。

三成、既に秀次を陷れ、遂に諸將の己に異なる者を連累せんと欲し、伊達政宗、反黨爲りと誣ふ。秀吉大に怒り、政宗を伊豫に徙さんと欲す。政宗、京師の第に在り。人をして伏見に往かしめ、就きて大納言の營救を請ふ。大納言答へず。使者に食を賜ふ。食し畢り、對を請ふ。大納言罵りて曰く、而が主は怯懦なり。與に言ふに足らざるなり。且つ若が輩、伊豫に徙りて魚に餓せんと欲するか。京中に死して狗に餓せんか。必ず一に居らんと。因りて召して之を前め、對を授けて遣歸す。既にして伊達氏の兵、皆甲を裏して謀ぐ。京師、大に擾る。

● まきまへ ● かくひたすけ ● おくびやうなり ● 喰はれること

大納言罵曰。而主怯懦不足與言也。且若輩欲徙伊豫餓於魚乎。死京中餓於狗乎。必居一焉。因召而前之。授對遣歸。既而伊達氏兵皆裏甲而謀。京師大擾。

秀吉聞之大驚。使使詰問政宗。政宗便服出迎。言曰。臣僕從皆曰。失累世之國。漂泊客土。不若死也。臣制止之。輒斥爲法。夫。在目前下者。猶如此。留者在國者。不亦其爲何狀。使者還報。秀吉忠之。會大納言親往申雪。事遂得釋。最上義光女。皆侍秀次。及收被併殺。三成又誣義光。亦爲大納言所殺。衆皆睚眦。三成。而秀吉寵之益甚。三成專權。無復忌憚。而長德川氏。

秀吉之を聞きて大に驚き、使をして政宗を詰問せしむ。政宗、便服出で迎へ、言ひて曰く、臣の僕從皆曰く、累世の國を失ひ、客土に漂泊するは、死するに若かざるなりと。臣、之を制止す。輒ち斥けて怯夫と爲す。目前に在る者、猶ほ此の如し。留りて國に在る者、其の何の狀爲るを審かにせずと。使者還り報ず。秀吉之を患ふ。大納言、親ら往きて申雪するに會ひ、事遂に釋くるを得たり。最上義光の女、嘗て秀次に侍す。取に及びて併せ殺さる。三成、又義光を誣ふ。亦、大納言の救ふ所と爲る。衆、皆三成を睚眦す。而して秀吉、之を寵すること益々甚だし。三成、權を專にして、復た忌憚無し。獨り德川氏を畏る。

● なじりとよ ● ふだんぞを看 ● 他國 ● 罪の甲冑をなす ● 駭かよこと ● 疑少憚るものなし

言親往申雪。事遂得釋。最上義光女。皆侍秀次。及收被併殺。三成又誣義光。亦爲大納言所殺。衆皆睚眦。三成。而秀吉寵之益甚。三成專權。無復忌憚。而長德川氏。

九月、我中納言以秀吉旨娶淺井氏。淺井氏有二姉。秀吉自取其長者。生秀頼。稱淀君。少者嫁京極高次。後稱常光。皆故織田信長外姪也。秀吉夫人淺野氏。稱北廳。及淀君專寵。北廳失勢。石田三成増田長盛小西行長大野治長等皆附淀君。加藤清正福島正則等爲北廳親屬。不取附。清正與行長並爲外征將。爭功相惡。內旨各有所助。及秀頼生。諸將益黨淀君。大納言亦與之。有姻戚。而獨禮北廳。

九月、我が中納言、秀吉の旨を以て淺井氏を娶る。淺井氏に二姉有り。秀吉、自ら其長者を取りて、秀頼を生む。淀君と稱す。少者は京極高次に嫁し、後に常光と稱す。皆故織田信長の外姪なり。秀吉の夫人は淺野氏にして、北廳と稱す。淀君の寵を專にするに及びて、北廳、勢を失ふ。石田三成・増田長盛・小西行長・大野治長等、皆、淀君に附く。加藤清正・福島正則等、北廳の親屬爲り。敢て附かず。清正、行長と並に外征の將と爲り、功を争ひて相惡し。內旨各々、助くる所有り。秀頼生るゝに及びて、諸將、益々淀君に黨す。大納言も亦之と姻戚有り。而して獨り北廳に禮す。

● 年上なる婦 ● 御威なり ● 縁ツマキ

慶長元年五月。詔。以大納言爲内大臣。敍正二位。後二日入朝。是日。秀吉亦以二秀頼入朝。敍從三位。任中將。九月。明及朝鮮使者來。謁。秀吉以三來辭。非其所望。復大徵兵。以明春濟海。而置吏行營。不復親出。十月。酒井忠次卒。十二月。以松平康親爲大番家乘。爲大番

慶長元年五月、詔して、大納言を以て内大臣と爲し、正二位に敍す。後二日入朝す。是の日、秀吉も亦秀頼を以て入朝す。從三位に敍し、中將に任ぜらる。九月、明及朝鮮の使者、來謁す。秀吉來辭の其の望む所に非ざるを以て、復た大に兵を徵す。明春を以て海を濟る。而して吏を行營に置き、復た親ら出でず。十月、酒井忠次、卒す。十二月、松平康親・松平家乘を以て大番頭と爲す。初め内大臣、大番五隊を置き、内藤・永井・栗生三家の子弟を以て頭と爲す。皆、萬石に満たざる者なり。是に於て、一人に諭して曰く、吾れ此職を以て子を累す。子、必ず心に厭かざらん。然りと雖も、世事、未だ定らず。中軍の鋒、子に非ざれば不可なりと。又、井伊・本多・榊原・石川・平岩の五將に命じて伏見に更番し、藤柱に頼して、以て非常に備ふ。三年正月二日、内大臣、吉夢に感じ、潜かに石清水祠に詣つ。

● 格陽成天皇の年號 ● 使者の聲し來る書面の文言秀吉の本望に背く故 ● 大番頭の職を以て貴賤を勞す貴賤定めて不満足ならん

頭。初内大臣置大番五隊。以內藤永井栗生三家子弟爲頭。皆不滿萬石者。於是論二人曰。吾以此職累子。子必不厭心。雖然。世事未定。中軍之鋒。非子不可。又令井伊本多榊原石川平岩五將。更番伏見。頓于藤杜。以備非常。三年正月二日。内大臣感吉夢。潛詣石清水祠。

當是時。内大臣及前田利家毛利輝元上杉景勝浮田秀家等。爲巨藩大老。秀吉嘗會諸侯。而抱秀賴。自室中闚視。問曰。彼列坐者。誰最可畏。輝元狀貌尤魁偉。秀賴指之曰。彼最可畏。秀吉晒曰。否。

是の時に當りて、内大臣及び前田利家・毛利輝元・上杉景勝・浮田秀家等、巨藩大老爲り。秀吉、嘗て諸侯を會して、秀賴を抱き、室中より闚視し、問ひて曰く、彼れ列坐の者、誰か最も畏る可きと。輝元、狀貌尤も魁偉なり。秀賴、之を指して曰く、彼れ最も畏る可しと。秀吉晒ひて曰く、否。首坐の鰲面翁畏る可きのみと。秀吉、内大臣を試みんと欲す。從容として諸將に語りて曰く、弓箭の事、方今乃公に及ぶ者莫しと。諸將皆伏して曰く、誰か敢て殿下を望まんと。内大臣、色を作して聽して曰く、某、此に在り。殿下、未だ此言を出す可からず。殿下、獨り小牧の事を記せざるかと。諸將相顧みて駭栗す。秀吉默然として、起ちて内に入る。諸將、交々内大臣に謂ひて曰く、適く聞く所、公、戲に之を言ふか

首坐鰲面翁可畏耳。秀吉欲試内大臣。從容語諸將曰。弓箭之事。方今莫下及乃公者。諸將皆伏曰。誰敢望殿下。内大臣作色而踴曰。某在於此。殿下未可出此言。殿下獨不記小牧之事乎。諸將相顧駭栗。秀吉默然。起入内。諸將交謂内大臣曰。適所聞公戲言之邪。内大臣曰。否。否。雖太闇有天下。至弓箭之道。僕不肯讓一步。雖觸驪怒。所不避也。頃焉。秀吉復出。談他事而罷。諸將皆謂内大臣善直言也。

と。内大臣曰く、否。否。太闇、天下を有すと雖も、弓箭の道に至りては、僕、肯て一步を譲らず。驪怒に觸ると雖も、避けざる所なりと。頃くして、秀吉復た出で、他事を談じて罷む。諸將、皆内大臣は直言を善くすと謂ふ。

● 部屋の中よりのぞき見 ● ナぐれて大なり ● 色の黒き老翁、家康をいふ ● 軍陣の事只今我れに及ぶ者なし ● 誰か押切つて殿下に匹敵せんと思ふ者ありん ● 小牧の役の事を忘れしか ● 驚きよるよ ● 戰爭に於ては小生すこしも秀吉にまけぬ ● 御叱を受けてもかまはぬ

秀家等再伐朝鮮。與明人戰。不決。自外師興。至此。前後七年。丁壯

秀家等、再び朝鮮を伐ち、明人と戦ひて、決せず。外師興りてより此に至るまで、前後七年なり。丁壯は軍旅に苦しみ、老弱は轉漕に罷る。秀吉も亦自ら倦み、乃ち軍事を度外に置き、獨り秀賴及び諸姫侍と日に宴樂を爲し、奢侈を窮

苦二軍旅。老弱
龍二轉漕。秀吉
亦自倦。乃置三
軍事於二度外。
獨與二秀頼及
諸姫侍一日爲二
宴樂。窮二極奢
修。媼取二快一
時。性素喜二土木。天下未定時。建二方廣寺。造二大佛。索二材諸道。費累二鉅萬金。遇二震而崩。是年。五
月。欲二復更造之。罹二疾而止。

極し媼も快を一時に取る。性、素より土木を喜ぶ。天下、未だ定らざるの時、方
廣寺を建て、大佛を造り、材を諸道に索め、費鉅萬金を累ね、震に遇ひて崩
る。是の年五月、復た更に之を造らんと欲す。疾に罹りて止む。

● 若者は戦争に苦み ● 物資運搬につかる ● 心外に置き ● 只差當りての快樂を事とす ● 性質言
ずきなり ● 大金 ● 地盤のためにくづる

於二是豐臣氏
紀綱二弛。其
中軍將士。與二
諸牧伯。互相
讎視。六月。秀
吉疾篤。召二奉
行。淺野彈正
少弼。石田三

是に於て、豐臣氏の紀綱寢く弛む。其中軍の將士、諸牧伯と互に相讎視す。
六月、秀吉、疾篤し。奉行淺野彈正少弼、石田三成、増田長盛、長束正家、前
田玄以を召して曰く、聞くが如くんば、諸侯、麾下と卻有りと。是れ大亂の本なり。
宜しく相協和して沖子を翼けしむべしと。十六日、五人乃ち大に内外の牧伯將
吏を會して旨を傳ふ。衆對へて曰く、心を協せて嗣君を奉ずるは、則ち敢て命を

成増田長盛
長束正家前
田玄以。曰。如
聞諸侯與二麾
下有二卻。是二大
亂之本也。宜
使二相協和以
翼二沖子。十六
日。五人乃ち大
會二内外牧伯
將吏。傳二旨。衆
對曰。協二心。奉二
嗣君。則敢不
奉二命。至於二私
憾。各有二所由。
不能二輒聽從。
告諭再三。終
弗肯也。秀吉乃
召二内大臣。告
之曰。願以二煩
卿。内大臣乃出
而論之。衆對如
初。内大臣作二色
厲聲曰。公等已
言二協心。奉二上
者。猶挾二私怨
乎。果挾二私怨
也。衆屈服頓首
曰。唯。唯。謹奉
命。命二五人。大
饗衆。

奉ぜざらんや。私憾に至りては、各々由る所有り。輒ち聽從する能はずと。告
諭すること再三なるも、終に肯せず。秀吉乃ち内大臣を召し、之に告げて曰く、
願はくは以て卿を煩さんと。内大臣乃ち出でて之を諭す。衆、對ふること初の如
し。内大臣、色を作し聲を厲して曰く、公等、已に心を協せて上を奉ずと言ふ。
心を協せて上を奉ずる者、猶ほ私怨を挾むか。果して私怨を挾むならば、是れ貳
を懐くなり。安んぞ其の上を奉ずるに在らんやと。衆、屈服頓首して曰く、唯。
唯。謹みて命を奉ぜんと。内大臣入りて報す。秀吉、大に喜び、五人に命じて、
大に衆を饗せしむ。

● 政治次第にゆるむ ● 諸の大小名と互ひにかたきとなりてにちみあふ ● 力を合せ和きて ● 幼子即ち
秀頼をさす ● 私のうちみの事は各自に理由存すればたやすく御命令に従ふこと能はず ● 二心を懐くなり

弗肯也。秀吉乃召内大臣告之曰。願以煩卿。内大臣乃出而論之。衆對如初。内大臣作色厲聲曰。公等已言協心奉 upper 者。猶挾私怨乎。果挾私怨也。衆屈服頓首曰。唯。唯。謹奉命。命五人。大饗衆。

衆復争坐位。雜席而食。及酒行。皆離次。忿諍。中村一氏生駒親正傳旨。周旋。不能定。復入告。內大臣。內大臣復出。詔而按劔曰。公等賣家康。一乎家康以公等言。報太閤。太閤乃喜。賜此餐。公等猶尙如此。非賣而何。舉坐皆我仇敵。我誓不縱一人。因顧五門人。趣關諸門。

衆復た坐位を争ひ、雜席して食ふ。酒行るに及び皆、次を離れて忿諍す。中村一氏、生駒親正、旨を傳へて周旋す。定むる能はず。復た入りて内大臣に告ぐ。内大臣復た出で、蹠して劔を按じて曰く、公等、家康を賣るか。家康、公等の言を以て太閤に報す。太閤、乃ち喜びて此餐を賜ふ。公等猶ほ尙ほ此の如し。賣るに非ずして何ぞや。舉坐皆我が仇敵なり。我れ誓ひて一人を縦さずと。因りて五人を顧み、趣して諸門を關さしむ。一坐、豐服し、敢て聲を出す莫し。淺野・中村・傍より之を慰藉し、衆をして罪を謝せしめ、更に獻酬し、謹を爲して罷む。明日、秀吉之を聞き、内大臣を召して曰く、曩昔の事、古の名將と雖も、過ぐる能はず。卿の威信、素より衆に著るゝに非ずんば、則ち安んぞ能く此の如くならんやと。涕を垂れて之を謝す。

● 坐席の上下を争ひ ● しかり争ふ ● 秀吉の言をうけて取直れども諍むること能はず ● 家康を偏る
 か ● 一應皆我が敵なり ● 恐入る ● 前後のこと

一坐豐服。莫敢出聲。淺野中村自傍慰藉之。使衆謝罪。更獻酬。爲謹而罷。明日。秀吉聞之。召內大臣曰。曩昔之事。雖古名將。不能過焉。非卿威信素著於衆。則安能如此哉。垂涕謝之。

秀吉已憂內難。又悔外征。欲班師鎮國。而兵連弗解。又恐明朝鮮乘費來侵。計不知所出。七月。終召內大臣。盡以事後事。委託之。曰。秀頼當立與否。一在卿之心。內大臣謝曰。敢當。秀吉曰。天下莫若卿者。故不得。不煩卿。內大臣

秀吉、已に内難を憂へ、又外征を悔い、師を班して國を鎮せしめんと欲す。而して兵連りて解けず。又明・朝鮮の喪に乗じて來り侵さんことを恐れ、計、出づる所を知らず。七月、遂に内大臣を召して、盡く後事を以て之に委託して曰く、秀頼の當に立つべきと否とは、一に卿の心に在りと。内大臣敢て當らずと謝す。秀吉曰く、天下、卿に若く者莫し。故に卿を煩さざるを得ずと。内大臣、固辭して退く。秀吉、石田三成・増田長盛を召して之を議す。二人、素より異謀有り。因りて大に諫む。以爲ふに、専ら徳川に託すこと勿れと。秀吉、之を然りとし、乃ち五大老・三中老、五奉行を定め、前田利家をして秀頼を輔けしむ。已にして伏見の城下、一夕大に擾る。井伊直政、藤杜より馳せ至る。内大臣、直政と天野康景とをして出でて之を調はしむ。還り奉じて曰く、石田・大野氏に甲有り。諸第相告

固辭而退。秀吉召石田三成増田長盛。二人素有不異謀。因大諫。以爲勿專。託諷川。秀吉然之。乃定。五大老三中老五奉行。使前田利家輔秀頼。已而伏見城下一夕大擾。井伊直政自藤杜馳至。內大臣使直政與天野康景出調之。還報曰。石田大野氏有甲。諸第相告自備。故致此騷擾也。已而事定。人莫知其故者。水野勝成爲父忠重所逐。歷游西國。聞警來歸。請自效。內大臣悅。諭忠重宥之。

けて自ら備ふ。故に此騷擾を致せりと。已にして事定る。人、其故を知る者莫し。水野勝成、父忠重の逐ふ所と爲り、西國を歴游す。警を聞きて來歸し、自ら效さんと請ふ。内大臣悦び、忠重に諭して之を宥さしむ。

● 同内の亂 ● 死後の事をたのみて ● 適任者に非ずと辭退す ● 謀叛の心あり

八月五日。秀吉召内大臣。曰。以卿固辭。今則悔之。而令已布矣。雖雄武強任。誰若卿者。卿

八月五日、秀吉、内大臣を召して曰く、卿、固辭するを以て、列老、奉行を置く。今は則ち之を悔ゆ。而して令已に布く。然りと雖も、雄武強任、誰か卿に若く者ぞ。卿、當に諸人に冠して軍國の事を統ふべしと。乃ち諸將の盟誓を要す。旬餘にして、城中に薨す。彈正少弼及び石田三成に遺命し、秘して喪を發せざらしむ。三成、素より少弼の内大臣に善きを惡む。乃ち之を給きて曰く、喪を秘す

るに當に計を以るべし。吾と子と魚を内府に貽りて、以て外人に視さんと。少弼之に従ふ。其明、内大臣、中納言を以て城に入りて疾を問ふ。途に三成と遇ふ。三成、人をして密かに之に計せしむ。

● 五大老三中老 ● すぐれ強く能く事に任ふる ● 先立ちて ● 吾と足下と魚を内大臣に貽りて他人に示して喪中にあらざるごとく疑はん ● 家康に秀吉の死を報せしむ

當冠諸人一統軍國事。乃要諸將盟誓。旬餘。薨於城中。遺命彈正少弼及石田三成。成。秘不發喪。三成素怒少弼。弼之善。內大臣也。乃給之曰。秘喪當以計。吾與子貽魚於內府。以視外人。少弼從之。其明

内大臣還。歎曰。治部疎於我者也。猶告大故。彈正何以外我乎。人心固不易測也。即夜命世子治行。且日

内大臣還り、歎じて曰く、治部は我に疎き者なり。猶ほ大故を告ぐ。彈正、何を以て我を外にするか。人心、固より測り易からざるなりと。即夜、世子に命じて行を治めしめ、且日江戸に遣歸して以て、本國を鎮せしむ。九月、少弼及び三成に命じ、遺命を以て那古耶に赴き、外師を班さしむ。徳永壽昌を遣して海を濟り、密かに諸將に令す。十月、訛言有り、明、大舉して我が歸路を扼すと。内大臣曰く、我

遣歸江戶。以鎮本國。九月。命少弼及三成。以遺令赴那古耶。班外師。遣德永壽昌。濟海。密令諸將。十月。有詛言。明大舉。扼我歸路。內大臣曰。我不可。不親往。前田利家。廢疾。聞之曰。內府一動。則海內搖矣。我當與疾往肥前。指揮諸將。衆皆止之。以三藤堂高虎。習外事。請遣之。內大臣曰。然。乃使高虎代往。外師已大克。而還。十一月。盡至伏見。內大臣與諸老。俱慰勞之。

れ親ら往かざる可からずと。前田利家、疾に寢す。之を聞きて曰く、内府一たび動かば、則ち海内搖かん。我れ當に疾に興して肥前に往き、諸將を指揮すべしと。衆皆之を止む。藤堂高虎、外事に習ふを以て、之を遣らんと請ふ。内大臣曰く、然りと。乃ち高虎をして代り往かしむ。外師、已に大に克ちて還り、十一月、盡く伏見に至る。内大臣、諸老と俱に之を慰勞す。

- 秀吉の死去
- 人の心はまことに頼まれぬものなり
- 旅行の準備をなましめ
- 征伐の軍を引上げしむ
- 天下亂れん
- 病中なれど獨龍に乗りて

卷二十一

德川氏正記

德川氏四

慶長四年正月。正。伏見。代。豐臣。秀吉。權。決。二。天。下。事。與。大。納。言。前。田。利。家。中。納。言。毛。利。輝。元。中。納。言。上。杉。景。勝。參。議。浮。田。秀。家。式。部。少。輔。中。村。一。氏。雅。樂。頭。生。駒。親。正。

慶長四年正月、内大臣、伏見に在り。豐臣秀吉に代りて、權に天下の事を決す。大納言前田利家・中納言毛利輝元・中納言上杉景勝・參議浮田秀家・式部少輔中村一氏・雅樂頭生駒親正・帶刀堀尾吉晴・彈正少弼淺野某・治部少輔石田三成・右衛門尉増田長盛・大藏少輔長束正家・法印前田玄以と、俱に外征諸將の功を論じ、天朝に奏請す。鳥津義弘の我が國兵を全くせし功最も大なるを以て、參議に任じ、其子忠愼を左近衛少將に任じ、封四萬石を加へ、刀劍を賜ふ。其餘、賞を行ふことと差有り。

- 後關成天皇の年號
- 天子に奏聞して御許を請ふ
- 次第あり

帶刀堀尾吉晴。彈正少弼淺野某。治部少輔石田三成。右衛門尉增田長盛。大藏少輔長東正家。法印前田玄以。俱論外征諸將之功。奏請天朝。以下島津義弘。全我國兵。功最大。任參議。其子忠恆。任左近衛少將。加封四萬石。賜刀劍。其餘行賞有差。

豐臣秀吉之薨也。嗣子秀賴猶幼。內外疑懼。口耳相聞。石田三成。增田長盛。相與謀曰。德川與前田協心。出政。我輩徒爲其所驅役。方今之計。莫若離二家。二家已離。乃可以逞。二人乃爲相惡者。長盛事我。三成事利家。利家

豐臣秀吉の薨するや、嗣子秀賴、猶ほ幼し。内外、疑懼して、口耳相屬す。石田三成・増田長盛、相與に謀りて曰く、徳川と前田と心を協せて政を出す。我が輩徒に其の驅役する所と爲る。方今の計、二家を離すに若くは莫し。二家已に離れば、乃ち以て逞しくす可しと。二人、乃ち相惡む者の爲して、長盛は我に事へ、三成は利家に事ふ。利家嘗て内大臣を饗せんと欲す。期已に定る。長盛、遽かに來り、めて曰く、大納言將に公に利あらざらんとすと。乃ち疾に託して饗を辭す。他日、長盛、利家に謂ひて曰く、曩には流言有り。内府、是を以て辭す。今は事已に白す。公、復た之を請へと。利家曰く、前日の事、吾れ辱しめらるること已に甚だし。吾れ再び辱を被るに堪へずと。長盛、固く請ひて曰く、内府、來らざるを悔ゆ。苟も之を請はば、必ず欣然として來らんと。利家、之に

從ふ。

- 口をつけてひそくと話し合ふ
- 驅り使はるゝ所となる
- 思ふ通りには振舞ふことを得可し
- 期日
- 已に決定す
- 言ひよらし
- 明白となる
- よるこんで

嘗欲饗内大臣。期已定。長盛遠來。警曰。大納言將不利於公。乃託疾辭饗。他日長盛謂利家曰。曩有流言。内府是以辭。今事已白矣。公復請之。利家曰。前日之事。吾辱已甚。吾不堪再被辱。長盛固請曰。内府悔不來也。苟請之。必欣然來。利家從之。

長盛、馳せて内大臣に見えて曰く、利家の奸計既に成る。公愼みて往く勿れと。内大臣曰く、吾れ再び之を辱しむるに忍びずと。期に及びて將に駕せんとす。長盛、復た至り、密移を袖より出して之を示す。内大臣驚き怪しみ、乃ち事に託して往かず。利家慚憤す。細川忠興は利家と姻有り。利家召して之に語りて曰く、吾れ老衰し、人の侮る所と爲る。何の面目ありて世に立たんや。吾れ將に國に歸らんとすと。忠興曰く、公の愼は固より宜なり。然れども、遺命を廢て沖子を棄てて、自ら引きて國に之くは、是れ自ら威權を捨てて、嗤を人に取るなり

長盛馳見内大臣。曰。利家奸計既成。公愼勿往。内大臣曰。吾不忍再辱之。及期將駕。長盛復至。出密移於袖。示之内大臣。驚怪。乃託事不往。利家

長盛、馳せて内大臣に見えて曰く、利家の奸計既に成る。公愼みて往く勿れと。内大臣曰く、吾れ再び之を辱しむるに忍びずと。期に及びて將に駕せんとす。長盛、復た至り、密移を袖より出して之を示す。内大臣驚き怪しみ、乃ち事に託して往かず。利家慚憤す。細川忠興は利家と姻有り。利家召して之に語りて曰く、吾れ老衰し、人の侮る所と爲る。何の面目ありて世に立たんや。吾れ將に國に歸らんとすと。忠興曰く、公の愼は固より宜なり。然れども、遺命を廢て沖子を棄てて、自ら引きて國に之くは、是れ自ら威權を捨てて、嗤を人に取るなり

慚憤。細川忠興與利家有姻。利家召而語之曰。吾衰老。爲人所侮。何面目立世乎。吾將歸國也。忠興曰。公之憤固宜。然廢遺命。棄冲子。而自引之國。是自舍威權。而取嗤於人也。利家乃止。而終與我有隙。是月。利家奉秀賴。徙居大坂。內大臣送之而還。舟至平瀨。見岸上有兵。衆失色。以爲大坂人追躡也。或曰。得非井伊兵來迎乎。近則果然。乃使殿而還。

と。利家乃ち止む。而して終に我と隙有り。是の月、利家、秀頼を奉じて徙りて大坂に居る。内大臣、之を送りて還り、舟、平瀨に至りて、岸上に兵有るを見る。衆、色を失ふ。以爲へらく、大坂の人追躡するなりと。或ひと曰く、井伊の兵の來り迎ふるに非ざるを得んやと。近づけば則ち果して然り、乃ち殿せしめて還る。

● わるだくみ ● 粟物に乘らんとす ● 秘密の事を書きたる書面 ● 恥ぢ慣る ● 秀頼をさす ● 河内國に在り ● 後より追ひ來る

當是時。天下牧長豪傑。人人有自立之志。

是の時に當りて、天下の牧長豪傑、人人、自立の志有り。而して概ね皆徳川氏を忌み、相與に之を圖らんと欲す。一日、内大臣散樂を有馬氏に觀る。井伊直政

志。而概皆忌徳川氏。相與欲圖之。一口。內大臣觀散樂。于有馬氏。井伊直政來。請問曰。今日外間騷擾。恐有變。宜及未昏還也。藤堂高虎繼至。密語久之。共扶而出。關東士民在京畿者。更相告言曰。我君將有難。盍往護之。衆護第者數百人。先是。伊達政宗以二上總

來り、間を請ひて曰く、今日、外間騷擾す。變有らんを恐る。宜しく未だ昏れざるに及びて還るべしと。藤堂高虎繼ぎて至り、密語すること之を久しくす。共に扶けて出づ。關東の士民の京畿に在る者、更に相告げ言ひて曰く、我が君將に難有らんとす。盍ぞ往きて之を護せざると。來りて第を護する者數百人なり。是より先、伊達政宗は上總介忠輝を以て女婿と爲し、福島正則は松平康元の女を以て婦と爲し、蜂須賀至鎮は自ら小笠原秀政の女を娶る。康元は内大臣異父弟の子にして、秀政は、故の世子信康の婿なり。諸老、奉行、人をして三家の私に婚して遺令に背くを讓めしむ。三家分疏して服せず。諸老、奉行遂に連署して來り誚め、政柄を解かしむ。内大臣曰く、我れ固より政を執るを欲せざるなり。諸公、我を厭ふ。我れ當に引き去るべしと。是に於て、我が諸將、前日の變故の皆蹤跡有るを以て、之を反詰す。京畿、騷然たり。

● 大小名 ● 龜樂 ● 内訶話 ● 危難にかゝらんとす ● むすめの儀 ● 秀吉の遺言したる命令 ●

介忠輝爲女
 婿。福島正則
 以松平康元
 女爲婦。蜂須賀至鎮自娶小笠原秀政女。康元内大臣異父弟之子。秀政者。故世子信康之婿也。諸老奉行使人讓三家私婚背遺令。三家分疏不服。諸老奉行遂連署來請。使解政柄。内大臣曰。我固不欲執政也。諸公厭我。我當引去。於是。我諸將以三前日變故皆有蹤跡。反詰之。京畿騷然。

言分して服従せず ① 連名して ② 政治をとることを止めしむ ③ 秀吉死去の際に於ける隠謀の證ありを以て ④ あべこべに詰る

黒田孝高。其子長政。福島正則。池田輝政。藤堂高虎。細川忠興。京極高次。織田長益。加藤清正。加藤嘉明。蜂須賀家政。森忠政。有馬則頼。金森長

黒田孝高、其子長政・福島正則・池田輝政・藤堂高虎・細川忠興・京極高次・織田長益・加藤清正・加藤嘉明・蜂須賀家政・森忠政・有馬則頼・金森長近・山岡景友・新莊直頼等、獨り心を我に歸し、毎夜來り護して事を議す、或ひと京極氏の天津城に入るを勸む。内大臣肯せずして曰く、是の際に當りて、一步を進めば勢を得、一步を退けば勢を失ふと。乃ち止む。榊原康政、更番を以て勢多に至り、警を聞きて疾く馳せて天津に至り、故に止りて進まず。關を塞ぎて以て行人を壅む。行人、墳咽す。乃ち關を開きて之を通す。京師以爲へらく、東兵大に至ると。黨人

近。山岡景友。新莊直頼等。獨歸心於我。每夜來護。事或勸入。京極氏大臣不肯。内大臣是之際。進一步得勢。退一步失勢。乃止。榊原康政以三番至。勢多。關警。疾馳至天津。故止不進。塞關。以類行人。行人墳咽。乃開關。通之。京師以爲。東兵大至也。黨人之計。以故大沮。本多正信。伊奈忠次等。適監稅四上。亦兼程至。内大臣延正信問謀。且曰。三中老調停尋盟。要我於大坂。可往否。正信曰。不可。因問曰。淺野

の計、故を以て大に沮む。本多正信・伊奈忠次等、適々稅を監して西上す。亦程を兼ねて至る。内大臣、正信を延きて謀を問ひ、且つ曰く、三中老、調停して盟を尋ね、我を大坂に要す。往く可しや否やと。正信曰く、不可なりと。因りて問ひて曰く、淺野彈正は近ごろ何の狀を爲すと。曰く、亦、平生に負きて、久しく此に來らずと。正信即ち淺野氏に赴き、與俱に來る。大内臣讓めて曰く、吾と子と親睦すること日久し。太閤の喪、治部猶ほ我に計す。子、何ぞ獨り我を欺くかと。彈正少弼、始めて三成の賣る所と爲るを知り、流涕して陳謝す。是より益々心を傾く。

① かはるがはる勢多に至り ② わざと止めて進行せず關所をよそぎて通行人をとむ ③ 満ち盛かる ④ 三成等の謀事 ⑤ 中に立ちて取扱ふ ⑥ 如何なる行ひをなし居るか ⑦ 親みなじむ ⑧ 欺かれたるを知り ⑨ 謀を流して詫ふ

彈正近爲何狀。曰。亦負二十生。久不來。此。正信即赴淺野氏。與俱來。內大臣讓曰。吾與子親。曠日久。太閤之喪。治部猶計於我。子何獨欺我乎。彈正少弼始知爲三成所賣。流涕陳謝。自是益傾心焉。

而三成等務。惟戴前田氏。勸除德川氏。利家嗣子利長密告之。細川忠興。忠興曰。呼。子亦爲治部所欺也。利長色變。忠興曰。子悔告我乎。前田氏存亡。將決於此。不取不忠謀。生死必與子俱。子勿憂。利長大悟曰。微子。我殆不

而して三成等、務めて前田氏を推戴し、徳川氏を除かんことを勸む。利家の嗣子利長、密かに之を細川忠興に告ぐ。忠興曰く、呼、子も亦治部の欺く所と爲ると。利長色變ず。忠興曰く、子、我に告ぐるを悔ゆるか。前田氏の存亡、將に此に決せんとす。敢て忠謀せずんばあらず。生死必ず子と俱にせん。子憂ふる勿れと。利長大に悟りて曰く、子微りせば、我れ殆ど免れじ。請ふ、子を煩して家君を諫めんと。忠興乃ち入り、利家を諫めて曰く、治部、公を推戴す、公、其情を知るか。彼れ事權を專にせんと欲す。而して内府と公とを憚る。乃ち公の力を假りて以て徳川氏を除かんと欲す。今日、徳川を除かば、明日は前田に及ばん。公、獨り此に暗きか。公、其奸を稔知せるに、今、乃ち其計中に在りて、自ら知らざるなり。夫れ内府の雄資智略、諸將其右に出づる者無し。彼が輩、百計、之を圖る

も、適に竟に自ら禍せんのみ。公、彼が輩と共に其禍を被らんより、自ら内府に結びて、以て子孫の計を爲すに若かざるなりと。利家領きて曰く、然り。唯、子、我が爲に之を計れと。

- 推したいやく
- 存するか亡ぶるか
- 忠實に聽らざる可からず
- 父即ち利家
- 深く知る
- 三成の謀計中に在り
- 子孫萬全の計

免。請煩子諫。家君。忠興乃入。諫利家曰。治部推戴公。公知其情乎。彼欲專事權。而憚内府與公。乃欲假公力。以除徳川氏。今日除徳川。明日及前田。公獨暗於此乎。兵稔知其好。今乃在其計中。而不自知也。夫内府雄資智略。諸將無不出其右。彼輩百計圖之。適竟自禍耳。公與彼輩共被其禍。不若下自結於内府。以爲子孫之計也。利家領曰。然。唯子爲我計之。

忠興即夜赴。伏見比曉。來入我第。具告以故。自是忠興屢往來。兩府。而憚外人指目。被簀笠。

忠興、即夜、伏見に赴き、曉くる比、來りて我が第に入り、具に告ぐるに故を以てす。是より忠興、屢々兩府に往來す。而して外人の指目を憚り、簀笠を被りて自ら舟を操る。時に利家、疾有り。忠興、淺野・加藤等と、俱に其の疾を力めて伏見に赴き、内大臣に面せんことを勸む。利家之に従ふ。内大臣、輕舸に乗

自操舟。時利家有疾。忠興與淺野加藤等俱勸其力疾赴伏見。而內大臣利家從之。內大臣乘輕舸迎入。第手設尊使。利家悉語諸奉行密謀。勸我徒向島第。以絕觀。曰。吾百歲後。公幸善視我兒。內大臣許諾。利家喜而去。忠興又請我往答之。內我臣許之。

りて迎へて第に入り、手づから尊を設けて坐せしむ。利家悉く諸奉行の密謀を語り、我に勸めて向島の第に徙りて、以て觀を絶たしむ。曰く、吾れ百歳の後、公、幸に善く我が兒を視よと。内大臣、許諾す。利家、喜びて去る。忠興又我に請ひて往きて之に答せしむ。内大臣之を許す。

- 大坂、伏見の間
- 人目を憚り
- 早舟
- うかひねらふ
- 死後

三月。内大臣欲赴大坂。三成故縱流言。以沮其行。欲使利家忿之。福島正則又

三月、内大臣大坂に赴かんと欲す。三成故に流言を縦ちて、以て其行を沮み、利家をして之を忿らしめんと欲す。福島正則又諫めて曰く、大坂は奸人の巢窟なり。輕くしく入る可からずと。大内臣曰く、亞相來る。答せざる可けんや。吾れ警備有り。奴輩何をか能く爲さんと。十一日、遂に行く。少將秀康留守す。

諫曰。大坂奸人巢窟。不可輕入。内大臣曰。亞相來。吾有警備。奴輩何能爲。十一日。遂行。少將秀康留守。加藤池田細川福島黑田淺野諸將皆從。以弓銃設水陸。細川忠興以下。與利家有姻。遣父藤孝侍。舟中。其實質之也。舟至大坂。岸有女與。一人自輿中出。視之。藤堂高虎也。進曰。道路恐有變。宜御此而行。内大臣從之。入高虎中島第。終詣利家。利家扶起迎謝。利家次子利政有異心。爲兄利長所制而止。及饗。諸將皆侍。利政佩利刃。將近内大臣。利長目攝之。利政不敢發。其夜。

加藤・池田・細川・福島・黒田・淺野の諸將、皆從ひて、弓銃を以て水陸を護す。細川忠興、利家と姻有るを以て、父藤孝を遣して舟中に侍せしむ。其實は之を質とするなり。舟大坂に至る岸に女輿有り。一人、輿中より出づ。之を視れば、藤堂高虎なり。進みて曰く、道路、變有らんことを恐る。宜しく此に御して行くべしと。内大臣之に従ひて、高虎の中島の第に入り、終に利家に詣る。利家喜び、扶けられて起きて迎謝す。利家の次子利政、異心有り。兄、利長の制する所と爲りて止む。饗に及びて、諸將皆侍す。利政、利刃を佩びて、將に内大臣に近づかんとす。長利之を目攝す。利政、敢て發せず。其夜、内大臣、復た高虎の第に宿す。

- 奸佞なる者のすみか
- 大將利家をさす
- 一本に字を存とせり、警戒の準備あり
- 婦人の乗物
- 乘りて
- 出迎へて謝す
- 密する心
- 殺利なる刀
- 目をつけてはなさず

内大臣復宿高虎第一

諸奉行會于小西行長宅。獨彈正少弼以我館伴辭弗往也。三成議曰。内府亞相復協矣。我輩將無唯類。爲之何如。行長建策曰。吾訪今夜襲藤堂氏。縱火攻之。不則要之歸途。可以獲志。前田玄以素歸心於我。因沮之曰。嗣君未長。我輩

諸奉行、小西行長の宅に會す。獨り彈正少弼、我が館伴たるを以て辭して往かず。三成、議して曰く、内府・亞相復た協ふ。我が輩將に唯類無からんとす。之を爲す何如と。行長策を建てて曰く、吾れ請ふ、今夜、藤堂氏を襲ひ、火を縱ちて之を攻めん。不らずんば則ち之を歸途に要して、以て志を獲可しと。前田玄以素より心を我に歸す、因りて之を沮して曰く、嗣君未だ長せず。我が輩、諸老の令を受くるは、固より其分なり。今私に兵を動して、天下の約に背かば、縱使志を得るも、豈に能く晏然たらんや。且つ諸宿將、皆内府を護る。輒く志を得可からず。交戦せしめて、結秀城康、東兵を以て來り援はば、必ず大に敗れんと。増田長盛も亦之を然りとす。長東正家曰く、且く之を讓せんと、讓還り報じて曰く、中島列炬、星の如しと。乃ち止む。明日、内大臣北に還る。榊原康政、前驅と爲り、井伊直政、後拒と爲り、遂に伏見の第に歸る。

● 旅館のもてなし役 ● あとに獲る者 ● かへりみちに待受けて ● 平然 ● 一本に炬火とあり、炬火をともしつらぬ

受諸老之令。固其分也。今私動兵。背天

下約。縱使得志。豈能晏然哉。且諸宿將皆護内府。不可輒得志。交戦不決。而結城秀康以東兵來援。必大敗矣。増田長盛亦然之。長東正家曰。且讓之。讓還報曰。中島列炬如星。乃止。明日。内大臣北還。榊原康政爲前驅。井伊直政爲後拒。遂歸伏見第一。

三成等悔恨。又謀襲擊我第。以爲非。我忠興則事不可成也。乃因玄以詩忠興。唱以大封。忠興密告之。諸將諸將曰。且可伴聽。以探其謀。忠興乃與三成會于

三成等、悔恨し、又我が第を襲撃せんと謀る。以爲へらく、忠興を擧ぐに非ずんば、則ち事、成る可からずと。乃ち玄以に因りて忠興に請ひ、唱すに大封を以てす。忠興、密かに之を諸將に告ぐ。諸將曰く、且く伴り聽きて以て其謀を探る可しと。忠興、乃ち三成と長東氏に會す。三成に問ひて曰く、内府を除かんと欲するに、何の策か有ると。三成曰く、我れ其邸を讓するに、邸兵僅かに一千なり。邸側の宮部氏・福原氏は皆我が黨たり。而して其宅頗る高し。我れ衆を率ゐて之に據り、臨みて火箭を放ち其の火を避くるを俟ちて、迫るに鳥銃を以てせば